
流星のロックマン 星の民の宿命

B l u e - D

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン 星の民の宿命

【Nコード】

N7014I

【作者名】

Blue-D

【あらすじ】

スバルたちの生活を激変させた夏休みは終わり、二学期になった。星河スバルの周りで星の民の力が覚醒し、世界を揺らしていた。世界の壁を越えた先に見えるもうひとつの真実と偽り。

2000年の時を越えて甦る伝説の血が世界を揺るがす力となり、世界は時を、空間を、世界をも越えて、冷徹な運命に少年は何を見るのか。

今は第2章、スバルたちに迫る危機、ミソラは何を知ったのか、スバルたちに迫る絶望に、今、ゴン太、ジャック、ツカサの力が覚醒

する。

流星のロックマン 星の民の伝説の続編です。

現在星の民の

伝説のあらすじを活動報告に簡単に掲載しているのでこれで最低限読めればうれしいです。

第一話 エピローグ

夜空を駆ける、流れ星を今、見つけれたら、何を祈ろうかな？
旅立ってしまった彼との約束かな？
それとも、ここから逃げ出すこと？

私は、体育座りをしながら、夜空を眺めて、考えていた。

彼は、突然やってきて、突然すぎるほど去ってしまった。

話したい・・・

あやまりたい・・・

でも、無理なのかな？

あなたは・・・助けてくれたのに・・・

あなたは、めずらしく、笑顔を見せてくれて、血だらけの右手を私に差し出した。

私は、血にまみれたあなたを見て、泣いちゃった。

そして、あなたは君に迷惑をかけたくないと言って、行ってしまった。

その時、約束したよね。

・・・必ず、再会しようって。

会えるよね、いつか・・・必ず。

「そうだよね、セツナ」

その時、約束したよね・・・

・・・必ず、再会しようって。

第二話 グリッドとの出会い（前書き）

光 ミカゲ

今の服装は水色にピンク色の水玉の半袖に男物の青のジーパンをはいている。

髪の毛は薄い黄色に少し金色が混じっていて、前髪が目にかかるくらい、横髪が頬に当たるくらいまで曲線を描いている、後ろ髪は肩を少し過ぎるくらい。

性格は好奇心旺盛、独自、独特の感性を持っている。

口調は、う、を抜かした話し方をする。

第二話 グリッドとの出会い

私は昨日、ナイトメアと呼ばれる集団に誘拐されてしまった。私は今まで家を出ることは滅多になかったので不安と同時に、彼との再会への第一歩にしたいと思っていた。

こうして私は、新たな生活を始めることになった。

私は変な男に呼ばれて、ある部屋に案内された。

そこはモニターと巨大な装置が整理されて並べられていた。そして目の前の回転イスが回転して私に向いてきた。

「やあ、初めまして、僕はグリッド。」

よろしくね」

彼はにこやかな笑顔を私に向けてくれた。

私が初めて会った男の人、セツナとはまた、違った人だ。

私は体をくすめながら挨拶する。

「名前は？」

「光・・・ミカゲです」

今、ほんの一瞬だけグリッドは、ニヤツと笑った気がした。

「ミカゲちゃんね。」

ねえ、君は何を求めているの？」

「えっ？」

そんなこといきなり言われても・・・

脳裏に浮かぶのは、あの時、何もできなかった、自分の姿。

・・・決めた。

「・・・男の子にも負けない、守りたい者を守るような、強い力が・・・ほしいです！」

「そっか、なら、戦いや特訓しようか、でも女の子ってみんなが知ると手加減とかするし・・・」

グリッドはしばらく黙りこむ。

私はその間に興味があったモニターの映像を見ることにした。

ピンクのフードのかぶる少女、ミソラちゃんが電波変換してロックマンを助けているシーンだ。

いいなあ・・・強くって、みんなを助けれて。

あんなフードで髪の毛を隠して、男の子の服とかを着れば、いいかな？

「すみま・・・はわっ！」

私が彼に向かって一歩踏み出したら、何かに引っかかってベチンと音をたてて転んだ。

しかも何かのスイッチを押したらしく、中央モニターの映像が変わった。

「大丈夫かい？」

「イテテ、だいじょうぶです」

私は起きあがると中央モニターにはさっきの映像が流れていることに気づいた。

「あの・・・フードで髪の毛を隠して男の子の服を着ればバレないんじゃない・・・」

「いいね、それ」

グリードは部屋から黒のフード付きの長袖を差し出してくれた。

私は思わず顔をほころばせた。

「気に入ってくれた？」

「はい！　ありがとうございます！」

「じゃ、特訓に行こうか」

「はいっ」

私はグリードと一緒に移動を始めた。

第三話 夜空を見上げて

僕はナイトメア隊員育成施設の屋上で腕を組みながら、北斗七星と北極星を眺めていた。

最近はこの行動ばかりをしている。

その気になれば、ここを抜け出す自信はある。

だが、あれを取り返さないとならない……

「マスター、そろそろ就寝時間です」

ハンターから僕のウィザード、シャルが話してきた。

「わかった、シャル」

僕は腰をあげると部屋に戻る。

「シャル……僕は……」

「どうした？」

「……いや、なんでもない」

「そうか」

僕は自室に入るとベットに入る。

脳裏を不意によぎったのはあの時の記憶。

おびえる少女、僕の血に染まった手と額、真つ赤な視界。

もう一つ来た。

迫る敵をひたすら倒していく日々、虐待に等しい訓練。

僕は……

……違う、違うんだ。

絶対に……違うんだ。

僕は、過去も……力も……名前も捨てた。

イライラする、僕はポケットからガムを取り出すと口に放り込む。

……今週はナイトメアサバイバルのある週だ。

これ以上戦いたくはないが、殺されるわけにもいかないんだ。

いつものように、手を抜いて、逃げながらクリアを目指すしかない。その時だった。

ドアを叩いた音が聞こえてきた。

いままで、この時間にドアを叩いてきたのは喧嘩を売ってきた十歳後半のヤツが仲間を連れてきた時だ。

もちろん負けるワケもなく、倒してやった。

とりあえず、部屋をでるところらの管理者がでてきた。

グリードと言うヤツが僕に興味があるらしいな、呼んでこいと言われたらしい。

僕は目を擦りながらグリードに会いに行くため、歩きだした。

第四話 誘いと条件（前書き）

第三話に出てきた少年

怪物の頭骨をかぶり、マントと黒の長袖と黒の長ズボン、ベルト付きをはいている。

手には指出し手袋をつけている。

髪の毛は脇を少し過ぎるぐらいの黒、少し輝いて見える。

今までのサバイバルや外見からネクロマンサー、死霊使い、パンドラ少年と恐れられ、異名にふさわしい戦闘方法を使うらしい。

訓練所でも謎めいており、人はあまり近寄らない。

性格は冷静でクール、皮肉屋だが心には優しさが残っている。

第四話 誘いと条件

「すばらしいね、たったの一時間で具現化結晶をマスターするなんてね。」

少し休みなさい、ナイトメアサバイバルまで残りわずかだが、なんとかなるだろう」

私は声が出せないほど疲労していた。
心臓の動く音とかが聞こえてくる。
体力少ないよお。

私はあまり運動しないからなあ・・・

あいつと遊んだ時もあった、ビックリするぐらいあいつは速く、私はヒュー言中、あいつはヤレヤレと言わんばかりに首を振っていて、悔しくって毎日、屋敷を走り回ってはかけっこかかくれんぼとか、いろいろやっては、あいつは「ヘタツピ」とか「体力無し」とか言ってくる。

私にとって、あいつはあこがれだった。

「もう少し、やってから休憩にしよう」と

私は立ち上がると深呼吸して、意識を集中し始める。

ここか・・・

僕はグリードの部屋に連れて行かれた。

面倒だな、適当に終わらせるか。

僕はドアをあけるといつもの仮面をつけたグリードがおそらくニコニコしながら座っていた。

「やあ、何て呼べばいいかな？」

「僕にとって名前など意味はない、好きに呼べ」

「なら、君の異名である、ネクロマンサーでいいかい？」

「かまわない、用件はなんだ？」

「君は最年少かつ最高速度でサバイバルをクリアして、階級を上げてったのに、急に参加しなくなった。

おそらく参加自由権のある階級までしかやる気がないと思うけど。今回は参加してもらいたくなってるさ」

そんなことが、答えは決まっている。

「断る」

即答してやった、戦うつもりはないし、参加自由権利はあと一ヶ月分ある。

「なら、条件があるよ」

グリードは小さいアタッシュケースを僕に差し出した。

中身は、誘拐時に没収された持ち物がすべてカプセルに収納されていた。

「これを返すから、でいいかい？」

僕は自然と手をのばして、縮小カプセルから取り出した。

元の大きさに戻った持ち物はどれも僕のも物であり、間違いなかった。

これが戻るなら・・・

「いいだろう、やってやる」

僕はマントを翻すと部屋をでた。

第四話 誘いと条件（後書き）

感想待ってます

第五話 サバイバル前日

明日がナイトメアサバイバルの日だ。

私は気合い十分に具現化結晶に磨きをかけていた。

ナイトメアサバイバルでは携帯物、つまり持ち物、それ以外はウィザード以外は持っていけない。

最下級の階級の私にはハンター以外は持っていけないが、上位になるにつれて、持ち物を増やせるらしいが、武器は相当の上位者のみで、中の下ぐらいではまともな物を持っていけないらしいため、具現化結晶が落ちている武器を拾っていくしか下位の人に生き残るすべはない。

文字どうりのサバイバルゲームなんだって。

そんな私にも希望はある、これは仲間、つまり協力していけるのだ。誰であろうと自由に組め、協力でき、共にサバイバルを戦うのだ。

しかし上位の人は上位の人。

下位の人は下位の人と組むのが常識らしい。

さらに裏切りなどもあるためよほどのことが無いとやらないという。まあ、頼りになりそうな人とかいればいいけど・・・

僕は久しぶりのサバイバルのため、準備をしていた。

サバイバル用装備、いろいろ仕込んでおくため、道具の整理をしていた。

パンドラ少年とか呼ばれる由来になったらしいが、戦わないで生き抜くためだ、気にしない。

今回、なぜあのグリードが僕をサバイバルに参加させたのか、ヤツの目的が何なのか、興味があるな・・・

僕はカプセルから剣、握る部分と刀身が8センチぐらいで、刀身と

の繋ぎ目の所に2、3センチぐらいの透明で丸い宝石が埋め込まれた、いわゆる宝刀を取り出して、ベルトに鞘を付けてヒモで固定すると宝刀を納めた。

それをきれいに畳んでベットの横に置くと僕はベットに入って目を閉じた。

ゆっくり寝息をたてて、眠っていった。

第六話 サバイバル当日

私は気がついたら寝ていたらしい。
ボーっとするなあ・・・眠いや。

私は目をこすりながら体を起こしていく。

私は軽く伸びをすると目をパツチリ開ける。

そして小さな窓から降り注ぐ日差しを浴びて目を覚ました。

「やっぱり顔を洗わないと目が覚めないよぉ」

私はゆつくりと出口に向かっていく。

そしてドアの前に来た、その時だった。

「ミカゲちゃん！ もうサバイバルに行かないと遅刻になるよ！」

その言葉に脳内整理、１７秒ほど経過。

「あ、あああああああああゝゝゝ！！！」

私は大急ぎで部屋を出ると参加するために目的地に向かった。

「シャル、忘れ物は無いか確認してくれ」

「携帯ガムと非常食が少ない、購買室で購入しろ」

「わかった、いつもすまない」

僕は部屋を閉じると購買室に向かった。

そこでさっきの二つを買い、ついでにコーヒーゼリーとウィザード
よののコーヒーゼリーを購入した。

「今日はコーヒーの濃度が高いな・・・」

僕はゼリーの感想をつぶやいた。

「おかわりしておきながら言うのは説得力がないな」

「うるさい、シャル！」

別に不味いとは一言も言っていないだろう！

今度のおまえの分は無いと思え」

そうするとシャルはすまない、と言って謝ってきた。

僕はすんなりと許すとサバイバルの参加のため、目的地に向かった。

やっとなつた先は、大人の中にいれるぐらいのカプセル。
すでに数え切れないほどの参加者がカプセルに入っていた。

私は適当にカプセルを探すとそこに入った。

数分経過して人の足音がしなくなった。

「それでは、ナイトメアサバイバルを開始します。

それでは、みなさんの体を電波に変換させてバーチャル空間に転送します」

そういえばグリードさんが人間そのものを交換させていく、もちろんウィザードとの協力がないため、電波変換時の姿にはならない、
と言ってたような・・・

とにかくがんばろう、あいつに近づくためにも。

ナイトメアサバイバル・・・開始・・・

第七話 拾う物の幸運

私は目を開いた。

そこには訓練所でも、カプセル内でもなく、一般的な町が広がっていた。

たぶん、バーチャル空間にいると思う。

ここは公園だった、私はあいつ、セツナと一緒に来たことがあったので少し懐かしさを感じた。

「ミカゲ、メールを確認して」

突然出てきた私のウィザード、普段は恥ずかしがり屋で表に出てこない相棒、エンシエントが話しかけてきた。

私はメールを確認するとグリードから一通きていた。

「このサバイバルはメダルを三つ、完成させるんだ。

君は今あるハーフメダルをあと五つ集めて、くつつければクリア。拾うか敵から奪うか、あと今回は3人1組までのルール。

クリアしたら没収された物を返すよ、がんばって。

って言われても・・・」

私はため息をついた。

とりあえず仲間を作ろう。

私は右に歩き始める。

3分ほど経過した時だった。

私は木に引っかけられている武器、円の形で辺のみを残して真ん中がすべて消えてる武器を手にする。

「シエント、これは？」

「チャクラムよ、ブーメランに近い武器で投げて攻撃したりするの」

「ふーん」

私は人差し指の第一関節の辺りでフラフラップのようにチャクラムを回転させて遊ぶ。

「あっ」

勢いあまってすっぽ抜けてしまった。

チャクラムは木の枝を切り落として私の手元に帰ってくる。

思わず感激した。

武器のすごさにビックリしながら辺りを見渡しながら歩き続けていく。

さらに10分ほど経過した時に半分に切断されたメダルを発見した。
ラッキー♪

第八話 謎の戦闘痕

僕は裏通りに入ると周囲を警戒しながらメダルを探していた。
やはりおかしい・・・

ふつつならこんな簡単な内容にならないハズなんだ。
メダルを五個集める？

三人一組まで？

三人で組めはあとは三つ集めれば三人仲良くクリアだ。
簡単すぎる内容だ。

僕はポケットから飴を取り出すと口に投げ入れる。

僕は表通りを覗くと何人かが手を組んでいた。
やはりそうか、楽な方法をとるか。

僕はベルトの金具から小型フックショットを使って近くの屋上に引
つかけるとそこまで一気に引き上げた。

そこにはバトルカードが一つ置いてある。

僕はそれを拾うとフックショットを使って地上まで下りた。

「シャル、今回は簡単すぎる、半分以上はクリアできる」

「簡単なのはあなたのみ。」

みんなは相当の確率で戦闘をするんだ。

記憶を無くしても圧倒的な力があるあなたなら楽でしょう」

僕はナイトメアに誘拐された時に一部の生活の記憶を無くしてしま
った。

残ったのは体が覚えてる戦闘能力やほんのわずか一部の記憶。

それもシャルが教えてくれたことから少しい出せたこと。

「僕はどうすれば記憶を・・・」

「悩んでも意味がない、まずは生き残ることを考える」

「わかってる」

僕は一度表通りに出て探索を始めるがあまり成果はなかった。

「やはり表はほとんどないな、裏を探るか」

僕は公園を横切ると裏通りへ入る道を探したが見つからない。

「ん？」

不意に視界に入ったのは切り落とされた木の枝。

これは・・・戦闘痕か？

おそらく戦闘か何かだろう、闇雲に武器を振り回すバカはそういうないハズだし、居場所を知らせて蜂の巣になるだけ。

少し気になるな、あっちを探すか。

僕は裏通りに入らず、表通りを歩き始める。

第九話 罾と初戦闘

私はその後もいろいろ見つけた。

バクチクからネズミ花火、バトルカードとか・・・
だが交差点の後からメツキリと拾えなくなった。

ここはどうしようかなと考えていた、その時だった。
裏路地の入り口になんとメダルの欠片が落ちていた。
私は拾いにいった。

「ほーれ、引つかかった」

不意に声が聞こえたと思った瞬間には口を手で塞がれてそのまま裏路地に引きずり込まれた。

「ん、んう！」

抵抗しても私の力ではどうにもならなかった。

結果の得ない運動は私を絶望に導く。

私の視界に入ったのは20歳ぐらいの男の人が二人。

おそらく私を抑えてる男で三人組だ。

「へへっ、バカがひっつかかった」

「小さい男の子だねえ」

「さっさと持ち物をあされよ」

3人はニヤニヤしながら笑い始める。

このままでは・・・

・・・そうだっ！

私はバレないように右手からバクチクを持ち、地面に叩きつけた。
爆発音に3人は驚いて警戒心や拘束が緩む。

私はこの一瞬で拘束から抜け出して、ライターぐらいの火を具現化
結晶させるとネズミ花火に火をつけた。

「うわあっ！」

三人組はあわてるなか、私は逃げ出した。

「逃がすな！」

彼らが走ってきた。

私では逃げ切れそうにない。

さっきの交差点にまで行った所で追いつかれた。

私はチャクラムを両手に装備すると身構えた。

彼らは三角形のような包囲してくると剣を、メリケンサックを、弓矢を装備した。

「えいつ！」

私はチャクラムを剣と弓矢の人に投げつけた。

彼らは余裕で避けたけど、狙いは別。

帰ってくるチャクラムが彼らの体にダメージを与える。

「ちっ、今だ！」

「もう一人いるんだよっ！」

私はその声に振り向いた、メリケンの人が拳を振り下ろしてきた。氷の具現化結晶で盾を作って防ぐが威力が強くて吹っ飛ばされた。

立ち上がった瞬間、私の肩を矢が掠めた。

「それは麻痺の効果のある毒がついてる、あと何分もつかない？」

血が腕を伝っていく中、痛みや感覚、さらには視界まで揺らいできた。

「隙見つけ！」

拳が私の腹に叩きこまれた。

「あぐっ・・・」

私は力無く倒れるが、彼らは攻撃を止めなかった。

彼らは頭を踏みつける、それも少しずつ力を強めて。

「あっ・・・あぐう・・・」

「最初の勢いはどうしたっ！」

「あうっっ！」

頭が割れそうなほどの衝撃が私を襲う。

私はどうにか木の具現化結晶でイバラの壁を作って彼らを遠ざける。だが剣がそれを切り裂いていく。

絶望的な状況だった。

それでも負けるわけには行かない。
アレを取り返さないといけないのだから。

第十話 僕と君の始まりの瞬間（前書き）

一応ここまでがエピソード。

次回は伝説が終わったからです。

たぶん今年までに入りますので、よろしく願います。

あとミカゲと3話などで登場した少年は六歳、一応だが小学二年生の時期の二人です。

書き忘れてましたね。

第十話 僕と君の始まりの瞬間

私はバトルカードを使ってみるとワイドソードがでてきた。さらに目の前に風の具現化結晶の見えない風の壁を作った。

これなら弓矢の攻撃は当たらない、接近戦は苦手だけどやるしかないっ！

「うあああっ！」

私はワイドソードを握りしめると弓矢の人に走り出した。

「シャル」

「はい、戦闘らしきものの、感知した。

4人で欠片は5個だ、いけばクリアだ」

「チツ、どうしても戦わせたいのか、僕を」

しかたなく、僕はその方向に歩いていく。

「オラッ！」

鈍い打撃音が聞こえた。

「うつ・・・ぐう・・・」

この声の高さは・・・僕と同じぐらいの年齢だな。

僕は物陰に隠れると戦闘を見る。

「さあどうした！」

ニヤニヤしながら大人が子供を虐待しているのか、所詮は筋肉バカの考えることだ。

僕はやられているヤツに視線を向ける。

「ハア・・・ハア・・・絶対に、諦めないもん・・・」

その言葉が耳に届いた瞬間、何かが脳裏を刺激した。

少女が肩で息をしながら楽しそうな瞳で僕を見て「絶対諦めないも

ん」と笑顔を見せてきた。

ハッと我に帰って見ると敵が小さな子供に剣を振り下ろす瞬間だった。

なんだかわからないが、体が動いていた。

「おらぁ！」

「うぁぁっ！」

僕は二人の間に入ると風と氷の具現化結晶で壁を作って黒フードの子を守った。

「・・・？」

目の前の子は数秒たつと目を開いて、僕を不思議そうに見つめてきた。

「デメエ！ いきなりなんだ！」

「オイ、コイツはネクロマンサーじゃ・・・」

それを聞いたヤツらは急に顔を真っ青にした。

「覚悟しろゴミども、直々に始末してやる」

僕はいつものようにみえない風を具現化結晶させて、さらに拳に形状変化させると、ヤツらを殴り飛ばした。

それぞれの悲鳴の後、気絶していくゴミども。

ゴミどもから風の手でメダルを回収すると黒フードに振り向く。

「大丈夫か？」

「はい・・・だいじょうぶです・・・」

すでに姿勢を保つこともできてない、メトロノームのように左右に動いてる。

「ありがとございます、名前は？」

「僕にとって名前など意味はない、好きに呼べ」

すると彼女はしばらく唸ると閃いたように表情を明るくした。

「じゃあ、セツナ！」

この言葉がまた脳裏を刺激する。

「じゃあ、セツナ!」

僕は過去に同じことを言われたのか？

「あのっ・・・あのっ!」

「どうした?」

「僕、ミカゲって言います!

お願いです、私はやらないとならないことがあるんです!

弱くて、何もできないですけど・・・

一緒に・・・行動してくださいっ!」

ミカゲは真剣な表情で僕を見つめる。

なぜだかこの瞳に吸い込まれそんな感覚が、僕はなんだかつかし
く思える。

気に入った。

コイツとなら・・・

「駄目・・・です?」

悲しげな瞳のミカゲに僕は無言で右手を差し出した。

ミカゲは少し驚いたような表情だったが、僕の手を優しく握ってく
れた。

「そうこなくっちゃな。

よろしくな、ミカゲ。

あと敬語はやめろ」

「うん、セツナ!」

これで六個、欠片集まった。

半分のメダルを合体させると光が僕らを包んでいった。

気がついたら、私はカプセル内に戻っていた。

カプセルから出るとやはり怪物の骨の仮面をつけた、セツナがいた。

これが私、ミカゲとセツナの運命の歯車が回り始めた瞬間だった。

第11話 第1章 僕らのナイトメアサバイバル（前書き）

始まりが元旦

第11話 第1章 僕らのナイトメアサバイバル

そこは薄暗い洞窟の中。

小さな少年一人の周りを囲むのは10人を軽く越えた大人たち。

少年の後ろには岩壁がずっと広がっており、逃げ場所はない。

その岩壁に額から血を流してぐったりとうなだれている子供が横たわっている。

苦しそうな顔とその血は見るに痛々しかった。

このような危機的状況になっても、彼はいつもの様子を崩さなかった。

彼は膝を折り、意識のない子供の状態を確認する。

スツと立ち上がると彼は笑顔を見せた、この状況なのに、まるでまるで勝利を掴んだように。

その行為が敵を刺激したらしく舌打ちが数力所から聞こえてきた。

ついには敵たちは武器を装備し始める。

さらに敵は電波スーツと呼ばれる特殊な物も装着してきた。

あれは疑似電波変換状態になれる特殊なヤツだ。

電波変換時は基本的に変換側は触るもすり抜けるも周波数で自由自在、こちらは血管がちぎれるまで頑張っても指一つ触れない。

そんな物を持ち出しているのだ。

敵は確実に、計画的に、自分を殺そうとしている。

そんな状況に置いて、彼は焦るところか汗一つ、無い。

幾千、幾万の修羅場をくぐったのか知らないが、死ぬかもしれない状況にでも、他人ごとのようだ。

敵はゆつくりと距離をつめてくる、あと10メートル、あるかないかまで近づいてきた。

その時、彼がついに口を開いた。

その言葉は、命こいでも、叫びでもない、彼は後ろの子供に向けられた。

「言っただろう。僕は絶対・・・」

彼が子供に振り返る。

「おまえを消させない」

その言葉が合図のように敵たちが走り出してきた。怒号が、武器が、少年に降り注ぐ。

そして、少年は、封印を解除した。

第12話 設定説明

ども。

今回は続編の主な設定つばいやつです。

星の民の能力は今後バンバン増えていきます。

一応説明。

一部の人間が使える力、だいたいは発動されないまま生きていくが、そのまた一部の人間はほんの一部はほんの一部を発動させている。力の内容は個人個人でまったく違う。

力を発動するとその本人に睡魔や頭痛、激痛など襲いかかる、さらに使うと他界します。

エネルギーが100とすれば70で睡魔など、20で激痛、0で死亡。

主な登場キャラ

流星1から3までの主な登場者。

2から出番がほぼ0のツカサや3だけのジャックなどももちろん参戦。

オリキャラは前作のヤツら+エピソードの二人、いまから二人を説明。

光 ミカゲ

ナイトメアに誘拐された子供。

黒フードをかぶり、男物のジーパンをはいている。

寝起きが悪く、寝相も悪く、とにかく睡眠関係が悪い。

性格はおっとりしていてさらにドジもある、でも芯が強く、諦めない強い意志と心がある。

誘拐後はセツナに修行を受けてパワーアップしてきているがセツナには4分の1人前以下と言われた。独自の視点で話の論点をずらしていくなど独自の感覚の持ち主。

セツナ

ナイトメアに誘拐された子供。

ミカゲもセツナも本来は小学二年生。

黒に白の線がある服に黒一色のズボン、黒のマント、黒の指出し手袋をつけている。

すごい甘党、何かと甘いものを携帯している。

何かときれい好きであり、手先が器用で服は全部自分で作っている。性格はクール、冷静で無口であるが熱血な部分がほんの少しある。

戦闘は尋常でないほど強い、とにかく強い。

具現化結晶に拾った武器を即座に使いこなすこと、さらには人間なのかを疑う運動神経、化け物。

今は甘いものを食べながらミカゲと修行している。

第12話 設定説明（後書き）

感想まっています

第13話 遊園地への招待券（前書き）

どんどんいきます

第13話 遊園地への招待券

あれからだいぶ時間が過ぎた。

今はナイトメアとの決戦のためにWAXAで修行のため、召集されている、夏休みなのに・・・

ゴン太、キザマロ、委員長は真剣に取り組んでいる、ミソラちゃんなんて気を失うまで修行してた、暁さん、ツカサくん、ジャックは復活しており、相当パワーアップしていた。

なのに・・・アラタは・・・

一日目は遅刻で参加していたがいつしかサボり始めた。

そして委員長がアラタ捕獲のために動き始めた。

活動一日目は成功した、しかし二日目は事前逃亡していたため失敗、三日目と四日目もコレ、五日目はついに徹夜で張り込みにより確保だが、アラタは強かった。

次の日はついに朝の弱さが出たため、アラタは寝坊した。そこを確保したがアラタは切り札を発動したのだ。

星の民の力を。

アラタは時空間を移動する力を発動させて逃走したのだ。

アラタはついにサボるという意志が時空間をも超越したのだ。さすがに暁さんも動いた。

アラタをWAXA内に住ませたのだ。

これによりアラタのサボり時空間逃走劇は終結した。

そして夏休み中盤に突入した時に、事件が起きたのだ。

招待券が暁さん以外の僕らに届けられたのだ、しかも今日が開園の遊園地への招待券が、宛先もなく、僕らのハンターに。

みんなは喜んで準備していった。

僕も行きたいと思うので準備をした。

そこに行くのは電波変換していった。

開園記念なのだという理由、世界を救ったロックマンとソニックの二人が来てくれると盛り上がるという理由、ついでに仲間も招待だったのでドキドキしながら入園した。

今日一日のパスポートの代わりに腕時計のようなものを与えられたので装着して、奥に進んでいった。

しばらくたった時だった。

お昼の昼食のため、ご飯を食べようとした時、腕時計からチクリと痛みが走ったと同時に意識が遠くなっていく。

バタバタと音が聞こえてきたのも、遠くなっていく。

そして、目の前が真っ暗になった。

第14話 ゲームスタート

「起きなよ、スバルくん」

「う……ん……」

重たいまぶたを開けたスバルは、その体をビクリとさせるとあわてて起きあがろうとするがガラスのようなものででられない、閉じこめられている。

「グリード、だね」

彼はいつもの悪魔のような奇妙な仮面を装着しており、近寄ってほしくない。

「ちなみにみんなは君と同じようになってるよ」

スバルはガラスごしに辺りを見渡すとカプセルのようなものに人が入っている。

「まーまー、今から君たちにチャンスを与えるよ」

「チャンス？」

彼が指をパチンと鳴らすと目の前に画面が出てきた。

赤と青、二つの枠があり、その中に名前が書いてある。

「チームだよ」

「チーム？」

「そ」

画面がもう一つでてきた。

赤チームと青チーム、二つに分かれてもらう。

チームは仲間であり、そのみを信用したほうがいい。

ゲーム内容説明

いまからナイトメアデジタルワールド、こちら側が作った仮想空間世界に電波化して入ってもらう。

電波化はこちらが運動データなどを元にゲームの主人公のような者をつくられる、うり二つの人を。

まあくわしいことはやればわかるだろう。

ゲームの内容は、死ななければいい。

敵は武器を装着している人間だ、黒一色のコートのヤツらだ。

君たちは拳銃を一つ装備している。

具現化結晶、電波変換は禁止。

勝利方法は30分、生き残れ。

あるいは相手チームの全滅。

赤はミソラ、ルナ、キザマロ、ゲイナー、アクセル、キラ。

青はスバル、ゴン太、ツカサ、ジャック、アラタ、ランド、クロウ。

どちらが死ぬか、両方いきるか。

さあ、後は君次第だ。

「準備はいいかい？」

数秒、間を置いた。

「さあ、ゲームスタートだ」

第14話 ゲームスタート（後書き）

これの敗北は・・・

第15話 ナイトメアサバイバル 特別戦その1（前書き）

どーしようかな、今後

第15話 ナイトメアサバイバル 特別戦その1

目を開いた。

そこは大都市の中だった。

ビルが連なるのに人は一人も見つからなかった。

ハンターを手に取るがウォーロックはいない、電波変換は無理のようだ。

その時、メールが来た。

あと三十秒後にゲームスタート。

敗者になったチームには、死あるのみ。

という内容だ。

ふざけるな、最低両チーム一人は生き残らないと殺されるなんて。

さらに一通来た。

ゴン太、キザマロのゲーム除外の知らせだった。

背筋がゾツとする悪寒を感じてビルの間と間に隠れる。

辺りを見ようと隙間から確認すると全身黒コートの男が辺りを見渡していた。

あわてて後ろに後ずさった。その時、肩に何かが、のってきた。

スバルはビクツと体を震わせることが精一杯だった、悲鳴なんてあげることすら叶わなかった。

スバルは必死に首を後ろに向けた。

ミソラとルナとゲイナーは一緒に行動していた。

赤チーム同士、ミソラは前、ルナは左右、ゲイナーは後ろとコンビネーションはよかったし、ルナは全体指揮、ゲイナーは元ナイトメ

ア兵の知識を持ち主、ぬかりはない。
だがミソラは平常心を失っていた。

ゴン太とキザマロが殺されて消えていくのを目撃したのだ。

必死に走った先に、二人がいたのが幸い、行動を共にしている。

「ミソラちゃん、大丈夫なの？」

ルナの問いかけにミソラは無言でうなずいた。

「敵と遭遇したらミソラを連れて一気に走れ、一人でも生き残ればいいんだ」

考えはもつともなのだがどうにも納得したくない内容だ。

だが、そうも言ってられなくなった。

「来た！」

第15話 ナイトメアサバイバル 特別戦その2（前書き）

作者は今、気がついた。
逃走中に似てる。

第15話 ナイトメアサバイバル 特別戦その2

「よっ、スバル」

後ろから肩を叩いたのは、

「おどかさないでよ、ランド、クロウ」

の二人で彼らはへへッと笑うと表情を引き締めた。

「これからどうする？」

どうするか迷う、動けば遭遇する確率はあがるがこのままではいつかは見つかって殺される。

「やっぱ様子を見よう、アクセルとこんな訓練を受けた時は様子を見てた」

そういえばランドはナイトメアにいたんだっけ。

ここは経験者の言葉を信じよう。

「うん、それで決定だね」

「一応スバルは前の通路、クロウは横の通路、俺は上から監視する」
ランドは服の一部だと思っていたベルトをビルの屋上に投げた。

カチカチカチとベルトがのびる音がある程度すると無事にベルトが屋上にひっかった。

「ハンターにぎつとけ、連絡する」

ランドは巻き尺のようにスルスルと屋上に引き上げられていった。

「そこを右に曲がれ！」

ゲイナーの怒鳴り声にミソラとルナは細い路地を曲がる。

「さらに右！」

もうしばらく走ってる！

後ろは振り向くなよ！」

二人はゲイナーの指示に従い後ろを見ないで走り続ける。
ゲイナーは曲がったことを確認すると拳銃を握りしめた。

「ルナちゃん大丈夫？」

「ええ、なんとか・・・」

二人は肩で息をして、膝に手を置いていた。

「ほんと二人でよく逃げたな」

二人はビククリしてバックステップして声の方向に距離をとる。

「オレだ、ジャック！」

「ビククリさせないでよっ！」

ルナは怒り浸透で再び膝に手を置くがおかしいことに気づいた。

「ゲイナーは？」

その時、メールが来た。

ツカサ、ゲイナーのゲーム除外の知らせだった。

「逃がしたんだな」

ジャックの言葉が二人の胸に包丁でも刺したように鋭く刺さった。

「悔やむなら生き残れよ」

「ええ、がんばりましょう、ミソラちゃんも」

第15話 ナイトメアサバイバル 特別戦その2（後書き）

感想まっています

第17話 ナイトメアサバイバル 特別戦その3（前書き）

作者は重要なことに気がついた！

逃走中によく似てる、パクりっぽい！

打開不能なので特別戦はテキパキ終わらせよう！

でないと著作権とかなんかでお首が宙に舞う・・・ガクガク。

第17話 ナイトメアサバイバル 特別戦その3

残り15分になった。

さらにキラ、アクセル、アラタも除外された。

今のところは危機は、ない。

「ミソラたちが来てる、電話で案内しろ」

と電話が来たので命令どうりにうごいた。

「三人とも、大丈夫？」

3人はうなずくと一安心したようだ。

「ここにいるヤツらで全員だな」

そうか、ここで青は僕、ランド、クロウ、ジャック。

赤はミソラ、委員長。

この二つのチームの中で最低一人は生き残らないといけないんだ。

「みんな、赤の二人を生かすんだ、赤と青、二つとも生き残らないとみんな生きれない」

「なら、犠牲になっても、少ない赤を生かさないと」

みんなはうなずく。

「でもみんな、青も全滅してはいけないのよ」

ルナの意見はもつともだ、でも数が少ないのだが仲間が犠牲になるのは身勝手だが、イヤなのだ。

「でも・・・」

第18話 ナイトメアサバイバル 特別戦その4

みんなが沈黙したその時だった。

「北に5人、西南に3人の敵がきてる、散らばって逃げるんだ!」
ランドが屋上から降りてきて言った言葉にみんなはあわてて逃げ出した。

だが敵はすでに見える位置まで走っていた。

「ならば」

ランドとクロウは拳銃を握りしめると5人に向かって乱射した。
だが、すべて弾かれた、一発も致命傷どころか傷一つない。

二人が拳銃を投げ捨てて背を向けた時には敵はマシンガンで乱射していた。

「ぐああ!」

「うぐう!」

地面に横たわる二人に一人が終わりを告げて、消えた。

「ジャック! どーするの?」

「委員長! 決まってるだろ、残り時間ギリギリまで逃げ切れ!」

無茶苦茶に道を曲がり、たどり着いた先は、

「運がねえや、敵とバツタリなんて」

二人の敵、マシンガンを装備している。

確実に勝ち目はない。

「委員長、逃げろ!」

ジャックは弾丸の当たらない位置である細い路地に吹っ飛ばした。
「ジャック・・・」

弱々しい声でルナが呼んだジャックが見たものは、もう一人の敵だった。

ルナは目をつぶった。

直後、水のようなものが頬について、目を開けた。

ジャックが血塗れになって消えていく瞬間を目にした。

かばった。

その思考が追いついた瞬間、その身を打ち抜かれていった。

第19話 ナイトメアサバイバル 特別戦その5（前書き）

これで特別戦終わりです

第19話 ナイトメアサバイバル 特別戦その5

スバルは2、30メートル先から敵が迫るのを感じながらミソラの手を引つ張って走っていた。

時折、弾丸が飛んでくることがおさまいなしに走り続けた。

メールには生き残っている人は赤、青、共に一人。

つまり自分たちだけだということ。

あと5分。

限界がある体力はもう少しいけそうだ。

左へ曲がる。

ここでさらに曲がって視界から見えなくなれば隠れる。

細い路地を左に曲がると表通りが見えた。

そこに走ると、さらに数人の敵だ。

拳銃で足をねらうがまったく通用しなかった。

「きかない!?!」

「スバルくん、後ろの横の通路!」

あわてて引き返したが戻れば敵、ならばもう一つあった裏道を走っていくしかない。

必死に逃げていったがそこは行き止まりだった。

残り時間5分。

不可能だ。

逃げきれない。

「敵には拳銃が通用しない……どうすれば……」「ミソラはその時、気づいた。

気づいてしまった。

この、拳銃の意味を。

「どうしよう……ミソラちゃー!」

情けない声が言い終わる前に、鼓膜が破れると思っぐらいの銃声が響いた。

直後、右太股に焼き切れるような痛みが襲いかかってきた。

ミソラちゃんが、僕を撃った？

「どう・・・して、ミソラ・・・ちゃん」

ミソラは無言で、躊躇なく、左太股を撃ち抜いた。

「ぎゃあああああああああ！！」

バーチャル空間でも痛みは問答無用で伝わるがそんな問題ではない。

心が、はるかに痛かった。

ミソラの顔を見るまでの力さえなく、横たわるスバル。

「ぐ・・・あ・・・」

このままでは遅かれ早かれ、死ぬ。

でも、どうしても聞きたいことができた。

「なんで・・・撃ったの？」

「・・・」

なんていっているかさえ、わからないほど、スバルは弱っていた。

わかったのは、自分の頬に落ちた数滴の涙。

なんだか、目の前がおかしい。

目の前が真っ暗に・・・

第19話 ナイトメアサバイバル 特別戦その5（後書き）

感想待ってます

第20話 ゲーム終了（前書き）

さあ、どんでん行きますぜ。

第20話 ゲーム終了

スバルはむくりと起きると様子を確認する前にみんながいた。

「よくやっただぜスバル！」

生き延びれたなんてな！」

みんながねぎらってくれるのだが、イマイチわからなかった。

だって、両足を撃たれて、あと5分もあつて。

「ミソラちゃんや赤チームは？」

みんなが沈黙するがグリードが来て「全滅だよ」と教えてくれた。

「え？」

素っ頓狂な声を出してしまった。

「彼女だけだよ、拳銃の意味をわかってたのは」

頭で理解できた。

彼女は僕を守るため、自殺したのだと。

あの時、聞こえてきたのは「ゴメンね」と「ありがとう」の二つだった。

僕を殺すにしてもおかしい言葉だった、今なら考えれる。

殺人鬼がありがとうと言いなから人を殺すなんてことはない。

ミソラちゃんは僕を殺させないために自殺をしたんじゃないのか。

あの状況ではこうするしかなかったと。

僕が馬鹿なことをしなかったため、抵抗させないために両足を撃って、助けたのだ。

ミソラちゃんが助けてくれた。

そこに思考がたどり着いた瞬間に、悔しさと悲しさでいっぱいになった。

助けたい、みんなを。

「チャンス、ほしい？」

突然、グリードが言った言葉に胸がはちきれそうになった。ほしいか？

聞くまでもない、すがってでもかまわない。

「ほしいよ」

即答で言った。

グリードはクスクスと笑うと「期待を裏切らないね」と言う。

コイツの手の平で踊らせれると無償に腹が立つが押さえ込んでいく。

「どうすればいい？」

「フツ、ナイトメアサバイバルの本戦の予選会から決勝までクリアしてもらうよ」

ナイトメアにいた仲間目は目を見開いているがスバルたちナイトメアにいない組はサッパリ、わからない。

「ルールはさっきの特別戦に似てるから覚えやすいかな？」

今回は赤、青、白の3チーム。

君たちは白に入ってもらうよ。

赤と青は君たち白を狙うから、反撃なり逃走なりしなよ。

勝利条件は赤と青を合計10人殺す、敗北条件は自身の死亡。

仲間は自由に作りなよ、どの色でも自由だし、作戦や囷として組むもありだ。

電波変換は3分、具現化結晶は有り。

参加者は経験者以外で予選は二人」

業務連絡のような説明を聞き取ると「どーする？」と考え始める。

「アクセル、経験者として君の案を優先したい」

アクセルは長考に入ると頭を捻らせて考える。

「ここは電波変換時一番強いスバルと具現化結晶できるアラタでいこう、ほかでは武器がないときは死ぬか逃げるかしかない」

みんなは納得すると応援してくれた。

「グリード、決勝までクリアすれば」

「捕まった仲間の意志に任せるよ」

スバルとアラタはカプセルに入ると目を閉じた。

ゲームスタート。

第21話 ナイトメアサバイバル予選 その1（前書き）

これから新キャラがどんどん動いていきます

第21話 ナイトメアサバイバル予選 その1

「死ねえ！」

ロツポンドーヒルズのようなビルの立ち並んでいるこのフィールド、その狭い裏通りに汚い大人の叫びが響く。

30歳ぐらいの不細工な男が料理でハンバーグなどの肉を切るようなナイフで僕の肉を切り裂こうとしてきているが動きが遅い。

グルツと身を回転させて裏拳を不細工男の鼻辺りに叩き込む。

スバルはゲームの参加者決めの時に与えてくれたサバイバルの指南書とその他の道具を整理して指南どうりに敵の持ち物を奪うと先に進む。

「人間性がまるでないよ、ウォーロック」

「ああ、注意しろよ、空から敵が降るかもしれないからね」

現状ではさつき、仲間になってと言ったたまそうしたダメ大人と違い、唯一の裏切らない仲間、ウォーロックと注意深く進んでいた。

「ナイフはとりあえずカプセルに収納しろ」

「うん」

スバルはカプセルに収納するとゆつくりとすすんだ。

「アラタはどうなってるかな」

「大丈夫だろ、また空から降ってくるかもな」

「まさか」

そんなジョーク話をしながら上を見た瞬間、ピコピコハンマーがスバルの頭に高い音を鳴らせて地面に転がった。

敵の罠かと思つて上を確認する。

人が・・・落ちてきてる？

「・・・あああああああ！！！！」

僕は回避できず、空から降ってきた人の下敷きになる。

「イテテ、なんでクツションがこんなところに？

・・・アレ？ 人が下敷きに！」

スバルは起き上がると下敷きにしてきた天界の住人、もとい空から来た人を見る。

黒いフードに男物のジーンパン、フードから少しだけ出た薄い黄色の髪の毛の、子供だ。

「ええつと・・・ごめんなさい」

ペコペコと頭を下げて必死に謝るその子供、なんとなく地に足がついていないって言うかフワフワしてておっとりしてそうな、男の子、それも小学一年生ぐらいの。

「いいよいいよ」

僕も頭を下げる。

「ちよつといい？」

その子は僕の胸辺りに額を当てると「悔しさとか悲しさが渦巻いてる、でも、とても暖かくて、優しい心を持ってるね」と僕の心を読み解いた。

ビックリして口が開いたままになってしまった僕にその子は笑顔を見せてくれた。

「いつ誘拐されたの？」

「誘拐はされてないけど仲間が人質になってこのサバイバルに参加することになったの」

「へー、すてきな仲間たちなんだね」

と太陽のような笑みを向けた時、女の子のようだった。

「最高の仲間たちだよ」

その言葉になぜか、後悔の念がこみ上げる。

「ねえ、協力しようよ。」

その仲間も、あなたもここにいてはいけないよ」

さつき裏切られたばかりなのだが、この子は信頼、というのか体がこの子は良い子だと言っているようだった。

それにこの子は人間性が生きている。

「うん、よろしくね、名前は？」

「ミカゲっていうんだよ、君は？」

「僕は星河スバル、よろしくね、ミカゲ」

「うん、スバル！」

これから仲間との合流を優先したいから動くけどいい？」

「僕も仲間と合流したい、いこう」

こうして人間性を持ち、ツカサちゃんと互角以上の女の子っぽい顔の少年、ミカゲを仲間にして、再び歩き始めた。

第22話 ナイトメアサバイバル 予選その2

アラタは楽しそうにチョロチョロと動いていた。

運動が好きなんて良いものじゃない、こういう緊張感、緊迫感、いわゆるスリルが楽しくてしかたないのだ。

バトルカードにフォークにスプーン、いろいろ拾っている。

敵は二人倒した、具現化結晶でな。

だが素材である属性付きバトルカードがもうない、スプーンとフォークでどーすっかな。

まあ切り札もあるし。

そんなこと悩んでいてもしかたない、楽しまなくっちゃ！

「何をそんな楽しそうにニヤニヤしているんだ？」

真後ろから、不敵な声が聞こえてきた。

やられた、速攻で両手を上げた。

やっちまった、こちらは敵の姿すら確認できねえのに相手は即座に心臓をぶっさせる状態かよ。

「心配するな、殺しはしない、おまえは小学1年ぐらいの子供を見なかったか？」

答えなければ、殺してもいいと思わせてもらうが」

こんな時に子守って、大層なヤツだ。

「やれやれ、親なんですか？」

ロリコンはほどほどになっ！」

アラタは敵の後ろに回り込んだ、切り札で。

「テレポートだと？」

だが、爪が甘いな！」

敵はその両手に風をまわさせて手をボクシンググローブの様に武器を変えた。

「具現化結晶！？」

こちらの武器はスプーンとフォークだぞ、泣いてやる、ヤケクソだ。

体を捻り、遠心力でスプーンを叩きつけた。
敵も拳をぶつけてきた。

その時、初めて敵を直視した。

そこにいたのは全身黒一色、かな、それにマントも黒、さらにはライオンの頭の骨をえぐり取ったような化け物の頭骨をかぶった、小学一年生ぐらいの少年だった。

「そんな武器で倒せると？」

「倒すんじゃない、料理してやるってこと」

「やれやれ、口は一人前だな」

少年はなめきつた様子で小さく笑うとスプーンをはじいて距離をとる。

「おまえはいつ誘拐されたんだ？ 名前は？」

「アラタだ。」

誘拐？ されるようなほどの人材じゃねーよ。

ワケ有りでな、仲間を探してる。

おまえはなんて呼べばいい？」

あくびをしながら話すと興味深そうに鋭い眼差しで見えてきた。

「自由に呼べ。」

そうか、グリードの言っていたヤツか、ちょうどいい」

「なんだよ」

アラタは口を尖らせる。

「やれやれ、少しな」

第23話 ナイトメアサバイバル 予選その3（前書き）

ついにヤツが動き出しますよー

第23話 ナイトメアサバイバル 予選その3

「ここだよここ！」

ミカゲがマップのようなものを見ながら指で示した。

そこはスバルの家と同じような形状の一般的な家だ。

まずは敵がいるかのチェック、次は罠の確認と指南書は書いてあるがミカゲは敵のチェックのみで「おじゃまします」と入っていつてしまった。

罠の確認について聞くと予選はないと言っていたので安心。

「とりあえずアイテムを探そう！」

トコトコと部屋をうろついて物を確認していくのを見てそれを真似る。

「二階に行こっか」

手慣れた動きでドンドン行ってしまふのには驚きを隠せなかった。

それを見て誇らしげに笑みを浮かべていた。

その笑顔は、やっぱり小学生なんだなと思う。

その時だった。

ドアがガタンと音をたてて、ドア越しに人の姿がガラスから見えてきた。

「敵！」

「二階で様子を見て、僕と敵が戦闘になったら支援して」

「うん」

スバルはバトルカード、ソードを握りしめてドアの死角であるソファの後ろに身を隠した。

心臓が爆発しそうなほどの緊張感を押さえ込み、耳に全神経を集中させる。

ギイとドアが開いた音がした。

どのタイミングで攻めるか、なんて考えてる暇はなかった。

敵はこちらの位置、行動を見透かしたような動きでソファに迫って

きた。

ソファを敵に向けて蹴りとばしてバトルカードを使用する。
自分の右手にソードが装着すると敵に向かって走り出した。

敵は水を具現化結晶させた盾でソードを防ぎ、はじくとそのまま盾で抑え込んできた。

「殺しはしないがこの家から離れろ」

「無理だよ、守らなくっちゃならない」

スバルの左手にはプラズマガンが、その敵に向けられていた。

「スバル、攻撃しちゃダメ！」

「やめろ、コイツに攻撃するな！」

一つはミカゲだがもう一つは誰？

「セツナ！」

「スバル！」

ミカゲが敵に飛びつく、そしてもう一人、アラタが手を差し出してきた。

「ミカゲ、この人が？」

ミカゲはうなずくとキャツキャツと騒ぐ。

「さつきはすまなかった、スバル、だな、アラタの仲間だろ」

「うん、名前はなんて言うの？」

「僕に名前なんて必要ない、好きに呼べ」

そう言ってガムを紙に包んでごみ箱に投げる。

「セツナ、あいさつはしっかりしなよお」

「んじゃセツナで」

アラタはスバルに振り向く、スバルもうなずく。

「おまえらも一緒に行動するか？」

スバルとアラタはセツナの誘いを受け入れると家を出た。

こうしてアラタとの合流、化け物仮面もとい仮面の貴公子ことセツナと一緒に行動することになった。

第24話 ナイトメアサバイバル 予選その4

僕は少し疑問を持った。

「セツナ、質問していい？」

「なんだ？」

これは触れていいのかわからないが気になってしかたないのだ。

「なんでライオンの肉食の凶暴そうな骨をかぶっているの？」

これは知りたいのだ！

これでは見えるのは肩を過ぎるぐらいのサラサラの髪の毛に鋭い眼、あとは口。

なんのためにかけているのか、皆無だ。

「勝手に想像するがいい」

とあしらわれてしまった、だが余計に気になる。

「じゃあ、勝手に想像しようよ！」

ミカゲが口にしたその言葉はクラスのイタズラ王に火を、ついでにスバルにもつけた。

「すっごい恥ずかしがり屋で顔すら見せるのが恥ずかしいは？」
とスバル。

「すっごい珍獣、猛獣ハンターだからその骨をかぶってるとかは？」
イタズラっ子の笑みを浮かべるミカゲ。

「始めっから骨を含めて顔だったりして！」

「こわ〜い！」

「すげーぜ！」

イタズラ王の言葉にミカゲとウォーロックが悪ノリする。

「勝手に想像するなっ！」

不機嫌そうに速歩きになるセツナに「想像しろっていったじゃん」
とウォーロックの言葉に加えてみんなが口を尖らせる。

「チッ、僕は脳天期でなれなれというえにいい加減なヤツが苦手、いや、嫌いだ」

そうとう傷つけたらしい、僕らは謝ってとりあえずチームワークを取り戻す。

「こんなひねくれっていうかクールなヤツだけど強いんだよお」

「見てみてえな」

「うん見たい」

熱烈なコールに対して、

「いいだろう、やってやる、次の敵は何人だろうとやってやる」
と宣言した。

ニンマリと笑みを浮かべるみんなと手を震わせるセツナ。

「さっさといくぞ！」

怒りを声に乗せて僕たちを引っ張っていった。

第25話 ナイトメアサバイバル 予選その5（前書き）

セツナの力を少し公開

第25話 ナイトメアサバイバル 予選その5

「ねえ、二人はナイトメアから外に出たくはないの？」

二人の体が跳ね上がった。

「出たいのは山々だ。」

だが、脱走者は暗殺されて死ぬ。

僕はコイツをころさせたくない、だから……」

そこで話を止めて、手でしゃがめと命令する。

「敵だ、そういえば何人倒した？」

「一人」

「一人」

「一人」

「貴様らにしては上出来だ。」

ならあと2人だな」

オイオイ、もう5人も葬ったのかよ。

まかせておけ、と言って右手を敵の方向に向けるとその位置が爆発した。

そこから二人が逃げるように転がってきた。

その一人がトンファー、もう一人が剣を握りしめて突撃してきたが、セツナは興味なさそうにあくびをする。

「死ねえ！」

「三下が、消えろ」

突然、トンファーを持つ敵が吹っ飛ばされた、さらに吹っ飛んだトンファーはセツナの手に吸い込まれるように握られた。

「このー！」

「この僕に触れることすら、かなわないな」

剣を振り下ろす前に、トンファーが腹に直撃して、そのまま天までいったかと思ったら、落ちてきた。

そこらへんのビルより上にまでいったので当然、ゲームから除外さ

れた。

「これ、気に入った」

セツナはカプセルに収納すると僕らのところへ帰ってきた。これで10人になったと思ったら、現実世界に戻ってた。だが、アラタとグリード以外、だれもない。

グリードに聞くとゲーム観戦できる場所で見てるらしい。そしてゲーム脱走の時の人質として。

まあ逃げるなんてありえない。

「グリード、一つ条件を追加させていい？」

「いーよ」

すんなりと通してくれたのでテキパキと言うことにした。

「ミカゲとセツナを自由にしてほしい」

「いーよ」

またすんなりと通してくれた。

「ありがとう」

「なら、今日一日は訓練所に行くといい、セミファイナルは苦しいと思うしね」

そういうところの中のマップをくれたので僕はアラタと一緒に二人に会いにいった。

その時、グリードはニヤリと笑った。

今はグリードの計画どおりに進んでるなんて、知る由もなかった。

第26話 セミファイナル前日（前書き）

結構ながーい文章になりました

第26話 セミファイナル前日

僕らは入っていったのはいたって平凡、さらに付け足すならコダマ小学校のような、いわゆるノーマルな施設だ。

アラタといっしょにマップを覗くとここは訓練や授業の施設、さらに体育館となり、となりの建物は寮になっているようだ。

僕らはミカゲとセツナに会うためにセミファイナルの説明を受けることになる。

まあ今後のためだし聞いて損はない。

僕らは体育館に進むと話が始まっているようであわててイスに座った。

「そろそろセミファイナルの説明です。

ルールはコインルール、五枚の特殊コインを揃えてください。

電波変換、電波スーツの着用は時間制、3分ですが今回は電波化時間追加カードをステージに置いておきます。

さらに今回はバトルカードを5枚を所持して参加できます。

それ以外の武器の所持参加はランク指定にあわせてください。

さらに今回は、光の悪魔たちを参加させます」

この業務連絡のような説明の中に意味不明の単語が現れた。

光の悪魔？

「その他くわしいことなどは質問などをするように、以上」

その言葉と同時にみんながほとんど体育館から去っていく。

「あつ、スバルにアラタ！」

このはしゃいだ声は、ミカゲのものだ。

二人に無事に合流できたし、あのことを伝えよう。

「そういえば、礼を言わなくてはな、失格になった時には権利剥奪だがファイナルまでクリアすればナイトメアから正式に脱退できる」セツナが話すとミカゲは飛び跳ねて喜びを体言している。

「もっとセツナも喜びなよお」

うるさそうにあしらっているが堅い表情だが喜んでいようだった。セツナは本当に小学生なのかと疑いたくなる。

まあ全身全霊で喜んだらセツナのアイデンティティを丸ごとぶっこわしかねないのだ。

「まあいい、今回は光の悪魔が参加するならこちらもそれなりの準備が必要だ、購買室に行く、ついてこい」
スタスタと歩いていくセツナを僕はあわてて追いかけた。

全力で走っているのにセツナには追いつくどころか見えてこないうちに購買室についてしまった。

「遅いな」

しかもセツナはモンブランを食べていた。

「何で食ってんだああ！」

アラタがブチギレてセツナに迫る。

「俺にもくれ！」

そうじゃないだろ、アラタ！

「いいだろう」

セツナの左手にはモンブランにスプーンがのっついていて、アラタはうれしそうに皿をとって食べ始める。

ミカゲはテーブルを怒りに任せて叩いた。

「セツナ！ ミカゲの分は！？」

「僕を誰だと思っている」

左手にはモンブラン。

その左手ごとかぶりつこうとするミカゲの動きを読んで口の中に叩き込む。

「さて、無知ども、そろそろ光の悪魔について説明してやる」
流れに乗り遅れた・・・

残念そうに肩を落とすスバルをスルーして話し始める。

「光の悪魔はナイトメアサバイバル管理者が選んだ参加者をひたすら排除する僕たちにとっては悪魔だ。」

ヤツらの最弱でもそこらへんの雑魚は倒せれる、最強のヤツは僕も戦闘能力はわからないが、そうとうだ。

4分でケリをつけるにはかなり苦しい」

4分ではなく3分だ、違う。

「セツナは電波変換できないもんねー」

どことなく誇らしげにミカゲが言う。

「だが電波スーツ無しでもおまえは指一本触れられず敗北するのは？」

そう不敵に笑みを浮かべるとミカゲは口を尖らせるが悔しそうに黙り込む。

「電波スーツって？」

「疑似電波変換状態になれる特殊なスーツだよ。」

最近、科学分野側によって作られた戦闘用のヤツ、セツナは、まっぴらだ、とか言ってるけどいいけどね」

とミカゲの説明にナイトメアの科学の発達を関心する。

「とにかく、おまえらは準備を始めろ、僕の分の時間で敵を倒せるようにな」

そういうので僕らはバトルカードやサバイバルグッズを選び始める。僕は横目でおそらく僕の分であったモンブランを食べているセツナの幸せそうな、小学一年生ぐらいの普通の少年が食べ物を頬張る姿に「やっぱ子供なんだな」と感じながらも「僕の分・・・」と後悔の念を抱きながらバトルカードを眺め始める。

第27話 セミファイナルその1

アラタは死の宣告を受けたような顔でガツクリと肩を落としていた。グリードが今回は参加ダメ！って言ってきたからだ。

理由1・コインのありそうな場所まで一瞬でいける卑怯な力だから。
理由2・敵への不意打ちなどの手段が卑怯だから。

理由3・とにかく卑怯だから。

よーするにアラタには見学だということ。

一人で負のオーラをバンバン放出しながら体育座りしているアラタ。そこにもうとくに声変わりを終えたんじゃないかと思うほど小学生にしては男性っぽい声でセツナがこう言った。

「アラタ、これをやるから機嫌を直せ」

そう言つてさししたのは、飴玉。

いいのか、小学生一年生（？）に慰められて。
「いくぞ」

目を開けたらそこは、コダマタウンよりほんの少し科学化が進んでいるような町だった。

そしてミカゲもセツナもいるので一安心。

「そつえば、これ」

スバルは二人にカプセルを渡す。

二人は開けるとスケボーが出てきた。

「足の固定可能で安全、足元のスイッチで車みたいに加速、無音、燃料の必要0、アクセルがつくった特別用だよ」

ミカゲはサンタさんのクリスマスプレゼントがきたかのようなはし

やぎっぷり、セツナは試験走をして様子を見る。

「なかなかだな。」

そろそろ行動を開始する、メールを見る」

命令にしたがいメールを見るとみんなのがんばれメールとヒント説明と書いたものがあつた。

「AKIHARA 713?」

その言葉にウォーロックが反応する。

「ドラマとかで聞いたことあるぜ！」

たぶんローマ字変換してアキハラだ！」

うさんくさそうにスバルとミカゲはウォーロックを睨む。

「おそらく正解だ。」

そして数字は7地区の3丁目だ」

セツナは地図を睨みながら言う。

だてにドラマを毎週見ているとウォーロックに対して思う。

「そこには光熱斗の家がある、そこに次のヒントやコインがある」

光熱斗、つまりエクゼと住んでいた場所だ。

「早速スケボーを使う、ついてこい」

セツナはスイスイと先に進むがスバルとミカゲが追いつかない。

「セツナ」

「遅い」

救援をあっさりと吐き捨てるとスーっと進んでいった。

第28話 セミファイナル その2（前書き）

エクゼシ리즈をやった人は1から5のあの町とあの家を思い出し
てくださいね。

第28話 セミファイナル その2

光熱斗の家の前に来た。

有名だしものすごい豪華な豪邸や科学のすべてをつめこんだ基地や要塞などを想像した自分がバカらしくなるほど普通の家、期待外れである。

そんなわけでセツナは内部に敵がいるかを確認してドアを睨む。

「このドアノブは電流が流れる仕掛けだ、僕が開けたら一端ドアを閉める、僕が内側から開けたら入れ」

そう言うとして一人で突入してしまった。

「セツナは対電気用の対策の手袋があるんだよ」

「へー」

「その他いろいろあるし、驚きの手段とか意味不明な道具の数々があるからパンドラ少年って呼ばれてるんだよ」

・・・恐ろしい。

そんなことを言っているうちにセツナがドアを開けてきた。

中もいたって普通、もう期待しない。

ソファには矢が、床には短剣が突き刺さっていた、セツナに敬意と感謝と小学生なのかという疑いを。

セツナは二階に上がるとパソコンをいじり始める。

「四つのコード、学校、校長室・・・」

ミカゲは首を傾げる。

「まあいい、とにかく学校に向かう」

僕らはキーワードの正体について考えながら、家を後にした。

「チッ」

突然、セツナが舌打ちしたかと思うと公園の遊具の影に隠れた。スバルとミカゲもつられて同じような動作をする。

「学校から一人、おそらく最初に家での情報を見たヤツだな、僕が侵入したときには罠が解除されていた」

ならばあの敵は相当の実力の持ち主なのか？

「ここはミカゲ、チャクラムは持っているな」

ミカゲはうなずくとカプセルから取り出す。

「ミカゲ、ここから移動して木の後ろに隠れる。

合図をしたら僕らの場所を察知しないようにチャクラムで敵に攻撃しろ。

僕とスバルはここで待機、ミカゲとの合図で飛び出して拘束する」

スバルとミカゲはうなずくとそれぞれの位置に移動する。

ミカゲが木の位置に移動したことを確認すると、メールを送信する。

「いくぞ」

セツナが勢いよく飛び出す。

スバルもあわてて後を追いかける。

「ぐうっ！」

敵の悲鳴が聞こえる、攻撃は成功したようだ。

セツナはポケットからチョークぐらいの大きさの金属の棒を取り出すとそれを引っ張って伸ばした。

まるでビリヤードで使うような棒になるとそれでよろめく敵の背中に叩き込む。

「ぐはっ」

敵は血を吐いて苦しそうに呻いていた。

「殺されるか、学校の情報を提供するか、どちらがいい？」

「え、駅・・・動物の集まる場所・・・殺さないで・・・」

ガタガタ震える敵を解放する。

敵は足がもつれながらも逃げ出した。

「やはり弱い」

「どうしてわかったの？」

セツナのつぶやきにスバルが反応する。

「罨のナイフに血痕が残っていた」

そんなところで決めちゃうのかと感心する。

セツナがスケボーに乗るとアクセルを踏み、走り出した。

第29話 セミファイナル その3

ミカゲは切符売場で睨めっこしている。

「何をしている」

ミカゲの頭から湯気が出ている、知熱を起こしているようで顔を真っ赤にして目を回していた。

「こいつはかなりの世間知らずでな、ハンターや電子レンジとかテレビとかしか使えない」

切符を購入したセツナはミカゲに購入方法をどうにか教えるとセツナ、スバルは切符を挿入口に入れる。

「ふわあっ！」

ミカゲが悲鳴をあげて二人に救援を求める。

だいたいは想像どうりな内容だ。

切符を入れないで通ろうとしたらしく「通れないよぉ」と泣きそうな声で言っている。

セツナが説明することどころにか通れた。

「恐ろしいところに来てしまった・・・」

ミカゲは震えながら言う。

「僕はおまえの無知のほうに恐ろしいな」

セツナはため息をつきながら吐き捨てる。

「まあまあ、早く行こう」

スバルは今にもセツナに噛みつくこうとするミカゲをなだめて電車を待つことにした。

待つこと3分後、ついに電車が来た。

「注意しろ、この中にほかのセミファイナル参加者が乗っている可能性がある」

あいかわらず、無愛想に助言をくれると右手にさつき使用したセツナの特製武器、キューを握る。

三人は乗り込むがその車両には誰もいなかった。

周囲を怪しそうに警戒するスバルとセツナ、目を輝かせながらそこらへんの席をかたつぱしからベタベタ触るミカゲに胡散臭い（うさんくさい）アナウンスが流れてきた。

「次はー、地獄、地獄です。」

生き残らなければ目的地にはたどりつけませーん」
すると前の車両から敵が。

「セツナ、これは？」

「ゲームを楽しくするためのイベントってヤツだ」

忌々しそうにセツナが回答する。

「楽しすぎるぜ・・・」

ウォーロックが目の前敵たちを睨みながらつぶやく。

軽く前の車両に30から40人は入れる、車両はここを含めて四つ、そこから考えれば最高なら100人以上。

「その一番前のおまえ、あの時に僕にゲーム除外されたトンファー使いか？」

「ああ」

トンファー使いはカプセルを開けるとポンと飛び出したトンファーを握る。

「ここにいるヤツはおまえらを倒したら敗者復活、さらに敗者全員には電波スーツを時間制限無しに着用可能だぜ！」

「ようするに予選敗退した三下どものチャンス、だな。」

こいよ、雑魚ども」

第30話 たぶんわかる第一期のキャラ説明（前書き）

わけわからん、読みづらいこの小説を読者のみなさんに理解してもらおう企画第一段です。

わからない、知りたいなどの質問がありましたら感想のところに書いてください。

前書き、後書きにネタバレしない程度にわかりやすく説明するのでよろしく願います。

第30話 たぶんわかる第一期のキャラ説明

ひさびさのパソコンなので前作のキャラの適当な説明をやらせてもらいます。

飛螺^{ひいら}アラタ

飛螺博士が自分の計画のために作ったクローンの成功作。

なのだが、もはや前作で上の設定はほぼ無。

見た目はふつうの子と大差はなく、ふつうに学んだりするし、知識はたいして無い。

クローン技術とナイトメア内技術の融合で単体電波変換をソロのムーの力のようになにかにたよらずに可能。

性格は気分屋、自由奔放。

電波変換時はソニックスピード。

キラ

スバルが大吾の仕事でアメロツパに一年ほどいたときの友達。

サテラポリス、アメロツパ支部のエース。

性格は冷静かつマジメ。

電波変換時はガロードスラッシュになる。

クロウ

スバルがアメロツパにきた時の友達。

キラとほぼ同じ力。

性格は結構お調子もの。

電波変換時はブラックバードになる。

ゲイナー

上と同文。

性格は少しクール、少し唯我独尊、少し友達思い。

あとは元ナイトメア隊員ぐらい。

電波変換時はオーバーゲイナー。

アクセル

ナイトメアに捕まり人体改造されて電波変換ができるようになる。

性格はマジメで学力はとんでもない。ナイトメア内の本をほとんど読破してある程度の知識をもつ。

特徴的な太ももほどの大きさの鉄の腕は破壊力抜群。

アクセルは鉄類を自由に生成できる特技は人体改造に関係がないから電波変換無しで可能。

ランド

アクセルと同じ境遇になり改造される。

性格はめんどくさがり屋。

電波変換時はレオンスパナになる。

ランドの能力の改造は素材さえあれば3秒でできあがり。

Dr・グリード

ナイトメア内の最高科学者であり、マッドサイエンティスト。

おもしろさ優先させていくため、研究員内で不思議がられる。

彼は星河スバルを特別視していてお気に入りとしている。

彼の行動は意味不明な点が多い要注意人物。

たぶんこれぐらいあれば十分、普通に読めるんじゃないかと思いません。

第31話 セミファイナル その4（前書き）

セツナとミカゲの能力をまた公開。

第31話 セミファイナル その4

最悪の展開だった。

敵の数の前に疑似電波変換状態ではこちらの不利だ。

こちらは電波変換をしないかぎり血管がちぎれるまでがんばっても指一本触れることすらかなわない、相手は周波数一つでこちらをすり抜ける、殴れる、やりたい放題だ。

こちらは僕とミカゲの二人で合計9分なのだからそれまでに倒さないと。

「スバル、おまえは戦うな」

セツナが言った言葉に僕は耳を疑った。

だってこの状況で戦うなんて言うからだ。

「おまえの戦闘能力はこんな雑魚にはもったいない。

それにもし、光の悪魔と遭遇した場合はミカゲでは勝率が薄い。

ここは僕とミカゲにまかせろ」

「セツナ、まるでスバルしか役立たないみたいな言い方だね」

ミカゲは頬を膨らませて怒る。

「日本語は難しいな。」

もう少し抽象的な言葉を選ぶべきだったか？」

セツナはさりげない言葉のナイフでミカゲの心をサクツと傷つける。

「そろそろいいかあ？」

敵が右手のトンファー（電波変換された物）を振り下ろしてきた。

だが、セツナはピクリとも動かない。

「セツナッ！」

「死ねえっ！」

トンファーがセツナに迫る。

だが、次の瞬間、目を疑う出来事が起きた。

セツナのキューでトンファーを、受け止めたのだ。

絶対にありえない事なのだ。

セツナは電波変換していない、ましては電波変換できない人間が攻撃を受け止めているのだ。

生身の人間が火炎放射を受けると言われてもできない、当然の事なのだが、セツナは常識を超越しているのだ。

「セツナ・・・どうやって・・・」

うるたえるスバルを不思議そうに見るセツナとミカゲ。

「そういえば言っていなかったな。」

これがグリードの言う僕の星の民の能力だ」

普通に言っているのだが大変に重要な言葉がスバルの耳に吸い込まれた。

「星の民の能力!？」

「ああ、たとえば・・・」

セツナは受け止めていたトンファアーをはじくと右手を叩いてトンファアーを落とさせる。

「電波スーツは触れている物の周波数を変化させる物が正体、つまりこのトンファアーはただの武器に成り下がった。」

その電波を見る特殊なゴーグルをつけてトンファアーを見る」

スバルはビジライザーを装着するとトンファアーを見るがやはりただのトンファアーだ。

「いくぞ」

次の瞬間、トンファアーに電波が溢れだした。

そのトンファアーは、まるでオーパーツのような状態だった。

「この能力はすごい抽象的でな、ほかにもできるが、説明は後だ」
トンファアーで敵を吹っ飛ばしてもう片方のトンファアーを奪う。

「ミカゲ、あの首飾りを使って援護しろ」

「はい」

ミカゲはカプセルから丸くてきれいな石のついた首飾りを取り出す。
「それは？」

「簡単に言えば具現化結晶に使う素材なのだが減らない、無限の素材だ」

「へ？」

間拔けな声を思わず出してしまった。

具現化結晶には素材が必要なのだ、たとえば火の具現化結晶には火を必要とするように。

逆にライターがあればもう火の具現化結晶ができる。

そんな便利なのか不便なのかわからないそんな力の欠点を無くしてしまっている。

「三下たちが暇なようだからそろそろやるぞ」

「はいはい」

セツナはトンファアを握りしめて走り出す、ミカゲは手を胸の前に組んで意識を集中させる。

スバルは大人たちをなぎ倒す二人の子供をただ呆然と見ているしかできなかった。

第32話 セミファイナル その5（前書き）

感想がまったくこないです・・・

第32話 セミファイナル その5

「よかよか村ー、よかよか村でーす」

アナウンスが聞こえて電車が停止する。

ドアが血でベットリと付着しているがその血のついていない部分から見れるのは横たわる人、人、人。

その呪われているんじゃないかと疑うその電車から平然とおりるセツナとミカゲ、この少年たちは本当に小学生なのかと疑うスバルがおりてきた。

「セツナ、本来なら小学何年生？」

「一年生」

その言葉を疑いたいが嘘はつかないはずだ、僕はこの少年たちを史上最強の小学一年生と認定する。

「ちなみに僕はさっきの武器を電波変換状態に近くする能力を”電波融合”と呼んでいる。

原理は――――」

「もういいよ、頭がパンクするから」

とりあえず僕らは動物園を目指すことになった。

「ついたぞ」

右手にせんべい、左手にまんじゅうを握りながら二人に話しかける。そのお菓子にかぶりつこうとするミカゲの口にせんべいを一枚叩き込み、まんじゅうを頬張る。

こうして見ると甘い物を食べているセツナは数少ない普通の子供らしい姿に見える、猛獣の頭骨をかぶっていなければ。

中に入るとそこには檻から脱走しているっぽい、キリン、ヘビ、ライオンっぽいがあきらかに、人間だろう。

きぐるみっぽいものをかぶって「自分は動物園の動物です」とアピールしているっぽい動きをする。

こういう時は・・・

「そのエセ動物を狩れ、情報を吐かせろ」

「了解」

スバルは即答する。

「動物さーん、ここの情報を教えてください」

ミカゲがエセ動物たちに聞きに言っている。

当然ながら罠にかかり捕獲され、動物園の檻の中に直送。

「スバル、動物の前にミカゲを狩猟したい」

「・・・ミカゲって動物園は初めてなの？」

無言でうなずき、呆れたようにため息をつく。

「で、貴様らは？」

セツナがエセ動物たちに問いかける。

「ああ、僕らは光の悪魔だっぺ」

・・・

「・・・ハイ？」

セツナ談「そうとうの実力の持ち主」の光の悪魔がこーんなきぐるみっぽい装備の変人？」

「とりあえずヘルプミーだっぺ」

へびっぽいきぐるみが、いや、光の悪魔が助けを求めてきた。

「まあいい、こちらが貴様らを助ける、その代わりにここの情報をよこせ」

「こっちだっぺ」

エセ動物たちは僕らを建物に案内を始める。

第32話 セミファイナル その5（後書き）

感想まっています

第33話 セミファイナル その6（前書き）

データベースっぽいものを始めました。

更新した時は読んでくれるとうれしいです

第33話 セミファイナル その6

動物に捕獲されたミカゲを救出し、僕は光の悪魔の案内にしたがつて移動していた。

なぜだかわからないが動物園から旅館に行き、温泉を通り、岩場がエレベーターになったりと不思議な道を通った末、巨大な機械、いや、サーバーのような場所にたどり着いた。

「ここで仕掛けを仕込んでいたらミスってこんな姿になったっぺ、で、ここの装置にあるテトラコードの暴走を解除してほしいんだな」これこれ、と指でツンツンとする。

「あっ！」

コードが絡まるぐらい集まったその場所を覗く。

テトラコードとは、セミファイナル勝者になるためのコインだった。

「とりあえずコードをとっちゃえ！」

好奇心旺盛なミカゲがコードに手をかける。

「待て！ 仕込んでいた罠がー！」

コードを一握りするとひきちぎった。

直後、爆発が起こってみんなを包み込む。

周りがまったく見えなくなる中、低い声で、

「おい、何をしている？」

と光の悪魔たちに問いかけた。

スバルにはかろうじて見えたのは、敵が電波変換した時。

セツナの声はミカゲに対してはありえない、あの3人のようだ。

「・・・さすが都会っ子だっぺ、いくっぺ！」

スバルが煙の中、遠くから見えたのは、長さ10センチのナイフが抜き身で3本。

「セーの、かごめ、かごめ、かーごめかごめー」

煙の中、リズムに合わせて足音が周囲からたくさん聞こえてくる。近いのか、遠いのかなんてわからない。

「さらばだっぺ！ やれ！」

大きな足音が何かに近づく。

「これだから田舎者は……」

セツナは吐き捨てるようにつぶやくと、腰のベルトにくくりつけた短剣の柄を握る。

ガッ！と刃物が何かに直撃したようだった。

直後、スバルの足元にナイフが降り注ぐ。

「僕にとってはありがたいな、この煙は」

「セツナ！」

スバルが近寄り、大丈夫かを確認するが傷一つない。

「セッツナ」

この高い声はミカゲの声だ。

彼女は押し倒すように飛びつくからセツナは受け流す準備をする、が受け流せなかった、体当たりの対象に異常があった。

ミカゲが白い猫になっているからだ。

「畏は無事に機動したようだっぺ……」

弱々しく、敵はつぶやく、おそらくこいつらの目的はコレ。

「スバル、3秒でコイツらに罰を」

「第三電波変換 星河スバル オンエア。

スターダストオーバードライブ」

まるで雪のように輝いて空を舞う粒子に田舎の悪魔たちの悲鳴が溶けていった。

大切な電波変換を3秒、消費してスバルたちは土下座をする光の悪魔たちからの情報を手に入れ、氷付けにしてその場を後にした。

セミファイナル進出のためのコイン、一つ目を獲得。

第34話 セミファイナル その7

月明かりがきれいだ。

セツナはよかよか村の旅館の片隅でボーッと夜空を見上げていた。

バカ猫、ミカゲはこの温泉に入浴中。

セツナは自分の近くで布団に入り、顔を真っ赤にさせてうなだれているスバルに視線を向ける。

バカ猫、ミカゲが罾の確認をしないでコードをひっこぬいたおかげでミカゲは猫に、スバルは敵を倒して、2分ほど経過した時、突然に倒れたのだ。

顔は真っ赤になり、熱はおそらく40度近くでこの僕がどうにか背負い、この旅館でスバルを安静にさせたのだ。

あの貧弱な光の悪魔たちは、罾はすべて一日の間で24時間経過すれば嘘のようになるっぺ、と言っていた。

「セ・・・ツナ・・・」

衰弱しきった弱々しくつぶやいたのは、スバルだ。

「セツナ・・・ごめんね、ミカゲは・・・」

「入浴中だ」

スバルはゆっくりと辺りを見渡す。

「ねえ、質問していい・・・」

「オレも質問したいぜ」

ウォーロックもめずらしく真剣な口調だ。

スバルは頭痛に顔をしかめながら口を開く。

「セツナはなぜミカゲと行動するの？」

その言葉はセツナの心に突き刺さったように感じた。

「・・・どうしてだ？」

「今までの行動で正直にミカゲは戦いなんてものは苦しい、さらに人の事は言えないけどお人好しだよ、どう考えても敵に殺されてしまう」

「だがそんなお人好しを僕が助けているのか、そういうことだな」
セツナはフツと笑うと青い瞳が悲しそうに揺らいだ。

「なんでだろうな。」

僕には思い出、いや、記憶がない、はずなんだ。

だがほんの少し、断片的な思い出と知識が残っていた。

さらにこの施設での訓練の時の戦闘、僕の記憶のない動きが自然とできて、まるで身に染み込んだように、な」

「記憶喪失なの？」

「おそらくな。」

そしてミカゲに会ったのは1ヶ月ほど前、ナイトメアサバイバルの時にヤツを見た時に、何かが脳裏をよぎった。

そして、体はヤツを助けるために動いていた。

それから一緒に行動している」

普段から理論的なイメージのセツナからはあまり想像ができない事だったが現にミカゲは今、僕らの近くで笑っている、普通なら人間を信頼できなくなるような世界で。

「そろそろ体を休めろ、見張りは僕がやる」

スバルはうなずき、目を閉じた。

「次はオレだぜ」

「ウォーロックか、何を聞きたい？」

ウォーロックは腕を組んでセツナを睨む。

「戦闘の動きから思ったことだ。」

おまえは、剣使いじゃないのか？」

仮面越しに見えるセツナの青い瞳が大きく見開かれた。

しばらくの間、沈黙が続いたがウォーロックが我慢できなくなったらしい。

「もういい、あともう一ついいか？」

「・・・いいだろう」

ウォーロックはあくびを噛み殺してから、口を開いた。

「戦闘、知識、口調、性格からだけど、おまえは本当に小学一年生なのか？」

「寝ろ」

セツナは即答全面大否定してウォーロックを寝かせた。

第34話 セミファイナル その7（後書き）

感想まっています

第35話 セミファイナル その8

一般的に人は自分の力だけでは生きられない。

多くの人に支えられて生きている、いや、生かされている。

この世に生をつける。

すると親を始めとする多くの人たちに支えてくれるから、自分は育ち、成長していく。

学びたい、働きたい、遊びたいと欲する自分がいるなら、できるようにしてくれる支えがいてくれる、のが一般だろう。

今、僕のいる現実を支えてくれる人はいない、逆に支えている。

正確にはスバルを背負い、バカ猫、ミカゲを肩に乗せて歩いている。僕が今、この状況を打開したい、それを支える人はいない。

今は朝、昨日の発症からはたぶん10時間ほど経過したと思う、おそらくもう一夜は役たたずたちを引っ張っていくしかない。

駅まで行けばあとはゆっくりできるので僕は足を速めた。

「セツナあ、海だ・・・よ？」

ミカゲはセツナに近づく。

セツナの額にはたっぷりの汗が止まることなく流れていて疲労は目に見える。

クラスでもトップクラスの痩せ型男子のスバルでも小学六年生、ましてやさらに華奢な体のセツナが背負いながら移動することはかなりつらいのだ。

あの時、畏を作動させなければ・・・

「ミカゲ、ここビーチストリートはまず病院を目指す。」

スバルを安静にさせることを優先させる。

僕は一人でコインを集めるからスバルを頼む」

「え、でもセツナが・・・」

うるたえるミカゲはオロオロとあちこちにうろつく。

「フツ、僕を心配するほど偉い人に、いや、猫だったか」

皮肉まじりに微笑むと頭をなでてくれた。

「スバルのことは、頼んだぞ」

私はその言葉を受け取ることはできたが理解がたいへんだった。

彼が、セツナが私を頼ってくれた、そのことがたまらなくうれしく、心を潤わせた。

「少し疲れたからな、敵によつてはおまえを呼ぶ、頼んだぞ」
なんかがおかしかった。

セツナはなんでも自分で解決をしようとして私を頼ることは滅多にない、何かあるんじゃないかなって思う、まさか・・・

「セツナ、熱でもある？」

セツナは私のしつぽを掴むと私を海に向かって投げ捨てた。

第35話 セミファイナル その8（後書き）

感想待ってます

第36話 セミファイナル その8

ビーチストリートの海辺の病院でスバルを入院室で寝かせると時間が惜しそうにセツナは早足で外にでていつてしまった。

ミカゲは猫となったその体で二足歩行して、スバルに水を持ってきた。

「スーバルっ！ お水とってきたよ」

ミカゲは尻尾を左右に揺らしながらベットの近くのイスに飛び乗る。スバルは一応寝ていて、ウォーロックは暇そうに腕を振り回していた。

「ウォーロック、スバルはどう？」

「だいぶ落ち着いてきた。」

暇だから病院をうろついてくるからスバルをよろしくな」

ウォーロックはフラフラっといなくなってしまうた。

たぶん、ここの病院にある巨大な木をみているんじゃないかなあ・
・セツナはわき目も振らないでいつちゃったけどこんな大きな木はみたことがない。

「あと5時間過ぎればこの猫スタイルとおさらばかあ・・・今のうちにしたのしんどこっ」

ミカゲは尻尾を振りながら何をしようか考え始める。

ビーチストリートの町中、裏通りに黒い装束に純白マントのモノトーンの男が一人、まるで光と悪魔を表現するようだった。

「クヒヒッ、ネクロマンサー発見」

セツナは舌打ちをして後ろを振り向く。

ネクロマンサーとはセツナの異名の一つで具現化結晶の風による透明の拳でナイトメアのゴミ共を掃除した時についた異名だ、「見えない手が死霊の手のような」と言うのがまた迷惑の極みである。さらに敵は、光の悪魔である。

あの服装は「光はナイトメアの希望のため」「悪魔は生徒の絶望のため」であり、光の方はナイトメアで活躍するための優秀兵を抜粋するため、であり、悪魔はそのための絶望、ということである。

まさしくナイトメア上層部には希望、ナイトメア下っ端には絶望だ。僕から見るとコイツはトノサマガエルと骸骨の混血のようで見た目は絶望する。

「この様子だと、仲間さんは、病院だなあ、クヒヒッ」

わざとらしく、憎たらしく、気持ち悪い笑いを浮かべる。

「何がしたい？」

セツナは背中ではンターを隠しながらいじる、もちろんバレないように。

「畏にはすっかりかったようだなあ、クヒヒッ」

メール、送信完了。

「動物園のバカどもはすっかりやったようだなあ、クヒヒッ」

「まさか・・・あの畏は全部貴様が・・・」

なら・・・動物園の畏、仮定で病院に行ったとの予想があるとすれば・・・

「病院のお仲間たちはどうなっちゃってるかなあ・・・クヒヒッ」

最悪の展開だ。

おそらく、病院に畏が。

さらに最悪の展開に僕はしてしまった。

ここからならミカゲはあと2分で僕と合流してしまう。

なぜならさっきのメールの受信者は、ミカゲだ。

このままではスバル一人でどうにかさせるしかない。

二人の異常はあと五時間は続くから復活はありえない。

「さあ、君は今までの分もたっぷりとおかえしさせてくれたまえ、クヒヒッ」

こいつは過去に何回か撃退しているので大丈夫といきたいが毎回、作戦が変化してしまうのが厄介だ。

「君にだって例外なく罠が・・・って話を聞かないか！ クヒヒッ」
知ったことではない、ダッシュで逃走を開始した。

第37話 セミファイナル その9

「セツナのシャボン？」

ミカゲが見つけたのは、シャボン玉。

これはセツナの道具の一つで特殊マイクに声を吹き込むとそれがシャボン玉に包まれて宙に浮かび、はじけると言葉が聞こえるって仕組みのヘンテコ機械である。

音は空気振動によって周囲に伝わるのでそこを利用したとかつてセツナは言ってた。

いつか「僕ドラエ。んです」って言えそうなほどの道具の量でそのうち「タケコプター」とか「どこでもドア」とか「タイムマシン」とかつくっちゃいそうだなあ。

とか夢をふくまらせながらシャボンははじけさせた。

「ウォーロック、なんなの・・・？」

スバルは頭痛に顔をしかめながら起きあがる。

「ヤバいぜスバル！」

病院が木のツルに根があふれだして病院が植物王国に！」

ワーギヤー騒ぐウォーロックを沈めて見ればドアには木の根やらツルやらがウネウネと浸食してきている。

「もう下は駄目だし上もやられてる、エレベーターはやられてる」
ウォーロックの説明からして間違いなく罠だ。

さらに逃げ場は封鎖されているようだし。

スバルは外していたビジライザーを装着する。

「あれ？ ウォーロック、ビーストスイングで木を攻撃して」

ウォーロックは命令どおりに攻撃するとツルは引き裂かれた。
やはり電波化されている、故意によるものだ。

「確実に罠だな・・・どうする、逃げ場は病院にはないぜ！」

病院に、逃げ場はない・・・

病院・・・には。

スバルはミカゲの用意した水と痛み止めの薬を取り出して一気に飲み込んだ。

迷信でも痛みは和らいだ。

「ウォーロック、木の制御は地下だね・・・」

「ああ、案内板を見た」

スバルは窓を見る。

「僕だけ休んでいられない、いくよ」

スバルは窓際に歩いていく。

「待てよ・・・おい！」

呼びかけは無駄のようだ。

次の瞬間、スバルは窓から海に向かって飛び降りた。

第37話 セミファイナル その9（後書き）

感想まっています

第38話 セミファイナル その10

「鬼ごっこはおしまいかい？ クヒヒッ」

セツナは一つの大きな部屋に追いつめられた。

25メートル四方のプールのようなものがあり、部屋の角には何かの粉の含まれた袋がそこらじゅうに置かれている、何の施設なんだ？

「予想どうりな動きだよ、クヒヒッ」

「フッ、予想どうりに動いてやったんだ」

平常心を装いながら話を続ける。

「そんなに無理をするなよ、クヒヒッ」

「・・・何のことだ」

敵はあいかわらず気持ち悪い笑みを浮かべている。

「君にも罠が発動しているはずだよ、クヒヒッ」

セツナの瞳が大きく見開かれる。

（見破られた！？）

セツナの額から汗が一滴流れ落ちた。

その様子を見たこのトノサマガイコツはニヤニヤ顔で話し続ける。

「君の心と体は嘘を隠せてませんよ、クヒヒッ」

罠の正体は、例えば・・・」

彼はプールから、拳銃ぐらいの水鉄砲を取り出した。

「これはどうです？」

引き金が引かれ、水が勢いよく飛び出した。

セツナは大きくバックステップした、おそろく5メートルほど。

「どうしましたか、なぜよけますか、まるで銃弾を回避するようですよ、クヒヒッ」

より一層、憎たらしい笑みに磨きがかかる。

「・・・僕は水で濡れるのが嫌いだな」

その言葉を聞いてさらに憎たらしい笑みを浮かべる。

「あなたは皮膚にある痛点と呼ばれるものの反応が強化されていますね、クヒヒッ」

Q、服を着ているX時、着ていないY時、触られた時にはどちらが痛い？

A、痛点とは人間の持つ五感、触覚、嗅覚、聴覚、味覚、視覚の中の触覚に当たるものである。

たとえば三枚ほどの服越しに触ってもあまりよくわからない、それは痛点への刺激が服により弱まってしまっている。

だが、服が無いならどうなるのか、確実に服があるほうが痛みは減るだろう。

セツナはこの場合、Yの状態だ。

「この状態で電流を浴びたら、どうなりますかね、クヒヒッ」
それを聞いた時には遅かった。

セツナの左足に縄が巻き付いていた。

「しまっー」

「水の中でたっぷり味わいますよ」

引きずり込まれた先は、プール。

セツナはバトルカードを握り、水の具現化結晶の泡の膜でシャボン玉のような球体に包ませる。

水中に飲み込まれたセツナを見届ける。

「・・・誰ですか？」

入り口のドアを睨むと白い猫が「ニャー」と部屋に入っていた。

「チッ、猫ですか、クヒヒッ」

敵は酸素ボンベを掴んで水中に飛び込んだ。

第39話 セミファイナル その11（前書き）

電気分解とは電気を使って物質を分解することです。

例は水、水を電気分解すると水を構成する原子に分かれます。

水は水素と酸素に分解されます。

電離は水に溶けた物質に電流を流して分解すること。

水に溶けてもその水溶液に電流が流れない物質があるんです、らしいです。

そもそも水に電流が流れるのはイオンと呼ばれるものが水溶液中を移動するかららしいです。

砂糖水などからイオンの無い純水には電流は流れないそうです。

間違っていたら教えてください。

第39話 セミファイナル その11

スバルは浜辺の片隅でバツタリと倒れてる。

手の腹で砂を必死に動かすがまったくふんばれない、モゾモゾと芋虫のようだ。

「・・・死ぬ・・・死ぬって・・・」

「スバルよくやったぜ！」

ウォーロックが肩を叩いて祝福するがスバルの耳はシャットアウト。熱の中で浜まで泳げたのはすばらしいがとりあえず木の暴走を止めることにしよう。

「ウォーロック、巨大木の制御装置は・・・」

「病院の地下、ちょうどそのドアだ」

震える足と痛む頭の痛みにこらえてどうにか歩き、ドアを開ける。

そこは貧相な部屋で中央の制御装置以外はコードと木のツルや根。

スバルはそのまま制御装置に体で突っ込むように寄り掛かると装置をいじり始める。

「・・・ウォーロック」

「なんだ？」

息切れをしながら必死に装置を叩いていく。

「5分、稼いで・・・いまから制御の反動でツルや根が・・・異常繁殖するから・・・」

「オウツ！ まかせとけ！」

スバルはたよれる相棒の姿に弱々しく微笑んだ。

「いくよ・・・ハア、ウォーロック」

「おう、ビーストシングウ！」

ウォーロックの十八番がスバルを守るため、振り下ろされる。

トノサマガイコツから電流が走る。

セツナは声にならないような絶叫を10分ぐらいの間、繰り返すしかなかった。

「あああああああああーっ！」

（そろそろですかね、クヒヒッ）

電圧を高める。

セツナは力無く泡の中で崩れた、気絶してしまったようだ。

電流を停止させると泡をはじけさせる。

呼吸はできないが今、気絶しているので関係ない、さらに酸素ボンベが重くても小学一年生ぐらいは楽々と運べる。

水中から出るとセツナを放り投げ、横たわるセツナを覗き込む。

小学一年生特有のかわいらしい寝顔をニヤニヤと睨む。

そして、怪物の頭骨に、手をかけた。

直後、セツナの瞳が大きく開かれた。

セツナの裏拳がトノサマガイコツにクリティカルヒット、宙を三回転すると地面に激突する。

「あいかわらずロリコンのホモだな、もはや救えないな」

服についた汚れを手で払うとトノサマガイコツに不敵な笑みを浮かべる。

「な・・・」

「なんで僕が起きている、なんで僕が動いているのか、とでも言いたげだな。

簡単な話だ」

セツナの言葉を理解できないような顔だ、絶望しきっている。

「僕に電撃が当たらない、もしくはきかないなら？」

トノサマガイコツは口をパクパクさせているだけだ。
理解力が異常に遅い、これだからこのトノサマガイコツはおもしろい。

「さあ、いまから僕の説明だ。

おまえを見た瞬間に仲間にメールを送って指示した。

僕はこの施設に貴様のものらしき防水のある道具があったから、僕はこの罠に罠を仕掛けた。

よく周りを見てみる、小麦粉の袋をたつぷりと運んだ。

そして罠の場所に行き、水中で窒息しないように泡で包み、電撃を受ける芝居をした。

その間に、出てこい、ミカゲ」

「いやっほう、ミカゲの出番」

ミカゲは空中で3回転して着地、そのまま2足歩行してきた。

「貴様の罠にかかったバカに風の具現化結晶させてこちら一帯を粉まみれにさせた。

そして芝居を止めて、ここに立っている」

ミカゲは大きく胸を反らして自慢する。

「な、なぜ電撃を・・・」

露骨にうろたえるトノサマガイコツに2人はクスクスと笑う。

「セツナはねえ、服も自分で作っちゃうんだもん、対電のヤツもね」

「ようするに、電撃はきかないし、さらに純水の泡と膜で体を守っていたしな」

「純水は電離しない、分解されないの。

セツナが水を出すかぎりは破壊は無理」

チンプンカンプンな様子でポカンとするしかない敵と余裕の小学一年生。

「罠はたしかにきいていたがな。

いまから現状に戻れ。

今、この密室は粉まみれ、さらに貴様が自ら水を電気分解したわけだ、水は水素と”酸素”を大量に充滿している」

「何をいいたい？」

「”粉塵爆発”ぐらい、聞いたことあるよな」

粉塵爆発とは辺りの粉の範囲が爆発する、言うなら部屋が爆弾になっている状態だ。粉塵爆発と爆弾の違いは空気中の酸素を燃料にする。爆発した瞬間、部屋の酸素を奪い取り、気圧を急激に下げる。密閉空間ではほぼ真空状態になる。

真空・・・状態。

それに気づいた時には遅かった。

酸素がなければ人は、死ぬ。

ドアが開いていれば、密閉は防げる。

探した時には、遅かった。

セツナとミカゲはドアを閉め欠けていた。

「今度は、自ら墓穴を掘らないように」

ミカゲは火の粉を部屋に放り込むとドアを閉めた。
直後、誰かの悲鳴をかき消すほどの轟音が響いた。

第40話 セミファイナル その12

「バカッ！」

ムツとして口をへの字にしてバカ猫、ミカゲはセツナに怒鳴っていた。

何を怒っているのかわからない、珍しくセツナも呆然とするしかなく社長のようにふんぞりかえるミカゲの言葉を聞くしかなかった。

「うう、もしも電撃が一発でも触れていたら即気絶ぐらいの状態でしょう！」

もつと頼ってよ・・・うう」

涙声で怒鳴り散らす小さな猫を見下ろして困惑ぎみに「あたらなかつたんだ、心配しなくてもいい」とつぶやいた。

それがさらにミカゲの心に油を注いでしまった。

「だって・・・水に引きずりこまれた時なんて作戦を無視して助けようとしたかったし・・・心配したもんっ！」

頬を風船のように膨らませてミカゲは両手をブンブン振るが猫の体は小さすぎた、よく見えない。

こいつはおそらく僕の痛点的反応が強化されたところも見ていたようだ。

「そこも含めての僕のさくせー」

「心配・・・したもん・・・」

僕の靴にミカゲは前足をポンと置く。

まだ痛点が強化されているのでギリギリと痛む。

普段なら、「手、いや、足をどける、痛いだろ」と言いたいが今のミカゲの姿を見ていたら、何も言えなかった。

（今回ばかりは、無理したかな・・・）

さっきの戦いを思い出せば予想外の爆発力などを思い出す。

「・・・セツナ？」

ミカゲは希に人の心を読みとることがある、読まれたか？

「・・・悪かった」

その言葉にミカゲは念願が叶ったような幸せそうな笑顔を浮かべたがさっきの態度を崩したくないのかまた腕を組んで威張る。

「む、よろしい。」

でも、たまにはミカゲにも頼つてよ」

「わかった、猫の手でも借りたくなつた時に頼る・・・そういえばおまえはすでに猫だったな」

不敵な笑みでミカゲを見ると顔から湯気が出るほど真っ赤にしていた。

「バカッ！」

ミカゲは猫の持つ抜群の跳躍力でセツナの肩に乗ると右の頬に噛みついた。

まだ、痛点が強化された状態で。

「あ」

ミカゲが気づいた時には遅かった。

声にならない、今度こそ芝居ではない叫びをあげ、気絶した。

その後、3分後に猫から人間に戻ったミカゲはセツナを背負ってスバルのいる病院に走り出した。

朝日が昇る。

そこには爆睡、ノびている、少女、少年がいるなか、めずらしくスバルが早起きした。

昨日の疑似熱状態での水泳に機械いじり、普通ならできっこない。暴走を停止させ、グッタリとしたスバルは午後6時、幼稚園児の睡

眠開始時間だと疑いたくなるその時間から睡眠すれば早起きになる、はず。

「ウォーロック、二人とも寝顔が可愛い・・・特にセツナは普段とのギャップがすごいや」

「ん、なんかほつぺたに噛まれたような痕があるぜ」

言われてみればセツナの頬に小さいが奥までしつかりと噛まれたと思われる痕が。

「ぐう・・・う・・・」

うなされるような声を出しながらセツナが起きた。

「・・・スバルか」

起きたセツナの顔がいつものキリツとした表情であるのが少し残念だと思っている間にセツナはミカゲを叩き起こす。
だが起きない。

「チツ、ならば」

セツナが取り出した物は、ハンターとイヤホン。

最近のは音楽再生機能だつてある、便利便利。

不敵な笑みで絶賛爆睡中のミカゲの耳にイヤホンを装着する。

「悪夢を与えてやる」

スイッチオン。

微かに聞こえるのは、一般的な幽霊関係の音楽。

「うあ・・・つう・・・あうっ・・・うわあっ！」

音楽が流れて3秒に反応、さらに5秒後に起床。

ミカゲは滝のような冷や汗を流して震えながら現状を確認している、幽霊音楽恐るべし。

「・・・セツナはいるね、よかった・・・ものすごいリアルな夢を見た、セツナが突然いなくなっちゃって・・・スバルと別行動をとらないといけなくなったり、光の悪魔と遭遇して戦闘になったり、殺されそうになった時に目が覚めて・・・」

ミカゲは本気で涙目に涙声で夢の内容を説明している。

「でも、よかったあ・・・セツナもスバルも・・・ここにいる」

セツナはタオルを渡し、「涙と汗を拭け」と言って肩を軽く叩いた。
「な・・・泣いてないもん！」

ミカゲは顔を真っ赤にして否定するがうるうるした瞳は嘘をつけない。
い。

「大丈夫だ、僕を信じろ、僕はおまえを消させない、守ってみせる。
だから泣くな」

セツナはミカゲの頭を撫でるとスバルに振り向いた。

「僕が敵からテトラコードと情報の書いた紙を奪っておいた。

今度は科学省、データの中心に情報とテトラコード、つまりコインがある」

「と言うことは今は2個のコインがあるんだね」

セツナはコインを2個、親指ではじいて空中に浮かせる、そして重力で落ちてきたコインを再び親指で、今度はミカゲの額に一個、コインをぶつける。

「うぎゃあ！」

ベチンと音を立てて見事に直撃したコインはミカゲと共に放物線を描いて地面に落ちた。

「仕返しだ」

セツナは頬を抑えて言い放つ。

「ミカゲ、何をしたの？」

スバルは手を差し出してミカゲを起きあがらせる。

「えっと・・・その・・・」

モジモジしながら小さくなっていくミカゲ。

「まあいい、さっさといくぞ」

セツナは二人を置いてアクセルとランドが送ってくれたスケボーに乗って移動する。

スバルもスケボーを出すと慌てて追いかける。

「その・・・あれはね！」

ついに覚悟を決めて言い欠けた時には二人はいない、置いていかれた。

「なにさ、せつかく恥を忍んだのにつ！」
大急ぎでスケボーを取り出して後を追いかけた。

第41話 セミファイナル その13

科学省、そこはどこを見ても機械、機械、機械、自動販売機。

嘘である、自販機は1台だけだ、さらに受付周辺には機械と呼べそうな物はない、薄い灰色の壁が広がるだけだ。

だが受付の先の部屋は巨大なモニターの数々、何メートルもある操作卓、科学省と呼ばれるだけはある内容だ。その道を腰ベルト辺りに手を当てたセツナが注意深く進む、その次にセツナを、いや、セツナの頬を虎視眈々と狙うミカゲがセツナにターゲットに指を隠して接近している。

この前に噛んだ頬が「モチモチしてふわふわしてるんだよ!」と瞳を輝かせていたのだ、おそらく相当の美肌である。

そしてそのほほえましい様子をスバルは興味なさそうに眺めていた。ミカゲはおそらく密室であるエレベーターが勝負の境だと思っているのだろうかいつもは猪突猛進と言わんばかりの行動もなかった。ない。

エレベーターに乗り、上を目指す間もミカゲは手を出さないまま、たどりに着いてしまった。

「・・・むむ」

ムスツとした表情でミカゲはずっとセツナを睨んでいる。

セツナはそんなミカゲなど眼中にないらしく平然としている。

「・・・風え」

憎たらしく吐き捨てるがセツナはまだまだ余裕でドアを開く。

その部屋は机とパソコン一つ有るだけ、あとは特に何もない。

セツナはパソコンの前に来ると操作卓をイジリ始める。

「セツナ、何しているの?」

「ハッキング」

常識のように答えるセツナだが常識外れ、小学一年生の許容範囲を遙かに上回る内容だ。

「・・・答えは1階の人に聞いて？」

ミカゲが呟いた、その時だった。

直後、爆発音と共に建物が揺れた。

「チツ、エレベーターで下にいくぞ」

セツナの呼びかけに3人は走り出した。

エレベーターが下に向かうなか、セツナは平然と、ミカゲは唾を飲み込み、チャクラムを取り出した、スバルはバトルカードを握りしめる。

ついた。

ドアが開いた。

そこには誰もいない。

「ありや？」

ミカゲは出口の方向に向かっていく。

「バカ、罠の可能性が」

セツナはスバルを抑えて先にミカゲの元に向かっていく。

セツナがミカゲの左手を掴んだ、その時、

「バーカ」

マシンガンを持った2、30歳ぐらいのバイクのヘルメットのような物を装着した大きな男が、引き金を引いた。

無数の弾丸が雨のように迫ってくる。

「ミカゲッ！」

ミカゲの左手を大きく引っ張り、マシンガンの射程範囲外に押し出した。

「あ・・・セツナあ・・・セツナあっ！」

「セツナ！」

セツナの体から真っ赤な液体と弾丸が数個、地面に落ちた。

そのまま地面に崩れていくセツナ。

スバルとミカゲは倒れたセツナに近寄る。

揺さぶつても指一つ動かしてくれない。

「・・・スバル、セツナをお願い」

違った。

今までとの雰囲気がまったく違う。

「エンシエント、でてきてよ」

「何でしょうか？」

エンシエントは蝶と妖精をたし算した後、2でわり算したような外見だ、セーラー服に近い服のような服で背中には天使のような羽がついている。

ミカゲの手に握られたのは、ハンター。

「・・・電波変換」

第41話 セミファイナル その13（後書き）

次回は結構大切なところですね

第42話 セミファイナル その14（前書き）

星の民の記憶を更新しました

第42話 セミファイナル その14

ミカゲの体を光が包んでいく。

スバルは物陰にセツナを移動させながら見ていた。

スバルはまだ、ミカゲの電波変換をした姿を見た事がない。

光が四方八方に霧散する。

そこにはセーラー服のような服装だが色は黄色、首には首飾りをぶら下げ、足には長いブーツをはいたような姿のミカゲが立っていた。体中から電気が漏れているかのように放電している。

「何だあ、服を変えても意味ねえぞお！」

敵はマシンガンを投げ捨てると右手に拳銃を握る。

「エレキエンシエントにきくかなあ」

右手の人差し指を拳銃に向けると血管を沿っているかのように右手を電流が駆け巡る。

「ライトニング！」

次の瞬間、落雷のような一撃が指から発射され、敵の拳銃を丸焦げにした。

敵も動揺したがすぐに冷静さを取り戻し、別の拳銃を取り出した。

「こいつはなあ、属性を好きに変えられる弾丸だぜえ！」

「へえ」

ミカゲは興味なさそうな声を出し、首飾りを握ると同時に、敵が引き金を引いた。

「木属性をくらいなっ！」

放たれた弾丸はミカゲに向かって直撃する、ことはなかった。木の盾で弾丸をはじきとばしたのだ。

さらにミカゲの服装も黄緑に変化している。

弾丸の衝撃で舞い上がった埃を手で払うと自慢気に鼻を鳴らす。その状態を興味深そうに睨む敵に胸を反らして、

「属性変化の力は君だけしか使えないんじゃないんだよ」

と優しく笑った。

最初は雷、次は木の具現化結晶で敵に対応している、おそらくミカゲは属性を変化させる力があるのだろう。

「く・・・くそつたれがあ！」

ありつたけの弾丸をすべて乱射したがすべて防がれた。

「降参して、情報を提供すれば何もしないよ」

ミカゲは小さな手を差し出した。

敵はしりもちをついておびえるしかできていない。

「さ、武器を捨てて」

敵が手にナイフを持ち、地面に向かって手から滑り落ちた。

「ありがー」

突然、ミカゲの電波変換が解除されてしまった。

「ふえ？」

ミカゲが自分の現状を把握する前に、敵の拳がミカゲの腹に叩きこまれた。

「あ・・・ぐう・・・」

ミカゲは薄れる意識で状況を把握する。

（電波変換の時間制限を越えた！？）

力なく地面に崩れるミカゲを見ながらナイフを拾うとミカゲの服の胸元を掴んで強引に立ち上がらせると首元にナイフを近づけた。

「形成逆転」

安堵の表情で抵抗できないミカゲの首を掴むと締め付け始める。

「仲間は倒れておまえは戦闘不能だ、さようならだ」

ミカゲは足をジタバタさせるが届くどころか力を無駄使いしているだけ、意識が薄れていくほど足の動きも悪くなる。

「負けない・・・セツナを、助けて・・・みんなで・・・外に・・・セツナを・・・出してあげ・・・るんだもん・・・」

心のそこから願う。

銃で撃たれたセツナが元気に、いつもみたいに皮肉を言っで、甘いものを食べている、セツナを、たった一人の少年が、助かって、生きれるように、と。

グッ！ と、鈍い音が。

その時、祈りが、彼に通じたように、黒い一線がまたたく間に、敵の腹に何かが叩き込まれた。

声すらあげられないほど、素早い一撃に敵は放物線を描いて地面に叩きつけられるしかなかった。

意識と息を整える間もなく、ミカゲが見たものは、トンファー！。

「僕の誇りを汚そうとは、命知らずだな」

あまりにも、聞きなれた声。

受け止められた先にいたのは、セツナだ。

「スバル、敵の懐を探せ」

スバルはそこから紙を取り出した。

「セツ・・・ナ？」

「ミカゲ、おまえにしてはがんばった方だな」

相変わらずの皮肉を言い放つセツナ。

「でも・・・なんで生きて・・・」

「勝手に人を殺すな。」

これを使っただ」

セツナの手には、ゴム製の特殊な装置、それはブランコのような形状でたしか300メートルも伸びるアイテム、もう一つは、血のり、最後は、腰についた宝刀。

「この宝刀にはおまえの首飾りに近い物がある。ただし風属性だけ。これで弾丸に極限まで空気抵抗を与えて威力を0にして、血のりで死んだふり。

あとは自分をベルトに装着、スバルにギリギリまで引っ張ってもらう、そして突撃」

スラスラと説明するセツナに怒りを丸だしにしてミカゲはドロップキックした。

だがあっさり避ける。

「バカっ！」

「引っかかるほうが悪い」

ワーギヤ―騒ぎながらも科学省を後にした。

第43話 セミファイナル その15

「ん、どうしたのセツナ？」

セツナは血のり入りケースの残量を気にしながらも遠くを警戒しているようだった。

「いや、気のせいだ。ミカゲはもう光の悪魔への対抗できる力がない、サポートできるのはおまえだスバル、頼んでいいか？」
「なんだか変な言い方だ。」

「わかったよ」

そう言うときまたビルの方角をチラチラと睨んでいた。

「スバル、どしたの？」

ミカゲは心配そうな表情で見つめてきた。

「なんでもないよ」

僕は笑顔を見せるともう一度セツナに振り向く。

「・・・スバル、科学省で調べ忘れがある、一度戻るから先に駅に行ってTKシティにいけ、後は紙のとうりにな」

そう言うときミカゲの頭に手をポンと当てて走り出した。

「どったのかな、セツナ」

スバルは無言で首をかしげると駅に向かおうとした。

次の瞬間、爆発音が響きわたった。

「駅にいつてて、僕が見てくる！」

「えー、きつぷうりばとか苦手・・・」

ブツブツと愚痴を垂れ流すミカゲをスルーしてスバルは音の方向に走り出した。

道角を曲がった先にあったものは、

血、骨の欠片、焼け焦げ、破れたような黒い布切れ。

まさしくセツナの装備の物だ。

その周辺を見渡しても何も、いや、あった。
シャボン玉だ。

スバルは引きつけられるように近づくと、それを割った。

「何だつたの？」

ミカゲは小首をかしげながら訪ねてきた。

「たぶんほかの参加者だよ、さあいこう」

「うん」

ミカゲはうなずくと切符売場で震えながら購入するとどうにか列車に乗れた。

「なんとかシテイに出発！」

「ピクニックみたいな気分だね・・・」

スバルは呆れながら電車に揺られ始める。

第44話 セミファイナル その16

スバルはミカゲと一緒にショッピングエリアに来ている、いや、来させられた。

TKタワーはロッポンドーヒルズ、つまりデパートのような施設である。

無邪気な小学一年生はセツナがいないのをいいことに店を網羅していく真っ最中。

ミソラちゃんとよく似ている、とスバルは落胆しながらミカゲに引っ張られていく。

TKタワーはもうすぐそこなのに、と思いつつ張られていく中、トイレに差し当たった辺りで声が聞こえた。

「・・・はい、はい、・・・わかりました、タワー付近に爆弾を設置します、星河スバルをゲーム退場させます」

「ミカゲ」

「スバル」

思わず顔を見合わせる二人はニツコリとまるで天使のような微笑ましい顔で笑い合うと次の瞬間、悪魔のごとき狂気の笑みに変貌した敵の裏をこんなにあっさりと聞こえるだなんて運がいいとしか言えない。

「ウオーロック、そのバカを倒すから電波変換する」

「おもいつきりな」

「ミカゲは先にTKタワーにいくね」

それぞれの目的のために移動開始。

スバルの先にはサラリーマンの制服を来た男。

スバルはそろそろと近寄ると飛びげりを食らわせる。

「ぐあつ、星河スバルまさか来ているとは、くたばれえ！」

そういつてウィザードオンしてサテラポリスで使われているような一般ウィザードが飛び出してきた。

数は・・・300。

「・・・」

「・・・」

思わず無言で顔を見合わせるスバルとウォーロック。

敵のウィザードが一斉に右手の銃を構えてきた。

「はい？」

次の瞬間、赤、青、黄、緑と色とりどりの閃光が襲いかかってきた。

ミカゲはTKタワー、2階で止まっていた、いや、止まらざるをえない敵が目の前にいた。

白と黒の服装、光の悪魔だ。

しかもあの筋肉質な体、顔にある蜘蛛の入れ墨、あれはたしか光の悪魔でも実力ナンバーワンとの呼び声もあるヤツである。

しかも偶然ながらバツタリ遭遇してしまい、逃げようにも逃げれそうにない。

しかたないのでチャクラムを両手に握り、距離を計るぐらいが限界。せめてスバルの合流のための時間稼ぎ、なんてかつこ悪い、やっぱ勝たなくちゃ。

第45話 セミファイナル その17

スバルは今まで1対1、つまりタイマンなら嫌というほどやってきたが1対団体は皆無、まったくと言っていいほど経験がないのだ。現状を顔を見合わせるしかできないスバルとウォーロックでは戦略なんてこれっぽっちもない。

そんな彼らへ赤や青や黄や緑の閃光が襲いかかり、さらにナイフに手榴弾に火炎放射に槍に電撃に弾丸など次々と飛来してくる。

今すぐものすごい勢いで戦線離脱したいがスバル自身が最終防衛ライン、逃げればライン自体が下がるわ敵は迫るわけで良いとこなし。なんでもいいからこの敵たちを相手に戦わなければならない、でないと死、あるのみ。

「バトルカード、ロングソード！」

スバルの声に呼応したようにロングソードが現れ、握られる。

「殺しなさい！」

敵の声に合わせて攻撃が始まる。

スバルは姿勢を低く保ち、敵陣に切り込むとダンスのように切りかかる。

（10・・・20体・・・）

「バトルカード、ミニグレネード！」

爆発に断末魔が紛れるが関係ない、無数の弾丸を避けながら攻撃しないと自分が断末魔を吐くハメになる。

（えーと・・・50）

ウォーロックも十八番ことビーストスイングで参戦していく。

「うおおらっ！」

横振りに振り回されていくその爪は今の自分には大切な戦力だ。

「ウォーロック、今、何体倒した？」

「80だ、おまえは？」

「81・・・ってなんでえ！？」

目の前にはまだまだ行列ができている、300なんて問題ではない、1000体以上の数だ。

現在、倒した敵は151体、そんな数など関係ない、そんな数がスバルを殺すために目の前に今か今かと並んでいる。

「ふざけるなあっ！　今までの努力はなんなんだあ！」

ウォーロックはうわんうわん嘆くがスバルは残りのカードを確認していくがあきらかに足りない、まったく足りない。

「ウォーロック、時間の確認頼んだよ、電波変換するよ」

「第三電波変換、星河スバル、オンエア！　ダイヤモンドダストモード！」

スバルの体を氷が装着され、翼が氷で構築されていく。

「バトルカード、アイススピニング！」

スバルはカーリングのようにペンギンを投げつける。

ペンギンが敵をボーリングのピンのようになぎ倒していく。しかしそれでも減った感じがなにもない。

「あと4分！」

ウォーロックが叫んだ。

スバルは右手の長銃を敵に構える。

「アイスショット！」

氷の固まりが発射され、地面を滑りながら敵を吹き飛ばす。

「反撃しなさい」

その一言に敵が反撃の弾丸を一斉に、隙間なく発射してきた、避けられそうにない。

「アイスウォール！」

氷で壁を構築させるとその陰で身を潜める。

「あと3分！」

「スバル、こうなったら強引に突撃して本体を叩け！」

スバルはうなずくと壁を砕いて棒状の氷を握ると氷壁を溶かして津波のように流れさせる。

「いくよっ！」

スバルは地面を蹴ると空を飛んだ。

第46話 セミファイナル その18

ミカゲの額から冷や汗が垂れる。

だって光の悪魔最強候補が目の前にいるのだから。

「諦めな、てめえじゃ勝てねえよ」

「どうでよーか」

ムスツとした表情を作り、睨みつける。

ミカゲの持ち物は、チャクラム、バトルカード、不思議な首飾り、スケボー、あと、

「お手並み・・・拝見！」

ミカゲが取り出した物は、新品のトランプの箱。

その中のトランプを握ると横振りに手を動かしながら一枚ずつ落としていく、そのトランプを具現化結晶させた風の波に乗せるとトランプを風の波の上を走らせた、敵に向けて。

「知ってるか、俺様の異名、スパイダーっつー異名。つまりな・・・糸にかかった獲物を、食べるんだ」

次の瞬間、トランプが真っ二つに切断された。

「えっ？」

（衝撃波？ 真空波？）

ミカゲはもう一度トランプを投げるがまた真っ二つ。

「無駄だ、獲物が蜘蛛を食えるか！」

巨体にしては不自然なまでに身を屈めると迫ってきた。

「くらえっ！」

「お断りしますっ！」

迫る拳を横っ飛びして回避する、したはずなのだ。

「巢にかかっているんだ、無駄だ」

頬がパツクリと裂かれ、血が垂れる。

「さあ、足掻け！」

必死に移動しながら考える。

（電波の変化はない・・・刃物は見えない、空気を何かで利用している？）

思考を回転させているうちに刃物の切り傷が増えていく。

（やっぱり刃物？）

「頭回転させて考えろお！」

「ひゃっ」

拳を振り回すたびに体に切り傷が刻まれていく。

「いっつつ・・・」

やはり拳と連動して何かを発生させているようだ、それ以外では切り傷はない。

（あとは・・・法則！）

ミカゲは目に神経を集中させると左の拳を振る瞬間を見定める。

「ぐう！」

裂かれたのは右足の太股。

次は右手。

今度は左手首。

（左右が逆になっているっばいや、なら振られた拳の向きに移動すれば）

「何しているんだ」

ミカゲが気づいた時には遅かった。

拳が腹に吸い込まれていった。

「あぐっ……う……」

せき込みながら立ち上がろうとする。

「あれ？」

起きあがれない、手首とかは動くのに足が動けない。

「おまえには3つの勝利があった、一つは自分一人で勝つ、二つ目は星河スバルの到着まで時間稼ぎ、三つ目はネクロマンサーの到着、一つ目は叶わなかった、二つ目は今は戦闘中だ、三つ目は本人が無事ならな。」

ネクロマンサーはロケットランチャーで射殺した」

ミカゲの目が見開かれる。

（たしかにスバルの心は生きてるか分からないって言ってたけど・

・

「嘘だ！ ミカゲはセツナを信じてる！」

「もう終わりだ、さようなら」

ミカゲは目を瞑り、体を硬直させる。

「言っただけだ、僕を信じろ、僕はおまえを消させないって」

拳が、はじかれる。

そこには、肩を過ぎる黒い髪、化け物の仮面、小さな背中。

「その筋肉バカ、ミカゲの勝ちみたいだな」

この自信に満ちた声。

「待たせたな、遅くなっ
たし」
振り向き、頭をポンと叩く。

「ほんと・・・いつも遅すぎるんだもん、遅刻だよ、セツナ」

セツナは不敵に微笑んだ。

第47話 セミファイナル その19（前書き）

後書きに科学的なことは書いておきます

第47話 セミファイナル その19

「やれやれ・・・」

呆れ気味につぶやいたセツナはミカゲを立ち上がらせる。

「なぜだ、なぜ見捨てないで助ける、勝率が絶対とはいえない。

その子供はここで死んでも現実では生きていられる。まして自分の命まで危険に晒される。なのになぜ・・・」

「僕は・・・いつか助けるから今はだまって傷ついていろって言うのか、そんなことには耐えられないぐらい弱い人間だ、僕はミカゲよりも弱い人間なんだ」

ミカゲは血塗れで震える手でセツナの黒い服をギュツと握る。

「おまえもがんばったな、あとは僕にまかせておけ」

「まっ・・・」

セツナはミカゲの後ろ首を叩くとミカゲはグツタリとうなだれた。

「自分でもなんでコイツと一緒にいるのか、なんてわからない。

ドジでマヌケでなれなれしいヤツは嫌いだ。でも、誰も失いたくない、僕は失うことが怖いんだ。それに、負ける気がしないしな」

その言葉を挑発と受け取ったのか表情が酷くなる。

「こいよ、筋肉バカ」

筋肉バカの部分のみ強調して指を自分のほうに動かす。

沸点が低すぎるのか猛進してくる敵をセツナは後ろに避ける、皮膚を何かが切り裂く。

「見えない攻撃なら、見なければいい」

セツナは目を閉じ、トンファ―を装備する。

再び迫る拳を避けると何かを感じ取ったようにセツナは距離をとる。

「からくりは解けた」

セツナはトンファ―をしまい、カプセルから取り出した物は、

「閃光玉？」

ああ、とセツナは不敵に微笑むと投げつけた。

閃光がその場を包み込む。

光が消えるころには、トンファ―を敵の首もとに当てるセツナと硬直する敵がいた。

「なんで・・・」

「根絶丁寧に説明してやる。おまえは拳に合わせて鉄のような系を操作していたんだ。壁などにくっつけて操れば見えない攻撃の完成、そして見えないようにするために必要なことは、色の同化と光の屈折だ。色はともかく光の屈折の説明だ。これは物体にはいる光を何かを通したりすれば光は曲がり、視界に入る位置が変わる、視界にはいない視界位置に屈曲させればみえない攻撃の完成だ」

「ならなぜ俺のところまで来られた、鉄系をすべてかいくぐれるなんて無理だ！」

声を荒らげ叫ぶ敵に呆れ気味に首を振る。

「できる、僕ならできるんだ。二つの言葉を知っているか？ 絶対音感を。こいつは音のドやレを一瞬でわかる能力だ。ピンと張った糸を風で揺らして振幅と振動数を変化させながら糸の位置を感じ取った。もう一つの能力は星の民の力だ。一つ目はかなり抽象的だが、僕にはもう一つ星の民の力がある、それかなり具体的な能力だ。 ”完全記憶能力” というな」

意味不明としか頭にならないらしいセツナの説明を敵は冷や汗まじりで聞く。

「完全記憶能力？」

「ああ、たとえば辞典をすべて一時一句間違えずすべて記憶できる。これで最初に入った時の月明かりの光に反射した線光と攻撃時の切り傷との位置の違いがあつた、それを脳に記憶して、そこから風の振動と閃光弾で糸の位置を再び完全記憶能力で覚えた糸の位置と確認しつつ接近しておまえの首にトンファーを寄せている」

敵は軽く舌打ちするとセツナを突き飛ばし、拘束から逃れると素早く窓から飛び降りた。

窓からはバラバラという音、フロペラの回転する音だ。ヘリコプターに乗った敵がライフルを構えてきた。

セツナは柱を盾に弾丸を回避する。

「チツ、やっかいだな」

「セツナ！」

階段から息を切らして来たのは、スバルだ。

「スバル、とにかく屋上まで逃げろ！ 地上では狙い撃ちにされる

！
」

スバルは言われたとつりにセツナと階段を駆け上がる。

屋上まで駆け上がるが為す術もなく柵を盾にしかできなかった。
ヘリコプターとは約100メートルまで差がある、どんなにがんばっても空は飛べはしない。

「スバル、今の持ち物は？」

「スケボーとかTNT爆弾とか！」

ずいぶん微妙なアイテムしかないとがっかりしながらも弾丸を回避しつづける

セツナは思考をフル回転させて考えてみた。

とどかないなら・・・とどこまで飛べばいい！）

「スバル、電波変換の余りはあるか？」

「10秒！」

「上出来だ、ゴムベルトをスケボーに装着させて自分の足を固定しろ！」

スバルは言われるままに動くと「どうするの？」と問いかける。

「僕に続け！」

次の瞬間、セツナはゴムベルトを柵に固定させるとその場から飛び降りた。

「ええっ！？」

スバルも戸惑いつつもその場から飛び降りた。

スバルはジェットコースターに近い空気抵抗や引力の中、体制を保ち、落下する。

TKタワーの屋上は約300メートル、そこからその下の地面ギリギリまでゴムが伸びていく。

地面スレスレでゴムが限界になり、ピタツと止まる。

そして、ゴムの元の形状に戻ろうとする反発の作用が発動する。

「人間パチンコ！」

重力が無くなったように体が空に向かい、タワーを越して上に進んでいく。

「今だ、スケボーを外せ！」

セツナの声を聞いたと同時に二人は足をスケボーの固定から解除する。

「第三電波変化変換 星河スバル オンエア！ スターダストモード！」

電波変換が完了するとセツナの手首を掴んでヘリコプターまで飛び、乗り込むと同時に電波変換が解除される。

「残念だったな、スパイダー」

セツナはトンファーを握りしめると俊足で敵の腹に武器を叩き込む。倒れる敵からコインを奪うと不敵に笑う。

「獲物だったのは、おまえのようだな」

苦しそくに顔を歪めてセツナを睨むがセツナはせつせと爆弾を設置するとスバルと一緒に飛び降りた。

セツナが起爆ボタンを押すとヘリコプターが爆発、木っ端微塵になった。

「ねえ、セツナ。着地したら僕たち死んじゃうよね？」

冷や汗混じりにスバルが問いかける。

「ああ、僕だけなら足を電波融合させればウェーブロードに着地できるがスバルが死ぬな」

腕を組んで冷静に考察するセツナにツツコミを入れるがセツナは１ミリも動じない。

「まあ大丈夫だろう、おそらくな。スバル、僕を体にしがみつけ」

スバルは言われるままにセツナの服を握り、しがみついた。

次の瞬間、マントの付近からパラシュートが現れ、フワフワとゆっくり落ちるようになった。

「まったく、スバルには敵の誘導ともう一つのコインを取りにいく間に頼りにしていたが・・・まだまだだな」

「セツナ、コインはセツナが新しく手に入れてきたって言うけどどこで手に入れたの？そしてセツナは本当に小学一年生なの？」

「科学省でのパソコンをいじった時にもう一つ書いてあったからな、敵の注意を僕に向け、消したついでに取りに行っただけだ。もう一つについては・・・スバル、僕は今すぐ貴様を蹴落とすことがで

きるぞ」

スバルは慌てて全力で謝るとセツナは許してくれたようだ。

その後、居眠り（？）しているミカゲに幽霊ソングで起床させると五個のコインを重ねて、クリアした。

第47話 セミファイナル その19（後書き）

光の屈折について

これは透明な物体に光が垂直に入射すると境界線（縦に垂直な線を想像）で進む向きが変化する現象です。

自分たちは光の道筋を屈折しないまま、つまり直線のままの光が直接見えるので実際の位置との変化があるんです。

例はプールなどで見ると浅そうに見えることは目に入る光の角度が変わるかららしいです。

色の変化は赤、青、緑、の光を調節すればさまざまな色になるので背景と同化させてます。

絶対音感とはドレミファソラシドなどの音の音程をすべて把握する能力です。

例はピアノの音を見ないですべて分かるのです。

セツナは一定の距離ごとに鉄系をはじく力の変化させて音の大小と高低を変化させるように風を出しています。

鉄系を弦と例えて弦の振幅を大きくすれば大きい音が、弦の振動部分を短く、また、弦を張り方を強くすれば高い音が、また、反対にすれば逆になります。

第48話 セミファイナル 終了後

「なんでミカゲに戦わせてくれなかったの!? そうやっていつもいつも遅れてきてはおいしいところをゴツソリ取ってばかりで・・・
ブツブツ・・・」

「だったら強くなって僕が戦う前に勝負を決めればいいだろう。
そのためにおまえはいろいろ隠したり無理をしているんだろう・・・
ブツブツ・・・」

スバルは現実世界に戻ってすぐさまセツナとミカゲが眼と眼で火花を散らせて絶賛討論中なので邪魔しないように仲間たちとワーギヤ
ー騒いでいた。

しばらくするとミカゲがプンプンと言った擬音が似合う動きで近づいてくると「ファイナルの出場者リストとファイナルの舞台を見に行くよ!」と怒りをそのままぶつけるように言つとその場を走り去った。

スバルはセツナを振り返ると普段とは少し違った表情、まるで勝利の笑みのような表情を少し浮かべていた。

「僕ら3人・・・さらに舞台が現実世界のナイトメア遊園地、か」

セツナは怪しそうにその結果を眺めていた。

ミカゲはまだ機嫌が悪そうに口をへの時にして腕を組んでいた。

「さて、今回は四人だからそっちで選べ」

セツナが促すと真っ先にアラタが挙手した。

「まあ戦力としては申し分ないだろ」

たしかに星の民の力に変換時の戦闘能力、たしかに現状の参加者の中ではトップクラスだ。

「アラタ、頼んだよ。これでみんなを助けられるんだ、これで終わらせて、帰ろう」

「あつたりまえだ！ 夏休みの大切な遊び時間を奪ったぶんもたっぷり暴れさせてもらおうじゃねーか！」

右手をブンブン振り回してアラタは飛び跳ねる。退屈な時間が大嫌いなアラタはイライラが溜まっているんだと思う。

「今回は現実世界だ、つまり敗北は死だ。僕らはこの場所からさっさと出ていくんだ。こんな腐った場所で死ぬわけにはいかない、必ずクリアするんだ」

みんなはうなずくと準備を開始した。

グリードはセミアイナルの戦いの映像を子供のように楽しそうに見ていた。

「あははっ、やっぱりスバルくんはおもしろい、けど、セツナくんは違ったおもしろさがある。次は君に行ってもらっ、目的はセツナくんを揺さぶればいい、あとはなんでもいいよ」

「かしこまりました」

近くにいた男はマジシャンのようなハットを深くかぶり直すとニンマリと笑い、部屋を出ていった。

「セツナくんには覚醒して言ってもらわないとならない、完全記憶能力者、彼の力、彼でないと・・・」

その時、グリードの部屋に拳銃を構えた男たちが入ってきた。

「グリード博士、こちらへ来てください」

中央の男が銃を下げて、宣告するとグリードはクスクスと笑い始める。

「いやだよ、まだやることがあるんだよ」

もう一度、男が銃を構え直した。

第49話 ファイナル その1

スバルたちは小部屋に閉じこめられていた。

最初の課題はなぞなぞ、セツナは三枚の紙を握っている。

「もう一回言うぞ。 罪に苦しみ、罰を受け、死を迎え、闇に堕ちよ。 光は真実を照らし出す。 あの紙は偽物だ、本当の真実を見る」

スバル、アラタ、ミカゲ、ウォーロックはセツナが朗読する言葉に頭を抱えて悩んでいた。

しかも開始から5分、今回は30分までに指令をクリアしろと言う内容だ、時間がないのにセツナは余裕の表情でバカにしてくる。

「セツナせんせーい、そろそろ時間がまずいです。 プリーズ答え」

セツナはため息混じりに、やれやれとつぶやいた。

「簡単だ、まずは最初の文章を偽物と断定すれば最後の言葉は消える。 あとは光を当てれば答えが出る」

セツナは説明すると紙に光を当てる。

「闇に堕ち、罰を受け、罪を償い、死を迎えよ。 これが答えだ」

その瞬間、扉から派手な音がして開いた。

「次はアイスワールドを通してヒントを探せ、だ。　いくぞ脳無し共」

セツナはスバルたちに脳無しのレッテルを張るとスケボーに乗り、走り出した。

脳無し共は慌てて後を追いかけた。

「寒っ！」

第一言目なのだが、遊園地のアトラクションの一つだが、寒すぎた。

- 40　の世界なんて建物に大胆に書いてある時点でアラタとミカゲは逃げ出したが2歩目でセツナに襟元をガツチリ掴まれて3人仲良くご入場なされたので後ずさるスバルは涙を飲んで入場した。

そしてここはボブスレーに近い乗り物で移動するはずだが、無い、乗り物がない。

「まあいい、おまえら体で滑れ、僕は見て、・・・なんだ・・・この音は・・・」

凍った鼻水を垂らし、歯をガチガチとさせて震えていた3人は耳に神経を集中させる。

「たしかにゴゴゴーって聞こえるけど、って後ろの壁にヒビがあ！」

ミカゲが指した氷の壁にヒビが、ついでに言えばそこから水道管からあふれているかなような水が。

「チツ、スケボーに乗れ！」

スケボーに乗ると同時に氷の壁が決壊した。

滝のごとき水がスバルたちの背中に迫る。

「どわあああ！ 絶対に計画的だろ、でもなんか楽しいー！ イヤッホオオオオオオオウ！」

アラタはアクセルを全力で踏みつけ、本来なら別の乗り物で滑るコースを邁進していく。

「セツナ、競争しよっ！」

「いいだろう、負けた場合は罰ゲームだ」

「ちよっ、セツナ！」

「心配いらない、僕には完全記憶能力がある、途中にヒントがあっても見逃さない。それにスバル、おまえも参戦だぞ」

スバルが反論を言うまえに勝負は始まってしまった。

結果はセツナ、アラタ、ミカゲ、スバルに終わった。

ついでにゴール地点に指令があったのでその次の場所に行くことになった。

その場所が、

「お化け屋敷・・・」

スバルは蚊の息にかき消されそうな声で呟いた。

第49話 ファイナル その1（後書き）

スバルは怖いものが嫌いでしたね。

お化けの映画でワァーギャー騒いでいたのでこれなんて、フッフッフ・
・

ちなみに作者は小学校時代にお化け屋敷のお化けに挨拶してきました。
（笑）

感想待ってます

第50話 ファイナル その2

僕、星河スバルは今、最大級の危機を迎えている。

このそびえ立つ漆黒の建物、入り口で僕たちを待ちかまえるあの死神の衣を引きちぎったかのようなあのれん、そして受付口。

「ついにきた・・・お化け屋敷」

唾を飲み込み、緊張感を周囲にバンバン放出して、スバルは入り口前に立っている。

「さっ、行こうぜ、スバルっ」

恐れを知らない音速少年、アラタはイタズラっ子な笑みを隠そうともせずにスバルを引っ張る。

「ミカゲも引っ張るのを手伝ってよ！ ミカゲ？」

アラタを問いかけた先、ミカゲはまるでゲームのラスボス戦前のような緊張感でお化け屋敷を睨んでいた。

「ありゃ？ ミカゲってお化け屋敷が苦手？」

「だってミカゲは一回もお化け屋敷にはいったことはないけど別に怖いとか恐ろしいとか今すぐ逃げ出したいとかそんなことを言いたいとかそんなことを思っていないんだよ！」

通常よりかなり早い口調で、まるで慌てているかのような様子、ミ

カゲはダメだと見捨てる。

「セツナ、ミカゲのかわりに・・・セツナ？」

そこにはいつものクールで冷静で不敵な笑みを浮かべるセツナの姿はない、動きはカクカクとして、顔が強ばっている。

「な・・・なんだ？」

口調も不自然で仮面で表情を隠す仕草は・・・

「・・・セツナ、怖いのか？」

その言葉に体がビクツと反応した。

「な・・・なにを・・・いつて・・・いるんだ？ 僕は・・・こ、怖いなんて・・・まったく・・・思っでは・・・いない・・・が？」

あきらかに歯切れが悪い、悪すぎる。

こんな時に無理を丸だしにしたセツナを見れるほど余裕な自分はよかった、とアラタは心底安心する。

「あれ？ まさかセツナがお化け屋敷が怖い？」

ぐっふっふ、と異様な笑い声と純粋な瞳でミカゲはセツナを睨む。

「な・・・そ、そんなわけがないだろう！ 敵を恐怖で怖がらせるが自分が怖がるなんてありえんっ！」

こんなお化け屋敷なんかで意地を張られても困る、そしてセツナは

まだ小学一年生なんだと再認識する。

「それよりおまえはどうなんだ、ミカゲ？ お化け屋敷はあのスバルをもおびえさせる恐怖の場だぞ」

「むぐ・・・でもセツナだってそうでしょ！」

「僕が何時、怖いと宣言した？」

「だったら勝負してろ！ お化け屋敷を突破できたら勝ち、いくぜ！」

「「！！」」

二人は全速力で受付に突っ込む。

「スバル、後ろにしがみついてろ」

スバルはうなづくアラタの背中にくっついた。

第51話 ファイナル その3（前書き）

ファイナルがものすごく短くなりそうな予感・・・

第51話 ファイナル その3

セツナはクールで冷静な人間だ。

どんな敵が来るだろうが自分の作った武器で敵をバツバツと倒し、屍の山を築き上げ、勝利を手にする素晴らしい実力者だ。

もう一度言うがセツナはクールで冷静な人間だ。

たとえ絶体絶命のピンチだろうがその身体能力で敵をバツバツと倒し、屍の山を築き上げ、勝利を手にする素晴らしい実力者だ。

さらにもう一度繰り返すがセツナはクールで冷静な人間だ。

どんなに強い敵だろうが完全記憶能力で脳にある情報をその状況にあったものを引き出し、戦局を逆転させ、敵をバツバツと倒し、屍の山を築き上げ、勝利を手にする素晴らしい実力者だ。

決して、こんな姿ではない、と心に言い聞かせ、アラタは平常心を保つ。

彼の目の先には片膝について冷や汗を拭い取るセツナの姿が。

セツナの恐がりっぷりはスバルほどではないが、警戒心をブオンブオンまき散らしているのにお化けの役の人が「ワッ！」って脅かす古風なやり方ですら壁ギリギリまで後ずさるセツナの姿は己のアイデンティティーを粉碎しきった。

「セツナくん？」

アラタがある意味で心配そうに声をかけるとセツナはハッと我に返った瞬間、自分の現状を素早く把握するといつもの雰囲気を漂わせるが遅れ、痛々しい。

「・・・ミカゲは？」

セツナは周囲を見渡すとアラタに問いかける、だが、いない。

「オイオイオイ！ わずかスタート10分で早くも遊園地のある意味恒例イベントである迷子が発動だとお！？」

何っ！？ と周囲に首を振り、自身で周囲を確認するがやはりいない。

「チツ・・・最悪だ、僕が怖がつ・・・もとい油断していた隙をつかれたか。 やはりファイナルだけある」

「セツナ、搜索にいきこ！」

「ああ、スバル！・・・スバル？」

スバルは出口で体育座りして震えていた。

「くっ！ ライトニング！」

電波変換したミカゲ、エレキエシエントの指先から光速の電撃が走るがその攻撃は敵のマントに吸い込まれていくように消えてしまった。

ミカゲは正体不明の敵との距離を取る。

もう一度電撃で攻撃するがまったく効き目が現れない。

「なんなの？」

「君のことについては調べさせてもらったよ。君には悲劇のヒロイン役になってもらうよ、ソフフ」

ミカゲはムツとするとファイアエシエントに変化して炎を放出するがまったくダメージがない。

（なんでマントに吸い込まれると火も電気もダメージがー）

「ーントムクロー！」

「しまっー」

次の瞬間、真つ黒の手が地面から沸きだしてミカゲの体をガツシリ掴んだ。

さらに口まで覆われてしまった、息ができない。

「ンッフ、そろそろ時間ですよ」

敵が告げたと同時に電波変換が解除されてしまった。

（そんな！？）

必死にもがくが全く動けない、しっかり掴まれたためぜんぜん動けない。

次第に薄れていく意識をつなぎ止めようと必死だがミカゲの体は徐々に動きが鈍くなってきた。

やがて完全に動かなくなり、意識を失い、ぐったりとうなだれるミカゲを睨み、敵は奇妙に笑いながらミカゲを連れ去った。

第51話 ファイナル その3（後書き）

感想まっています

第52話 ファイナル その4

スバルたちは走っていた。

次の指令は、ジェットコースターを止める。

残り5分、ここにきて最後の指令が出てきたのだ、謎があるしミカゲの無事なのかの確認したいがしかたない。

ジェットコースターが見えてきた。

そこには黒いマントで姿を隠し、マジシャンのハットをかぶる長身の男がたっていた。

スバルたちがそこにたどり着くとその男は奇妙な笑い声を周囲に響かせる。

「ソフフって、どー考えてもハイド、ファントムブラックしかいねーよ。なんでナイトメアに入っているんだ？」

「ウォーロックの質問の答えは簡単だ、私が志願したからだ。ソフフ」

「で、ワンパターン脚本家は何を書いてきたんだ？」

するとファントムクローで握られているミカゲの姿をスバルたちに見せる。

「今回はこの子が悲劇のヒロイン役だよ。そして、ジェットコー

スターのレールにこの子を置いて作動させれば・・・ンフフ」

「でもミカゲって男の子じゃねーの？」

「そこだよ、私もナイトメアのデータを見るまでそう思っていたがね、この黒フード、これを取ればわかる」

そう言っただけでハイドは気絶しているミカゲのフードを外した。

そこにはフードをかぶっても見えた目の辺りの前髪、そして肩をさぐるぐらいの後ろ髪に頭を中心付近からピヨンと飛び出した髪の毛が曲線を描いての風になびいていた。

「このとおり、女の子だよ。さあ、いまからショーを始めよう」

ハイドは近くのスイッチをグイッと押し込むとジェットコースターが作動した。

いまからミカゲの位置までは約一分、それまでにハイドを倒して停止スイッチを押すにしても場所がわからない。

「セツナ、どうす・・・セツナ？」

スバルが問いかけた先、セツナは呻くような声を出して眉間の辺りを手で抑えている。

「ぐっ・・・が・・・！」

「どうした!？」

スバルとアラタは慌ててセツナに近づく。

セツナの青い瞳が苦痛で揺らいている。

『・・・よ』

「なっ・・・ぐ・・・」

（何かが頭の中に訴えてきている？）

『なんで力を使わねえ？ その力なら今の状況なんてあつと言つ間だろ？』

「うる・・・さい・・・」

『今回は少しだけ替われよ、あんま暴れないからさ。 助けたいんだろ』

突然、セツナが二人を押し退けて立ち上がった。

手に握られたものは、ハンター。

セツナは眉間の辺りを掻きむしるような動きをすると、呟いた。

スバルの頭から偶発的に引き出された記憶。

『僕は電波変換、できないんだ』

セツナの体から怪物の頭骨の仮面が地面に落ちて、砕けた。

「電波変換・・・」

第52話 ファイナル その4（後書き）

感想まっています

第53話 ファイナル その5（前書き）

あーりゃ!？

なんとあんな長ったるいセミファイナルに比べてファイナルは今回
でおいまい・・・

第53話 ファイナル その5

セツナの体を漆黒の電波が包んでいく。

「俺様の目の前でそいつに手を出そうなんていい度胸持ってたなあ！ さあ、はじめようじゃねーか！」

漆黒の電波を手でなぎ払ってセツナの姿が現れた。

「黒いロックマン！？」

セツナの体はまさに黒いロックマン、全身黒に細部には白と灰色で塗られたような体は闇の化身のようで、水のように蒼く輝いていた瞳は血に染まったかのように紅く輝いていた。

ハイドはセツナの姿を見て驚きを露骨に出している。

無論、アラタもだがなにより驚いている張本人は、スバルだ。

セツナの変わった姿を、口調を、雰囲気をも、すべて別の人と入れ替わったかのような豹変っぷりを呆然としているしかできなかった。

「残り30秒だ、楽しませてくれよ！」

セツナが姿勢を低く保ち、ハイドめがけて走り込む。

「後悔するといい！ ファントムクロオー！」

声と同時にセツナの周辺から無数の手がわき出し、セツナに迫って

いく。

「後悔すんのは、テメエだあっ！」

セツナが、カプセルから具現化結晶のみにしか使わないはずの小さな宝刀を引き抜いた。

「なっ・・・！」

一瞬、その間に無数のファントムクローを消滅させてしまった。

セツナは絶句するスバル、アラタ、ハイドをあざ笑うかのような笑みを浮かべる。

「残り10秒、そろそろゲームセットにしてやろっじゃねーか！」

セツナの刀の宝石からまばゆい光が放たれると、バン！ と風船がはじけたような大きな爆発音と同時にセツナが消える。

「どっーーーー」

「ーーーーっっだ、っっ」

セツナは何十メートル先にいるハイドとそのすぐ近くで捕まってる

ミカゲの間で宝刀をお手玉のようにジャグリングしている。

「残り3秒、後悔するのは、テメエだったようだな」

セツナは宝刀を横になぎ払うように振ると風が吹き荒れ、ハイドの腹を切り、血が流れる。その風はジェットコースターを、レールを切り刻み、吹き飛ばされていく。

ファントムクローによる拘束が解かれたミカゲをお姫様だっこすると果然と立ち尽くすスバルとアラタの元に来る。

『俺はこれでおさらばするぜ、じゃあな、ご主人様』

するとセツナがミカゲを下ろした後、急に崩れ落ちた。

スバルとアラタはセツナに駆け寄ろうとするがウォーロックがセツナの前に現れる。

「おい、出てこいよ。 シャル兄」

「おやおや、ウォーロックにもバレましたか」

するとセツナのハンターから黒いウォーロックに近い姿のウィザー

ドが現れた。

「ウォーロック、この人は？」

「A M武神隊の隊長を勤めていたヤツだ、戦闘能力はA M三賢者と同格とか言われていたA M星の一部では英雄と言われるほどの戦士。そして俺の兄だ」

忌々しく、そして照れくさそうに説明するとニコニコと笑みを浮かべるシャルをもう一度見るとスバルはシャルがウォーロックの苦手なタイプだと一発で理解した。

「・・・シャル、出てきていたのか」

全員が声の方向に振り返るとセツナが背を向けて立っていた。

「みんな、このことは黙っていてくれないか・・・特にミカゲには、僕が心配をかけるわけにはいかないんだ。彼女にはこんな世界にいてほしくない、だから」

みんながうなづいたその時、タイムアップになった。

「みんな、グリードのところへいくぞ」

そのままドンドン進んでいくセツナの小さな背中が妙に大きく見えた。

その背中には、セツナの華奢な体では、抱えきれない何かが山積みになっているように感じた。

第53話 ファイナル その5（後書き）

感想待ってます

第54話 ファイナル終了（前書き）

これで第一章の終了です。

第54話 ファイナル終了

「……ん、っ……」

寝起きの悪いミカゲが自分から起きると自身と周辺の視線の変化に気づいた。

「な……なんでフードが取れてるの!？」

はずかしそうにフードを深くかぶるとスバルたちをキョロキョロと見回す。

「見ちゃった……よね……隠してたのに」

「なんで隠してたの？」

「いや……ちょっと、昔に友達の男の子が私のために戦ってくれたのに、助けるどころか何もできなくて……ナイトメアに誘拐された時にこれは自分を変えるチャンスだって思って。だって女の子だってわかったら、戦いでも手加減するし、いろいろ不便っていうか……」

そう言うつとさらに深くフードをかぶり直した。

「別によくねーか、そんなの？」

アラタが言った言葉にミカゲは小首を傾げて振り向いた。

「だってオレなんてみんなみたいな人間じゃなくてクローン。だ

けど普通の人と変わらないで普通に生活して遊んでる。 戦いだっ
たら女の子なんて気にさせねえぐらい強くなりやいいじゃん」

アラタはナイトメアで作られたクローンだと改めてスバルは再認識
する。

そこを含めてミカゲには細かいところを関係なしに日々を楽しんで
いる自分を伝えたいと思う、たぶん。

「クローン・・・だけどずいぶんお気楽っていうか、いいかげんっ
ていうか、だらけてるっていうか・・・」

「なんの嫌みだ！ そんな印象しかねーの？ まあいいや、よーす
るに、もっと自分自身に自信を持っていけてこと！」

難しそうな表情でビシッと言うとミカゲはおもしろそうに笑い始め
る。

「あははっ！ なんだかバカバカしくなってきたやうね！ うん、
もうこだわらない、このフードともさようなら」

そついうとミカゲはフードを取った。

ミカゲの髪の毛が風に揺られながら、セツナの向かった先を追いか
けた。

スバルたちは最初に起きた場所に行くともみんながやってきていたのだがファイナルの映像が見られなかったと呟いてはワーギャー騒いでいた。

「グリードを見なかったか？」

どこからか怪物の頭骨の仮面をかぶったセツナが部屋に戻ってきた。

「いや、見てない。 てかセツナ、その仮面・・・一体何体討伐したの？」

「僕は狩猟はしていない、これは作るんだ！ まあいい、とにかく搜索したいが・・・」

そう呟いた時、放送で声が響いた。

「アラタくん！ 今すぐみんなを連れて安全な場所に空間転移するんだ、早く！」

突然、グリードの声が響きわたった。

「はあ？」

みんながザワザワと騒ぐ中、自動ドアから捕まっていた仲間たちが出てきた。

「お、みんな解放されたっぽいじゃん！」

「何？ 駄目だ、今すぐ離れる！」

グリードの声が慌てたように響いているが仲間との再会の前にそんな声は耳をすり抜ける。

「みんな！」

セツナ、ミカゲ以外のみんなが近寄ろうと走り出す。

「・・・離れる！」

セツナの叫びと同時に、弾丸の発射音が部屋に響きわたった。

スバルたちが轟音に目を瞑った目を開くとセツナがあのにやりで使うような棒、キューで弾丸をはじき終わった後だった。

「チツ、洗脳されているな」

忌々しく呟くセツナにミカゲが駆け寄る。

すると四方からナイトメア隊員たちが1メートルぐらいのマシンガンを構えて侵入してきた。

「ナイトメア穏健派のグリードがこんなことをするはずがない、ヤツは遊びなどに巻き込んだヤツにはもとどりにするはもちろん、それなりに借りを返すヤツだ。おそらく上層部からリーダーの独断だろう」

こんな状況でも冷静に情報を整理していくセツナに呆れながらも冷や汗を垂らす。

「おそらく、目的はグリードの遊びを利用して、スバルたち全員の幽閉、あるいは殺害だろう」

「ふざけるなっ！ オレたちを殺そうっていうのか！」

怒りを爆発させたジャックが我を忘れて洗脳されたみんなの元に走り出した。

「委員長、キザマロ、ミソラちゃん、みんな、戻ってきてよ！」

「そうだよ、キラも、ゲイナーも、アクセルも、帰ってきてよ！」

続いてゴン太、ツカサも仲間に向かって走り始める。

「我々はナイトメア上層部の名の元に命令に従います」

「目標接近、迎撃を開始します」

5人が一斉に電波変換すると、己の心に身を任せて、叫んだ。

「『星の民の名において命ずる！ 力を解放せよ！』」

火が、水が、草が、雷が、彼らの攻撃が激突しそうになる。

「アラタ、今すぐあの3人を連れ戻して空間転移しろ！ 大爆発でこの周辺が吹き飛ぶぞ！」

みんながセツナの言葉にギョツとするなか、アラタはすでに行動に移していた。

「シャドウ、今すぐWAXAに座標をあわせろ！」

アラタは3人ごと空間移動しながら叫んだ。

「星の民の名において名ずる！ 力を解放せよ！」

スバルたちは仲間を残してその場から転移してしまった。

「任務失敗」

業務連絡のような言葉を残してその場から立ち去った。

夏休み終盤、こうして僕らの生活は激変していった。

第54話 ファイナル終了（後書き）

転移したスバル、アラタ、ゴン太、ジャック、ツカサ、クロウ、ラ
ンドと巻き込まれた（？）セツナとミカゲは無事に脱出。

残されたミソラ、ルナ、キザマロ、キラ、ゲイナー、アクセルはそ
のままナイトメアにいます。

第二章はこの関係をお忘れなく、でないと「あれ？ 委員長が敵に
なってる？」「オリキャラのヤツはあっちがこっちで・・・」とか
こんがらがると思います。

第二章は主に脱出組 + α が活躍、特にいままで出番なしのゴン太、
ツカサ、ジャックには大きな役が、捕まり組には出番が薄いかも。

そして作者としては第一期からずっと出したかったが十年後とかあ
って出番のなかったヤツも参戦！・・・になるといいな・・・

今後ともよろしく願います。

第55話 第二章 完全記憶能力者の秘密編（前書き）

まだ細かく設定してないけど勢いだけでなんとなくでもなるっ！
・・・
のかな？

第55話 第二章 完全記憶能力者の秘密編

スバルたちは転移後、仲間たちを探し回ったが、情報どころか手がかり一つも発見することはなかった。

WAXAでは夏休みの間ずっと、エクゼと熱斗の協力で科学力の向上、戦闘などのアドバイスなど毎日行っていたようだ。

セツナとミカゲはスバルの家の隣にある空き家に住むことになったのだが準備などしばらくスバルの家に泊まることになった。

結局、夏休みの間、まったく情報を入手できなかったまま、二学期が始まってしまった。

二学期が始まり、数日後になった。

「痛っ」

ご飯中、スバルは口元を抑えて、正確には口元のやや右側を抑えている。

大吾はそれを見るとピンと来たようだ。

「虫歯か？」

スバルはドキッと体を跳ね上がらせる。

「駄目だねえ、スバル。私みたいにしつかり歯磨きしないと！」

ミカゲはふっふっんと高笑いしつつ勝利の余韻に浸りながらコップを握り、グイッと飲んだ。

「んぎゃおおおおおおおおおおおえおッ！」

次の瞬間、ミカゲはコップを落とし、口元やや右側を抑えて床をのたうち回る。

そんなようすを見た食事中でも怪物の仮面付きセツナはその様子を見てピンときた。

「虫歯だな」

その言葉にミカゲは体をビクッと跳ね上がらせる。

「二人とも歯医者にいかないと駄目ね。明日、行ってきたさい」

茜がそういつとスバルとミカゲはガクガク震え始める。

「僕が直接ついて行ってやるから心配するな。逃がしはしないからな」

仮面越しに蒼い瞳が鈍くきらめく。

スバルとミカゲは右手で虫歯の近くを抑えることしかできなかった。

次の日、逃走を計ろうとしていたが仲良く二人とも寝坊、完全に逃げるタイミングを逃し、セツナに腹辺りを縄で縛られ、引きずられながらもウェーブステーションに向かっていった。

「ミカゲ、どうにか縄をとれない？ これさえなければ歯医者に行く前にウェーブロードを通って逃走できる」

「わかった、精霊石を使って・・・」

「うん、反乱だ！」

ミカゲは首飾りの力を借りて風の具現化結晶を使って縄を切断した。

「反乱だあ！」

スバルとミカゲはすぐさまハンターを握り、電波変換するとウエーブロードに駆け上がる。

「僕から逃げれると思っているのか」

そういったセツナが握りしめたのはハンター、開いたメニューにはメール。

第55話 第二章 完全記憶能力者の秘密編（後書き）

感想待ってます

第56話 セツナの簡単反乱制圧（前書き）

作者も虫歯・・・

作者も痛みでヒィヒィ騒いでました・・・ハイ

第56話 セツナの簡単反乱制圧

「どうにか逃げ切れたかな？」

「ふん、セツナは電波変換できないもん、いくらなんでもミカゲたちを追いつけるはずが・・・きゃっ！」

ミカゲが転んでそのままスバルを巻き込んだ。

直後、何かがスバルの頭をかすめた。

（嘘？　いくらなんでもあんな距離をこんなに早くなんて瞬間移動ぐらいしか・・・）

そこに思考がたどり着いたと同時に目の前に現れたのは、アラタ、ソニックスピードだ。

「僕から逃げようなど考えが浅はかだな」

そこからセツナがひょっこり現れる。

セツナは星の民の力で靴を電波融合させているのでウェーブロードでも立っていられる。

セツナならなんとかかなりそうって思っていたがアラタでは話が別物になった。電波変換はもちろん、特に星の民の力が移動関係なのがやっかいなのだ、あれだと地球の裏側だろうが地獄の底の底だろうが襲来してくる。

「さあ、予約の時間までまだまだ時間はたっぷりだ。これから遊んでもたっぷりなぐらいにな。これぐらい想定内だ、諦める」

「うるっさい！ キュイインでガリガリなところ行きたくない！」

「ふん、2対2か。おもしろいな」

セツナはキューを握るとジャグリングを始める。

ミカゲはチャクラムを人差し指でクルクル回している。

アラタはなぜか武器ではなく1ゼニー玉を親指でピンと飛ばしている。

スバルはバトルカードを握りしめる。

「バトルカード ワイドウェーブ！」

まずスバルがセツナとアラタの二人ごと直撃角度に移動して水の衝撃波を発射する、さらにその直後にプラスターのチャージを開始する。

二人は上に飛んで回避する。

そこをスバルのチャージショットがアラタに迫るがアラタは身を捻って避ける。

「かかった、バトルカードワイドウェーブ！」

空中で身動きがほとんどできない状況で広範囲の攻撃がせまる。

「やるじゃん！ でも・・・」

アラタは1ゼニー玉を親指でワイドウェーブに発射した。

それがワイドウェーブを貫いてスバルに迫る。

スバルは慌てて回避するがどうなっているのか理解できていない。

「スバル、等速直線運動つてしってるか？ まあ簡単に言えば”動いてからずっと同じ速さで移動をし続ける”っていうことだ。これと同じ、オレの能力の力を解除しないと永遠に一直線に移動をし続けるんだ、たとえば岩だろうが鉄だろうが能力の発動中は突き破つてでも移動を続けようとするぜ！」

「1ゼニーを代償に鉄をも砕くね・・・ずいぶん安い破壊作業だね」

半分呆れ気味にアラタを見る。

本人はずいぶんとニヤニヤとした顔で勝ち誇る。

ミカゲの方はかなり押されている、セツナはキューだけでミカゲの攻撃をなんとかしている。

このままではミカゲが保たない、だがこちらは手一杯。

「別に金じゃなくてもいいんだぜッ！」

こんどは小石が無数に投げられた。

「一個限定なんて言った記憶はないぜ！」

投げられた小石が一定の速度で重力に逆らいつつ直進してくる。

「第三電波変換 星河スバル オンエア！ スターダストモード！」

風の力がロックマンに宿り、突風が巻き上がる。

「いくらなんでも小石が突風でまったく揺らがないなんてありえない！」

スバルの考えは正しく、多少は抵抗があったが風で吹き飛ばされていた。

「ぐうつ・・・」

ミカゲの悲鳴に振り返るとミカゲの電波変換が解除されてセツナが彼女の体を受け止めていた。

今度は貴様だと言わんばかりにスバルを蒼く輝く瞳が睨みつける。

『オイ、なんだかおもしろそうなことやってんじゃねーか！ 電波変換はしないから遊ばせろよ』

（しかたない、そのぶんさっさと片づけろよ、僕は遊びすぎたから時間が少ない）

『ああ、わかった。 アイツ、強いだろ。 楽しめそうだしな』

次の瞬間、クールな雰囲気が好戦的に変化し、同時に瞳が血に染まったような紅に変化した。

「スバルっ！ おまえの實力、見せて見るよッ！」

人間離れした動きで素早くスバルに迫っていくとキューで攻撃を開始する。

スバルは氷で剣を生成してキューを受け止める。

「へへっ、やるじゃねーか！」

「チェックメイトだ」

後ろからアラタがスバルの後頭部を叩き気絶させる。

ミカゲを引き連れてセツナの雰囲気が元に戻る。

「時間がまずいな、後で何かおごるからスピカモール歯科に移してくれ」

「りょーかい、シャドウは座標をあわせて」

その後、スバルとミカゲの絶叫がスピカモールに響きわたったのは言うまでもない。

第56話 セツナの簡単反乱制圧（後書き）

感想まっています

第57話 生意気なルーキー

虫歯をすっかり治して、同時にトラウマをすっかり心に刻んだスバルは今回は個人修行になっていた。

あれからクロウとランドはアメロッパで修行している。

エクゼと熱斗はどこかでゴン太、ツカサ、ジャックの3人との修行、WAXAではトレーニングルームでスバルとミカゲは個人的な修行、セツナと暁は暁が、生意気なルーキーの実力を見たいって対戦するらしい、アラタはサボリ。

で、スバルはミカゲとこの二人の対戦を見ることにした。

「いいのか？ 電波変換無しなのに本気でって？」

「他人の心配より自分を心配しろ。 勝った場合は約束どおり午後はオフなど認めてもらう」

自信満々にキューをジャグリングしていると暁が電波変換、アシッドエースになる。

「いくぜ、ロックオンソード！」

暁は一瞬で間合いを無くして切りかかるがセツナはあっさり受け止めるとすくい上げるようにキューを振り、そのまま空中に投げ飛ばした。

今度はトンファーを取り出すと距離を取っていた暁に一撃を叩き込

むがソードでうまく衝撃を殺して受け止めた。

「おまえ、本当に小学一年生か？」

「おしゃべりしている隙を無くして次の一手に出ろ。僕は――」

直後、投げたキューが空から暁の頭にピンポイントで直打した。

「生優しくはないぞ」

よろめいた隙に胸元に体を1回転したセツナの遠心力付きのトンフアーが鈍い音を立てた。

「その程度なら拍子抜けだな」

「んなわけあるか！ 星の民の名において命ずる！ 力を解放せよ！」

暁がそう叫んだがアラタみたいな具体的な変化は起きない。

だが、暁の周囲がおかしくなっていく。

これは、ノイズだ。

「これが俺の能力、これなら全力をだせる！」

「やってみろ」

「ファイナライズ！ ブラックエース！」

暁をノイズが包んで、はじけとんだ。

そこには真っ黒なアシッドエースが攻撃の予備動作を終えた体制になっていた。

『変われ、決着をつける。 別にかまわねえだろ』

「ウイングブレード！」

暁の声と同時に、セツナの雰囲気ガラリと変化した。

「俺の勝ちだ！ 勝負に急ぎすぎだ！」

セツナは腰についた宝刀を握ると光を放ち、風が吹く。

次の瞬間、暁の動きがピタッと止まる。

いや止められた、セツナによって。

「死霊の手。 俺がナイトメアでネクロマンサーって言われる理由だ」

暁の体が風の手がガッチリ押さえ込んでいる。

「この新人は化け物かっての！」

「約束はまもってもらおう」

いつもの雰囲気に戻ったセツナがトレーニングルームを堂々と後にした。

第57話 生意気なルーキー（後書き）

暁は一応手加減ありますがセツナは・・・

てな訳で暁はファイナライズを完全に制御できるようになりました。

能力は簡単に言えば”ノイズを自由自在に操る、制御する力”って
ところです。

感想待ってます

第58話 ミカゲのバースデイ その1

セツナの朝は早い。

とは言ってもさすがに眠たそうに目を擦る少年は子猫の仕草のように可愛らしく、だが仮面のインパクトは怖い。

ただいま午前五時でありこの時間帯におそらく起きている小学一年生は彼一人であるだろう。

昨日からはスバルの家の隣の家でもう一人のヤツと住むことになった。

ベッドでいつまでもゴロゴロ転がっていたセツナだが、ふと動きをピタッと止まる。

となりのベッド、そこでゴロゴロと爆睡している少女を見る。

それなりの間隔、近距離で、セツナと違ってぐっすり眠っている、肩を過ぎそうな黄色い髪は少し汗が吸い付いて黄緑のぶかぶかしたパジャマから小さな手がでてダランとしている、このただいま大爆睡のミカゲを見る。

いつもどうりバカみたいに幸せそうな少女を見てまずため息を吐く。

セツナはナイトメアでのミッション時は必ず命に関わるので仮眠と早起きは身につけているが特にミカゲを仲間としてからはそうだ。

元々、セツナは血と闇がまみれ、命を奪い合うような闇の世界の住

人なのだ。

そんな世界に入ってきたミカゲをセツナはなぜだか見捨てられなかった。

彼女にはこの世界は似合わない、駄目だと直感が伝えてきた。

そして彼女は少年に頼んだ。

ここから出たいって。

そして、現にここでグースカと寝ている。

やはり彼女には普通、一般的な生活が似合っている。

僕はもうこの少女に血や闇に関わらせたくはない。

彼女の性格からして事件が起こればそこに突っ込み、自分で抱え始め、また、闇を見たらまた自分で抱え込んで、苦しんでいく。

もう、この少女にはもう血と闇にまみれた世界に引きずり戻されてほしくない。

いつからこんなに過保護になったのかわからないが、とりあえず今はこの幸せ少女の楽しみのために動いてやろう。

9月、ミカゲの誕生日のある。

第58話 ミカゲのバースデイ その1（後書き）

感想待ってます

第59話 新人たちは

数日後にミカゲの誕生日がある。

大人っぽい人を目指しているらしく平然な態度でいるが生活とかで少しハイテンションになっているし、こういうのはあいつはやたら気にするし。

前回に暈を倒して褒美^{ほうび}の休みを貰ったからたぶん大丈夫だろう、具体的なことはあまり話してない。

セツナはミカゲの分の朝ご飯、適当なサンドイッチを作って自分も一つ口に詰め込み家を出た。

「ありゃ？ セツナは？」

セツナが起こさないからもちろん寝坊したミカゲは訓練施設をグルグル回ったがセツナがいないことに気づいた。

スバルに聞いても知らないって言うし、ゴン太たちはいないし、おまけに電話しても返答無し、メールもシカト。

ムツとしていたところに一つの記憶が頭をよぎった。

『約束どおり午後はオフなど認めてもらっ』

オフ、など？

ミカゲは約束を受けた本人、暁の元に行く。

「どうした？」

「ねえ、セツナと何を約束したの？」

「い、いや。別になにも」

少し後ろに下がり、顔をそらしたその動き、何かを隠している。

「何か隠してるよねえ」

ちょっとイヤらしく言ってみたがセツナはかなり釘を深く打ったようだ、注意深く秘密にしろって言ったっばい。

だが、甘い。

「ヒック・・・グズツ・・・どう・・・う・・・しても？」

ミカゲは涙腺を自在に操る技術はないが泣いたふりは目薬があればできる。

「な、泣くなって」

弱ったような表情でオロオロしている様子、かかった！

「ダメ・・・かな？」

頬をやや赤くして涙（嘘）を右手で拭うフリをして言う。

「・・・それでも・・・んまい棒やるから泣きやめ！」

（ダメなの・・・私の笑顔はそんな安いのか！）

ムツとしてもうこうなったら切り札を使うことにした。

（えっと・・・今日、スピカモールに行かせてもらう。内容は秘密だが、また頼みがあるからそのうちメールをやるから頼む。それとくれぐれも言うな、誰にもだ。特にミカゲには絶対だ、って言うっても心はおしゃべりだよ♪ セツナ残念でした♪）

「ねえ暁さん、勝負して。 勝ったら言うことを聞いてね」

「勝てたらな」

自信満々だ、けど負ける気はさらさらない。

ミカゲと暁は電波変換してトレーニングルームにサイバーインする。

そこには殺風景で小石一つない、ただアスファルトのような地面が無限に広がるのみだ。

（なんだかセツナはおもしろいことに首を突っ込んだみたいだね。

ふっふーん、あばいてやる)

ミカゲはチャクラムを取り出し、ウィンドエンシェントに変化する。
ミカゲの基本は中から遠距離の攻撃が主体だ。

両手のチャクラムを睨めがけて投げる。

曲線を描いて飛んでいくそのチャクラムの軌道を読んで暁は左に避けた。

「コガーーー」

言い終える前に暁の体をチャクラムが切り裂いた。

「なんだ・・・この動きは？」

チャクラムは投げた後にブーメランのように戻ってくるものだがいつまで経っても暁の周りで旋回を続けている。

「どうする？ 降参する？」

「なめんな！ ロックオンソード！」

暁はチャクラムのすぐ近くに一瞬で移動すると剣を振りおろした。

だが、空を裂いただけ、チャクラムは不規則な動きをして上に昇るような移動をする。

「どう？ 風での2個同時遠隔操作は？」

「ああ、たしかにすごいが、集中が乱れたり精神が不安定になると、できないんじゃないか？」

ドキリと、心臓が跳ねたと同時に演算に割いた集中力がそがれて風が不安定になる。

その一瞬の合間を突いた暁はミカゲの目の前で剣を振り上げる。

「ロックオンソード！」

「くっ、スタイルチェンジ！ ライトエンシェント！」

ミカゲの色が白に変化したと同時に剣が彼女の肩を捕らえた。

とっさに右肩を後ろにして致命傷を外させたが戦いに支障が現れる。

ミカゲは肩をかばいながら距離をとる。

「ちょっと酷いよ・・・痛い」

眩くようにして暁を睨むと落ちているチャクラムを拾い上げ、再び投げつけた。

「もう風で操作させるか！」

ソードでチャクラムに向けて振り下ろした。

はずだった。

平べったい円形のはずのチャクラムがあり得ないことに折れ曲がったような形になって暁の肩を切り裂いていったからだ。

ミカゲはその間に距離を積んでいた。

暁の腹に向かって回し蹴りが迫っていた。

（なんだ、この違和感は？）

暁はその正体を探るためにソードで受け止めようとするために正面に持ってくる。

だがそれも無駄になった。

今度はミカゲの足が骨折したかのようなありえない方向に曲がったからだ。

ゴキッ！ と、鈍い音が響き、よろめいた隙をミカゲが首もとにチャクラムを近づけた。

「勝ちでいい？」

「本当にルーキーたちは化け物かよ・・・」

落胆する暁。

（とは言っても、まだ切り札が残ってるよね）

とりあえずミカゲはスピカモールを目指した。

第59話 新人たちは（後書き）

感想まっています

第60話 狂気の復讐（前書き）

これから3月途中まで投稿速度が急激に下がると思われます。

第60話 狂気の復讐

ランドはクロウと一緒に二ホンを目指してコスモウェーブを走っていた。

セツナが協力してもらいたいことがあると頼んできたので不思議に思いながらも向かっていた。

もうすぐでコダマタウンにつく。

「ちよつととまってくれねーか？」

急に青年のような声が聞こえ、二人はその場に立ち止まって周囲を確認すると二人の男、小学六年生ぐらいの背の男が近づいてきた。

「こんな子を見なかったか？」

一枚の写真差し出してきたので見る、そこには蒼く鋭い眼差しと銀髪が肩を過ぎるぐらいの小さな少年が写っていた。

「わからない、すまねえ」

ランドは申し訳なさそうに頭を下げる。

「では次です、ターゲットナンバー001、通称、ミカゲ。ターゲットナンバー002、通称、響ミソラ。この二人を知りませんか？」

最初のチャラチャラしたヤツではなくもう一人は礼儀正しそうに言

つてきたが言っている内容はずいぶん生々しく聞こえてくる。

まるで、ブラックリストのような聞こえた。

（なんだ？ ナイトメアではないが組織のような・・・）

「・・・答える義理はねえ」

重々しい口調で告げるとヤツらはため息を吐いてダルそうにつくと、
雰囲気が変化した。

「私たちにもやらなければなりませんからねー。 時間は無いので
大人げなくいきますよ？」

ミカゲはスピカモールに着いたものの知識不足が災いしてオロオロ
しているしかできなかった。

世間知らずなためにウェーブステーションの乗り方もセツナの動き
を覚えて半信半疑でやった結果、到着までにかなり時間がかかって
しまった。

とりあえず前回来た歯医者に行ったが当然いる筈もなく、そのうち

洋服屋で目を輝かせている始末。

そしてショッピングを満喫していた、だが。

とあるお店である人物を見つけた、いや、見つけられてしまったので状況が一変した。

ミカゲは心の中でしつこい、と呟いた。

セツナは不思議そうな視線を、性格には彼の怪物の仮面を不思議そうに見られるのが嫌なので代わりのかぶり物を作るために、そして映画を経験したいので映画館の角で座り、ポップコーンと裁縫道具さいほうと糸をイスの前に置いていじっていた。

そして作り終わったのは黒の底有りネックウオーマー。

一般生活の間はこれをつけていくしかないが、こだわりがあるので戦いとかは仮面にしたい。

一応仮面は愛着がある。コイツとは記憶を失ってから、ナイトメアに来た時、すべてを忘れたあの時、グリードが僕を闇に引きずり込んだあの時、すべてを仮面に隠すと誓った。だからこの仮面だ

けはずっと持っている。

素材だって通販で高級な紙粘土を購入して、自分で作っている。
この前のファイナルでは割ってしまったことは少しもったいなかったと反省している。

そして偶然入った映画の選択にも反省、いや、後悔している。

ただ今上映中なのはゴーストクライシス3。つまりセツナの苦手分野に突撃してしまったのだ。

自ら地雷に突っ込んだその上、裁縫に集中しすぎて映画の進行速度についていけなくなってしまうってポップコーンを味わうことしかできなくなってしまった。

その気になればここから出られるが迷惑になるだろうからボーッと恐怖に苛まれる（さいなまれる）しかない。

セツナがあくびをした。その時だった。

唐突に電波ウイルス、しかもなぜか幽霊のような形状のヤツが出現した。

（なにかのトラブルか？ 事件なのか？）

セツナはポケットからキューを取り出すと電波融合させて攻撃可能にする。

ウイルスたちに踊りかかるように素早くデリートする。

「ンフフ、やはりすばらしく強い。私の復讐の相手にはロックマンと同格だ」

後ろから聞き覚えのある、しかも最近の声だ。

そこにはファントムブラック、ハープノート、ペディアブレイン、モールラビットが立っていた。

「・・・何のようだ」

「何って、もちろん復讐ですよ。この洗脳された戦士を連れてね」
嫌らしく笑うと狂気に満ちた瞳で睨んできた。

「もう何もかも知ったことかッ！ 貴様とロックマンを殺してやる・
・許さん、私を苔にしゃがって！」

「何人だろうと関係ない、僕に勝てはしない」

不敵に笑みを見せつけながら背後でスバルにメールを送信する。

「はたしてそうなのか？」

マントを翻す（ひるがえす）と気絶したミカゲがグッタリとしていた。

「こいつがどうなっても、か？」

ハイドはステッキソードをミカゲの首元に近づけて、ほんの少しだけ切る。

血がタラリと首筋を伝っていく。

セツナの瞳が大きく見開かれる。

（やらせるか・・・やらせるものか！）

『そうだ、怒りに身を任せろ！ 殺せ、ヤツらをぶっ殺せッ！』

セツナの左手が自然と眉間の辺りを掻きむしるように動いた。

瞳の色が真紅に変化する。

雰囲気上好戦的に変化する。

「スクラップになる時間だぜ！ クッソ野郎がああああ！」

次の瞬間、仮面が地面に落ちて、割れた。

電波変換したからだ。

第60話 狂気の復讐（後書き）

感想待ってます

第61話 限りなく絶望に近い運命（前書き）

今日はもうちょい投稿したい！

「どこからそんな言葉が出るのかなあ？　オラ！　言ってみろよ！」

拳がハイドの腹、顔、肩、足、腕、様々な場所に入っただけでは痛々しい音を出しながら悲鳴が響いていく。

「そろそろトドメだ」

セツナは宝刀を高く上げると勢いよく振り下ろされる。

「やめて！」

唐突に、声が映画館に響いた。

セツナは動きを止める。　雰囲気や瞳などが元に戻っていく。

振り返るとミカゲが目を覚ましていて、驚きを隠せずセツナを見ていた。

セツナの電波変換が解除されていく。

「セツナ・・・だよね」

「ああ」

その言葉にさらに驚愕したような様子でミカゲは迫ってきた。

「なんで・・・電波変換ができるの？ セツナは電波変換ができないっていったじゃん！・・・嘘、ついていたの」

ミカゲは無言で睨みつけてきた。 セツナは蛇に睨まれたネズミのように萎縮するしかなかった。 その沈黙はセツナの胸を押しつぶしてしまいそうだった。

「・・・私、信頼されてなかったんだ。 そうだよね、足を引っ張りっぱなし、役にたたないもの」

「ちがつーー」

言い終わる前にミカゲは走り出し、映画館を飛び出していた。

「ミカゲ！」

突き出したその右手は空しく風を掴んで、それすら手からすり抜けていった。

「シャル、僕は・・・」

その声に答えるようにハンターからシャルが出てきた。

「坊ちゃんにも彼女にも心の支えがあるんですよ。 彼女の支えは

皮肉にも坊ちゃん、あなた自身だったのですよ。理由は言えなくても謝りましょうね、彼女は優しいから許してくれますよ。きっと」

「ミソラちゃん！ 委員長！ キザマロ！」

スバルは洗脳された3人に追いつくと立ちはだかった。

ミソラはほかの二人を先に行かせるとギターを持ち直す。

「先に言うておくよ。私はほかの人たちとは違って洗脳されていないよ」

「えっ？」

スバルは目を大きく見開いてミソラを見つめる。

「なら、なぜ！　なぜナイトメアにいるんだ！？」

「私の道だから、たとえスバルくんにも何と言われても、失いたくないものがあるのだから」

その言葉に何を隠しているのかは分からないが、その姿は悲しそうに見えた。

「教えてあげる、洗脳された人たちの首の後ろを見てみれば、みんなを救うヒントがあるかもね」

「どうしてそんなことを？」

「・・・たとえ君の圧倒的な力をもってしても抗えない（あらがえない）・・・君も私も同じ」

ミソラはスバルを見ていられなくなったように背を向ける。

「限りなく絶望に近い運命を背負っているということだから」

「どづいつことっ」

ミソラは無言でその場を立ち去っていった。

第61話 限りなく絶望に近い運命（後書き）

感想待ってます

第62話 保護志願者

――ニホン内への侵入に成功。

――精鋭兵は目標搜索を開始、途中、戦闘が発生するが勝利、搜索を続行。

――周辺に電波体による戦闘らしき熱源を感知、確認のため移動を開始。

――巨大建築物、名称スピカモール周辺の搜索に移行。

――戦闘行為者の数名が戦線離脱を確認。

――精鋭兵は移動者数名を追跡。

――レーダーに確認された物体を補足に成功、確認者は次の3名。

――該当者名、星河スバル。 響ミソラ。 光ミカゲ。

――内、ターゲットを二名とも確認に成功。

――作戦を第二段階に移行と同時にターゲットに接近、作戦に従って行動を開始。

「やっぱりそうか」名前を聞いた時にピンときたのよね、よかったよかった」

深紅の髪を揺らしながら笑みを浮かべていた。

「嘘でしょ・・・」

絶句するミソラをやれやれと首を振り、一枚の写真を渡した。

そこには小さなピンク色の髪の女の子、胸を大きく反らしている赤髪の小さな男の子に父母が笑顔で映っていた。

わすれるはずがない。

ここにあるのは、ミソラの母の姿だ。

そして隣にいるのはたぶん父。

「じゃあ・・・本当に君は・・・」

「どうしてもおまえにはこの世界にいてもらっちゃー困るんだよね、俺はおまえを保護しないとイケない。　たとえば、抵抗されてもな」

「それでも私には私の道がある。　絶対に、譲れない」

二人を取り巻く雰囲気がどんどんピリピリとした緊張感に変化していく。

ウェーブステーションでコダマタウンを目指して乗ったミカゲは乗り物の内部でたった二人だけの場内に違和感を感じていた。本来ならもつといるはずなのに。

「光ミカゲ、ですよね」

いきなり呼び捨てにされたが気にしない。涙を拭い、声をかけたもう一人の乗客者に応答する。

「そうだけど・・・何？」

「大切な用件がありまして、あなたを保護したいのですが・・・」

ミカゲは不自然な言葉を顔を上げる。

そこにいたのは眼鏡を装着して、茶髪の髪の毛を七三分けした、黒コートで身を隠している、スバルと同じぐらいの身長の方がいた。

「保護ってどういうこと？」

「この世界にあなたがいてもらっては困るのでしばらく保護させてもらいたいのです」

ずいぶんおかしいことだが何を考えているのかわからなかった。不敵な笑みを浮かべるその男は眼鏡をクイツとあげると、どうします？ と問いかけてきた。

無論、答えは決まっている。

「おことわり、バカらしいこと言わないでよ」

怒り気味に言うミカゲ、ふつうにからかわれたのだと思っていたが男は微動も動かないでいた。

「では、力ずくでも、と言った場合は？」

「力ずくでも、突破する」

その言葉に感応したかのように、直後、男から爆発的に殺気が溢れだした。

「後悔しても知りませんよ？」

第62話 保護志願者（後書き）

感想まっています

第63話 神の手を持つ者と音素を操りし者（前書き）

ながッ！

文ながッ！

第63話 神の手を持つ者と音素を操りし者

ミカゲは電波変換、ライトエンシェントに変身する。

敵も光を放ち、電波変換をする。

そこには茶色に黒で粹取りされたマント、学ランのような服装だが色は灰色が主体でボタンは無く、そのまま開きっぱなしのままのようになっており、藍色の腕はロックマンのような重装甲に見える、顔は後頭部辺りはハリネズミのようなチクチクと立った髪の毛が防具から飛び出していて、なぜだか眼鏡はついたままだ。

「私は戦闘スタイルや戦いの様子からこう呼ばれてます。 “神の手を持つもの”と」

敵は地面をグツと踏みつけ、勢いよく走り出した。

右手を前に突き出すとそこに木でできている両刃槍が現れ、それを射程範囲ギリギリからミカゲに向けてフルスイングしてきた。

ミカゲはほんの少しバックステップをして回避する。

「おや、なにやら不思議なことをするらしいですね。まるでそこにいないような感覚ですが、これはどうですかね！」

両刃槍を左手に持ち替えると右手を首に一直線に向かわせるように手を突き出すとその手からまばゆい光が溢れだした。

その直後、人間一人を軽く握りつぶせるぐらいの巨大な手が現れた。

水の具現化結晶だ。

無論、小さな乗り物の中で回避できるスペースはない。

「バトルカード、プラズマガン！」

電撃が水の手を走り、電気分解していく、だが、すべてを分解しきれない。

わずかに残った水の手の手がミカゲを押し倒すように突っ込んだ。

「ぐうつ」

水の勢いにミカゲは成す術もなく、壁まで叩きつけられた。

さらに敵は左手の両刃槍で横薙ぎにミカゲの腹辺りを切り払おうと振り回した。

後ろは無い、彼女の命を守ろうとする本能がとっさに前に飛び出し、刃ではなく、棒が直撃することによってか命を一時的に守りきった。

だが、肋骨は数本もっていかれただろう。顔をしかめて痛みに耐えるが戦いには悪影響しかでない。

血の塊を口から吐き出し、よろめきながらも立ち上がる。

「さすがに心が痛みますねえ、そろそろ戦いを納めましょうか」

両刃槍が振りおろされる。

ミカゲは意地で肘を使って手の軌道をそらし、小さな拳で槍を握る手をはじいた。

「がつ、はあはあ・・・」

「やはりなかなかやりますね。 仮説としてあなたは精霊石の力で属性を変化、または使用してますね。 あなたは今、光属性の力を使った具現化結晶で“ 本人の位置とは別の位置に光の焦点を結ばせて本人との距離感や方向感覚を狂わせる ” 技ですよ」

その言葉にミカゲの心臓が飛び出しそうになった。

対戦戦でも使用したこの技には自信があった。 この技はセツナが教えてくれたので信頼感があり、実際によく使っているがほんの少しだけでほぼすべてを見切られてしまった。

勝てない。

そう思考がたどり着いた時には敵はすでに行動にでていた。

槍が自身に投げられ、同時に敵も迫っていた。

紙一重で槍を回避したが握られた左の拳を回避できない。

なんとか両手で受け止める。

「今、触れましたね」

直後、受け止めた両手がダランと力無く垂れ下がった。

まるでゾンビのようにブランと垂れた手に力を込めようとするがまったく入らないどころは指一本動かすことすら叶わなかった。もちろん、腕を動かすことなんて出来ない。

まるで、筋肉が機能しなくなったように。

（手が・・・まったく動かない！？）

ミカゲがこれが紙の手をもつ者と呼ばれる所以に気づくには、遅すぎた。

ミソラと敵が電波変換を解除していく。

正確にはミソラは解除されるほどのダメージを受けてしまった。

糸が切れた操り人形のように無惨に地面にはいつくばり、呻くことしか出来ない。

敵はミソラに近づいた、その直後に大きく後ろに下がった。

なぜならセツナがキューを握りしめて二人を隔てるように現れたからだ。

「うつひゃあ、援軍なんて聞いてないでしょが！」

セツナは仮面に顔を隠して、その奥から猛獣のような鋭く、蒼い瞳が覗いているので、余計に恐怖心を駆り立てそうだ。

だが相手はおもしろそうにニヤニヤとセツナを見ながら笑いたてていた。

「うるさいヤツだな、黙っていることができないのか？」

「俺様マジで傷つくんだけど、こんなちっちゃい男の子に説教なんて」

そう言つて、でひゃひゃひゃとうるさい笑い声をまき散らすと雰囲気気がピンと張りつめたように変化する。

戦闘開始を感じ取ったハープが倒れるミソラのハンターから飛び出してきた。

「気をつけなさい！ そいつはA M武神隊に入っていたヤツ、ついでに私の兄よ！ そいつは音素を完璧に操るわ！」

「貴様の兄なんてどうでもいい、叩きのめすまでだ」

セツナが敵に振り返ると敵が電波変換した。

そこには赤が主体でほとんどハープノートそのものようだ、だがハートはなくなり、代わりに星がついている。ハープの兄と言うのも嘘ではなさそうだ。

敵はギターを抱えるように持つと弦をはじいた。

「ショックノート！」

赤と紫の音符が文字どおり音速で迫ってきた。

赤の音符を左に飛び出して避ける。

音符の着弾した場所には1メートルほどのクレーターが出来上がっていた。おそらく生身の状態では一撃必殺だろう、当たれば。

続いてきた紫の音符は確実に避けて接近戦に持ち込むため、回り込むように走り出した。

（紫のほうの威力が低い？）

紫音符の着弾地点を見るとクレーターどころかスコップ1すくいにも満たない跡が。

「ほらほらあ！」

無数の赤と紫の音符がセツナめがけて迫りくる。

セツナは冷静に音速に反応可能な距離のギリギリを維持しつつ、様子を伺う。違和感の正体を確かめるため。

赤と紫では、威力に大きく違いがあるのだ。

赤ではクレーターが出来るほどの一撃必殺なのに紫はクレーターどころか地面の砂を吹き飛ばすのが精一杯なほど貧弱な威力なのだ。これがハープの言う、“音素”の力だと思う。

試しに紫音符をキューで野球でボールを打ち返すような感覚でフルスイングすると泡のようにあっさり消えてなくなつた。

「遊びは終わりだ」

キューをしつかり持ち直し、地面を這うように身を屈めて敵に迫る。

まっすぐに二つの音符を見極め、そして敵をとらえる。

「しつこいしつこい！ 女の子に嫌われちゃうぜえ！」

赤と紫の音符が一直線につつこんできた。

「・・・もう嫌われてるよ」

紫の音符を叩き潰し、赤の音符を回避すると悲しみを乗せて、そのまま敵の胸元にキューを振り下ろした。

「うひゝ、強烈！ 俺様砕けちゃう！ なゝんて」

敵は回避するどころか足をピクリとも動かさない。　かわりに手が弦をはじいた。

「かつこわりーことになるかよ！」

ギターから低い音を出して青い音符が敵を守るように立ちはだかる。まるで壁、もしくは盾のように。

青い音符とキューが音を立て、火花を散らしながら、ぶつかり合った。

（一撃必殺でも、軟弱なものでもない・・・なんだ、この耐久性と硬度の高さは？　まるで鋼鉄のような堅いものを叩いているような感覚が・・・）

二つがぶつかり合っているその隙に敵が後ろに周り込んでギターをセツナのわき腹の下に向かっておもいきりフルスイングした。

セツナは上に飛んで避けるしかない、そのまま空中で体制を整えようとする。

「かかった！　電波人間ではないヤツが空中で動けるか！」

（しまっー）

気づいた時には遅かった、高い音と低い音が響き、紫と赤の音素が右肩を直撃した。

まるで爆発したかと疑うほどの音が響き渡り、セツナが地面に叩き

つけられる。

右肩から滝のように血が流れ、腕を伝って地面を濁していく。

「わかった、音素の秘密がな。 音符の色が鍵だ。 赤はドの音で効果はおそらく殺傷力の増加。 青はレの音で防御力の増加。 紫はソの音で体への異常発生だ」

「なんで、音の音程や紫の正体までわかった？」

「僕には絶対音感がある、あれだけ音符を出していれば普通にわかる。 紫は体で確かめた、頭痛と視界が揺らぐ」

額を抑えるようにして立ち上がる。

「九割は正解だ」

その時、突然、黒のコートに眼鏡をかけた男が現れ、セツナの腹に何かを突き刺した。

「紫には人間の五感を狂わせたり、電波体なら毒みたいなヤツも出来ちゃうんだよなあ」

その言葉が、セツナに届いたのかはわからない。

セツナの腹からスタンガンが徐々に離れていく。

「あッ、がつ・・・う・・・」

華奢な体に力を込め、意識を繋いでキューを松葉杖のようにして必

死に体を支えるが無情にも体は言うことを聞かないで崩れていく。

倒れる中、確かに見えたのは、ぐったりとして横たわるミカゲの姿があった。

「でも頭痛効果は発動しなかったんだけどな」

「そんなことしないでターゲット回収して帰りますよ、やれやれ・
・私は少し力を使ったので疲れました、早く寝たいですから」

そう言うのと倒れたセツナを置き去りにしてその場を去っていく。

（ま・・・て、ミカ・・・ゲ、は・・・絶対に、守っ・・・）

セツナの意識が闇に埋もれていった。

第63話 神の手を持つ者と音素を操りし者（後書き）

感想まっす

第64話 救出準備完了（前書き）

セツナが・・・負けた？

いや、そんなはずは・・・

とにかくどうぞ！

第64話 救出準備完了

「っ……ここは？」

セツナが目を覚まして辺りを見渡すとスバル、ゴン太、ジャック、ツカサが心配そうに見ていた。

体を起こそうとした瞬間、電撃のような痛みが全身を駆け巡った。自分を体を見ると包帯がグルグルと巻かれ、血がにじんでいた。

ここは、WAXAの救護室だ。

「僕は……！」

刹那、すべてを正確に思い出した。

セツナの持つ完全記憶能力は常時発動しているため、攻撃、動き、痛み、音素の効果、速度、ダメージ量、何から何まですべてがテレビの映像のように脳から流れてくる、最後に見た、ミカゲのぐったりとうなだれた姿や保護と言う謎の敵共。

（ヤツらはミカゲやミソラを保護するとかほざいていた、どう考えても有能な実力者としてならスバルやアラタを誘拐するはず……なんだ、何が目的でアイツをあんな実力者が？）

そこから考えられる能力は一つだけ。
星の民の能力だ。

とにかくミカゲを救出しなければ彼女の身が危険だ。

たとえこの前の戦いに敗北したとしても、勝ち目が薄いのはわかっていても、引き下がるわけにはいかないんだ。

「セツナ、どうしたの？ 君がそんなボロボロになるなんて・・・」

「ミソラが謎のヤツらに襲撃されているところを見たから救出しに戦ったがスタンガンで不意打ちされた」

「ミソラちゃんが!？」

スバルが驚く、仲間の危機なのだから当然の反応なのだが。

「ウォーロック、いくよ」

ウォーロックはうなずき、部屋を飛び出した。

「場所はわかつているのか？」

セツナのその言葉はスバルとウォーロックを後ろ歩きで戻させ、部屋に縫い止めた。

「そんなこと言うからには何か策はあるのかよ？」

ジャックが困りぎみに問いかけるがセツナは表情一つ変えないで「ある」と自信満々に宣言した。

「ミカゲの首飾りの精霊石からでている特殊な電波を使った発信機で場所を確認できる。これで僕は行くぞ、おまえらはどうする?」

「僕らは言つまでもないよね」

「俺はいくぜ！」

高らかに名乗りをあげたのは、ゴン太だ。

「いいよな、エクゼ。修行の成果を見せてやりたいんだ！」

声に答えるためにエクゼが現れ、「いいよ」と笑顔を見せてくれた。

「スバルくん、先に宣言しておくよ。いままでゴン太くんはまったく戦いについていけなかった。だけど、今は違う、僕とジャックくんとツカサくんがスバルくんを助けれるほどのパワーアップをしたって宣言する」

スバルは自信満々に胸を反らしたゴン太、そして、そう言ったエクゼを見る。

「頼んだよ」

ゴン太は笑顔を見せて親指を立てた。

「セツナ、場所は？」

「コスモウェーブだ」

コスモウェーブ、つまり宇宙だ。

「宇宙じゃん！ どうすんだセツナ！」

そつ、人間では酸素は愚か空気すらない絶望の世界。

スバルたち電波人間は電波変換をしているから大丈夫なだけであり、一般人たちではまったく生きていけない世界。つまりセツナは宇宙にいけない。

あわてるウォーロックを差し置いてセツナはカプセルから縦5センチと20センチぐらいの横の何かを取り出した。

「小型の酸素ボンベだ、これなら30分はもつ」

セツナは全身を電波融合させると3人はコスモウェーブに向かって電波転送されていく。

第64話 救出準備完了（後書き）

感想まっています

第65話 突入開始

コスモウェーブに電波転送された後、すぐに見つかったのは人工衛星のようなヘンテコな形の機械がふわふわと宙を漂っていた。

スバルは小型酸素ポンベをくわえたセツナのレーダーを見るとそこには二つほどの点がチカチカと光っては消えてを繰り返していた。

「間違いなく、あそこのデカブツだろ」

ウォーロックが冷たく言い放つとその前に行き、バリバリに一般的なノブ付きドアを開いた。

「中には空気があるよ、セツナでも呼吸ができる」

その言葉にセツナは酸素ポンベを取り外して収納する。

入り口を通った先には大小様々な機械が所狭しと並べられていた。

そして機械をほったらかしにしてトランプをしている二人の敵、らしき人物。

「でひゃひゃひゃ、通算5勝4敗、勝ち越しだぜえ」

「そろそろ革命の時にしましうかね、今のうちに楽しんでおきなさい」

そう言ってトランプをかき集めてマシンガンシャッフルをする様子を呆然と見ているしかできないスバルとゴン太を置き去りにウォー

ロックがずんずん迫っていく。

「おい」

返答無し。

「うおい」

返答無し。

「うおおい」

返答無し。

「聞けよボケエ！」

キレたウォーロックがビーストスイングの振りによる風圧で吹っ飛んでいく。

敵が舞い上がるジョーカーのトランプを人差し指と中指でお箸のように挟む。

「何をしにきましたか？」

スツと一直線にセツナの手の元に投げられ、掴む。

「ロリコンどもの掃除に」

セツナは不敵に笑みを浮かべてトランプを投げ返す。セツナは不敵に笑みを浮かべてトランプを投げ返す。ビーストスイングの振りに

よる風圧でトランプが吹き飛ぶ。そう言つとじゃんけんを始め、フレンがチヨキで勝った。

チヨキのままの手を優越感に浸りながら振るフレンの姿を忌々しうに見るリオンはスバルとゴン太を別の部屋に誘導していった。

「あなたのことはリオンから聞いてますよ、電波変換無しであのリオンと互角に戦い、音素を見抜いたその実力。さあ、楽しく始めましょうか」

第65話 突入開始（後書き）

かんそうまっています

第6話 紫色の音素

スバルたちが案内された先は何一つ物置かれず、体育館のような広々とした場所だった。

「てか、おまえら誰だよ、こっちはトランプ遊びが忙しかったんだから邪魔すんな」

「こっちの仲間を誘拐したヤツの言う台詞がトランプ遊びを邪魔すんなんて・・・」

呆れたようにため息をつくウォーロックにスバルたちは同意する。

「んなロリコンに目覚めた記憶は欠片もねーよ。 “こっち側”にも事情って言うものがあるんだっての」

そう言って真っ赤な髪の毛をイジリ始める。

ゴン太も脱力感に満ちた顔でぐったりしている。

「でも、僕らだって仲間を誘拐されて黙ってられないよ！ 何が目的なの？」

「言えねえなあ、でもおまえさんたちの仲間の安全は保証できる」

急にすごみのある口調に切り替えられ、心臓が圧迫されたような状態になる。

「やっぱり戦うしかないの？」

「そうだな、いつもお互いに納得できてりゃー争いなんて始めっから生まれねーしな。いくぜえ！」

相手が電波変換をしたと同時にスバルとゴン太が電波変換する。

「スバル、やべえな。相手のウィザードがFM武神隊のヤツ、しかもハーブのヤツの兄だな。最悪の場合はシャル兄の電波変換と同じぐらいの戦闘能力だ」

その言葉にスバルはギョツとする。
その力の片鱗しか見せなかったセツナでさえ冷や汗が垂れていた、それが敵になったら。

「ゴン太、連携して攻めよう！」

ゴン太はうなずくといつものように強引な攻めではなく、距離をとってオックスファイアを放っていく。

「2対1？ 卑怯じゃない？ 俺様冷や汗！」

ヒャーヒャー騒ぎながらも炎を確実に避け続けている。

「うおおおらあッ！」

ゴン太の吐く炎が境界線のようにリオンを退ける。

「チャージショット！」

スバルから巨大なエネルギー弾が一直線に迫る。

エネルギー弾は炎の境界線突き破って直撃した。
が。

「ブラインドか、見えない所からの奇襲って助けに來た側が使う戦術かよ！」

リオンのやかましい声と同時に青の音符がエネルギー弾とぶつかり、完璧に防ぎきっていた。

強い、セツナの言ったとおりものすごく。

今は青の音素、セツナは防御関係の力だと推測していたものだがチャージショットを軽く防いだところを見てもたぶん正解だろう。

「そろそろこっちもいくぜえ！」

リオンがギターを持ち直して弾丸のように接近してきた。

「くっ、オックスブレス！」

灼熱の炎がリオンを迎え撃つように壁状に出来上がる。

「甘ちゃんだぜえ！」

ギターをはじくと赤い音符が炎の壁に突進、まん丸の穴が開いたと同時にそこをくぐってゴン太の懷に飛び込んだ。

リオンはその勢いを殺すどころか利用してゴン太の頭にギターを横なぎにフルスイングする。

「させない！ 第三電波変換！ 星河スバル オンエア！ スターダストオーバードライブ！」

とつさに具現化結晶の木の壁を作ってギターを防ぐとその隙にゴン太の巨大な肩でシオルダーチャージを叩き込む。

だがリオンの抜群の反射神経はタッチの差でギターが盾になった。

「どわあっ！ そんな隠し技卑怯だろ」

落胆したような表情をとったりオンだが、次の瞬間、

「俺、少し本気でいくわ」

唐突に爆発的なまでに殺気が沸き上がってきた。

スバルたちが気迫に押された瞬間、そのわずかな隙を逃さなかった。

「シヨックノート！」

真つ赤な音符が現れ、次の瞬間、音速の勢いでゴン太に直撃した。

「ぐわっ、ああああ！」

あのゴン太の巨体を壁に叩きつけた、激突した場所が小さなクレイターが出来上がった。

（あれは赤、威力が高いヤツだ）

「戦いに集中しろよ」

冷めた口調が聞こえた時にはリオンはスバルの懷に潜り込んでいた。何色かのショックノートがくる。

「ショックノート！」

紫色の音符がふつくらとした形で目の前に出来上がった。

（紫は耐久性が薄い！）

もはや反射神経のような感覚で目の前に木の壁を作り上げて防いだ。

「切り札は最後までとっておくものだけ、マシンガンストリング！」

リオンはスバルの死角、真後ろに回り込んでギターから弦を発射した。

紫色に染まった弦を。

反応できない角度からの奇襲では反応できないまま、紫色の弦がスバルの胴体に巻き付いた。

（まずい！ 紫色は五感を狂わせる効果がある！）

思考が働いた時には遅かった。

巻き付いた弦から紫の音素の効果で体の反応が鈍り、続いて弦を滑るようにして紫色の音符が直撃する。

威力は無い。

だが、明らかに視界が揺れる、音が変に聞こえる、巻き付いていた弦の感覚がぐちゃぐちゃに感じる。

とにかく自由を取り戻すために風の具現化結晶で弦を切り裂くことが先だ。

ブォン！ と突風が出来上がると弦を切り裂いた、はずだった。

「五感がグチャグチャなのにそんな集中できるわきゃねーよ！」

その言葉がスバルに届いたのかはわからない。

だが風は地面を切り裂いていくだけ、さらに威力はどんどん薄れていく。

「おまえはもう具現化結晶を使えねーよ」

リオンが冷たく言い放ったその言葉、スバルには届いていないのかスバルは虚しくずっと弦を格闘を続けていくだけだった。

「スバル、今のオレなら・・・」

ゴン太はスバルに近づき、弦を焼き切るとスバルに振り向いた。

「エクゼに言われたとおりにはやるんだ。 ロックマンと電波を同調させる。 オレは強くなっただった！」

「じ・・・ん、た？」

「いくぜ、クロスフュージョン！」

第67話 二つの両刃片手剣（前書き）

すみません！

クイッククロッドさんのご指摘を受けて気づいたのですがリオンのウイザードはA M武神隊になっていましたがF Mです。

ハーブまでF M星出身でなくなってしまう・・・クイッククロッドさんには本当に感謝です、ありがとうございます！

こんなダメ作者なんで今後もミスがあれば言ってください。

第67話 二つの両刃片手剣

「ミカゲはどこだ」

静かに怒りを露わにしたセツナに対してフレンはずっと微笑を浮かべ続けている。

「まあいいでしょう、戦いながらも話せますしね」

そう言うとフレンは右手を目の前に差し出すように突き出すと木で作られた両刃槍が何もない空間から突然現れた。まるで何かを使って生成されたかのようなようだ。

「槍、珍しい武器を使うんだな」

「ビリヤードで使うキューを改造して武器に使う人に珍しいと言われるとは、ありがた迷惑ですね」

金属のぶつかる高い音と木がぶつかる低い音が部屋に響きわたる。

「あなた、そのキューの使い方はまるで“剣使い”のようですねえ」

フレンはセツナのキューの使い方を興味深そうに眺めて呟いた。

「僕は絶対に剣で戦わない」

その言葉を即答で完全否定するとキューを手裏剣のようにフレンに投げ飛ばした。

紙一重で避けられた、だがそのわずかな隙を確実に見抜いた。

セツナはトンファーを握りしめ、どてっ腹に叩きつけた。

鈍い音が鳴り、その威力に大きく押し戻されるが電波人間では致命傷にはほど遠い一撃だった。

「なんで電波人間なのに一般武器が通用するんですかね？ あなたは本当に子供ですかね？」

“子供”の言葉にセツナの眉間に皺しわが深く刻まれていく。

「子供扱いするなッ！」

怒りをトンファーに込め、殺戮さつりくの一撃が振り下ろされる。

だが、今度は後ろに下がって攻撃を回避されてしまう。「やれやれ、次は肋骨を軽くもっていかれるほどの一撃を、その華奢な体からなんでそんなパワーがでるんですか？」

ムツとした表情でトンファーを振り回すがやはり回避されてしまう。

「やはり違和感がありますね、あなたが本来使うべき武器ではないかですよ」

「武器の選択は僕の自由だっ！」

否定するかのように体を捻ってトンファーを振り下ろすが後ろに逃げられ、逆に自分の攻撃範囲外から足払いのような攻撃がきた。

セツナはジャンプして槍を避けると裏拳をねじ込んだ。

だが小学一年生、筋力には限界があるしその限界もまだまだ低いもの、さらに相手が電波人間なだけありビクともしない。

忌々しそうに睨みつけるが始まらない。

「かわいい一撃ですね」

やはり通用しない、いままでいろんな手段、時には爆弾を使って倒したりもしたがこの宇宙空間では大胆な手段はとれない。

だが賭けに出るには早すぎる、さらに成功しても勝利になるか、失敗したら槍でのカウンター。

それでも勝つにはリスクを背負ってでも、やるしかない。

セツナは片方のトンファアを戻して、投げつけたキューを拾い上げると右手にキューを、左手にはトンファアを握りしめた。

「次はどうするのですか？」

まるでセツナの戦いっぷりを楽しむかのような微笑をずっと浮かべ続けるフレンに舌打ちすると地面を蹴りつけるように走り出した。

フレンは迎撃のために槍でセツナの胸に向かって突き出した。

「僕は負けるわけにはいかないんだ、あいつは・・・返してもらおう！」

左手に握られたトンファアを盾にして受け止めた。

ギイン！ と、鈍い音が響いたその時にはすでにセツナはフレンの懷に潜り込んでいた。

右手のキューが鈍い音を立ててフレンの右肩に直撃した。痛みの前に思わず槍を落としてしまう。

だが、左手がセツナの右腕をガッチリ掴んだ。

「今、触れましたね」

次の瞬間、セツナの右手がダランと垂れ下がった。

「バカな、右手の力が・・・失われていく？」

「失う・・・微妙な表現ですね。正解は星の民の能力、“力を消滅させる力”ですよ。なんだか矛盾した力ですがね」

「そうか、貴様は右腕の筋肉の力を消滅させたのか」

「でもこれは本当に消滅させようとしたら三日は昏睡するんで使えません。でもあと1時間は直りませんよ」

ぶらぶらと力なく垂れた右腕を睨み、フレンを振り向いた。

「終わりにしましょうか」

次の瞬間、フレンはセツナの後ろに回り込んでいた。

とっさに右手を動かそうとした、だが右手は動くどころかピクリとも動かなかった。

「手遅れですよ」

ゴツ！ と固い音が響いたがセツナには何が起こったのか理解できなかった。

だが、体中に走ったのは電撃のような衝撃、そして、激痛。

セツナの体が地面に崩れ、倒れた。

血糊、カプセル、いろいろな道具がセツナの体から離れ、転がっていった。

そのうちの一つのカプセルがフレンの足元に当たった。

それを拾い上げ、中を開ける。

そこから出てきたのは、セツナが具現化結晶のみに使用される剣、だがいつもの短剣ではない。

それは真っ赤は宝石が埋め込まれ、長さはセツナの身長ほど、当然だが小学一年生の身長は恐ろしく小さなもの、１メートルを過ぎるぐらいの長さで刀身はオレンジの両刃片手剣だ。

それを見た瞬間、戦いですら崩さなかった微笑が崩れた。

「それ・・・触れるな・・・」

セツナの弱々しい声を聞かないで空のカプセルをセツナに向かって投げ捨て、もう一つ、近くのカプセルを開けるとそこからは剣が。青い宝石が埋め込まれ、刀身は水色、さっきの両刃片手剣と同じぐらいの長さだ。

『ふれんな・・・』

「あなた・・・何者ですか？」

『「触れるなッ！」』

雰囲気、左目の色が真っ赤に、変化した。

まだ使える左手でカプセルを掴み、足で体を支えると立ち上がった。

「星の民の名において命ずる！ 力を解放せよ！」

次の瞬間、セツナが掴んでいたカプセルと、フレンが掴んでいた二つの両刃片手剣が入れ替わった。

震えるその手で入れ替わったカプセルを投げ捨てる。

「あなた・・・何者なんですか!？」

第67話 二つの両刃片手剣（後書き）

感想待ってます

第68話 白と黒の翼

セツナは星の民の力で腕に働いている力を別の物質に押し付けて腕の力の回復を確認する。

（剣は大切なもののために振るわれる。 知らず知らずのうちにミカゲを大切に思っていたのかな。 あいつの存在、認めてやる）

記憶を約半年前から失ったセツナの頭にかすかに残った言葉、“剣は大切なもののために振るわれる”。

セツナの両手に、二つの両刃片手剣、紅と蒼の剣が握られた。

セツナがミカゲを認めた瞬間だった。

『おい、この体のご主人様あ・・・あいつ、ぶっ殺させろよお。我慢できねえよ』

（だまっている。 ヤツとは僕が戦っているんだ。 貴様は手を出すな！）

『小僧が中からも外からも防ぎきれるのか？ まあ、楽しませてもらおうじゃねえか』

セツナは今、残された唯一の武器を握りしめた。

「・・・まあ、見せてもらいましょうか。 あなたの、真の实力とやらを」

フレンはカプセルやキューなどを横に蹴り、再びいつもの微笑を浮かべると、槍を構えた。

「そう言えば、言ってませんでしたね。私の異名は“神の手を持つ者”ですよ」

「僕はネクロマンサー、完全記憶能力者、いろいろある」

「完全記憶能力者……まあいいでしょう、私の疑問は戦いで見定めましょうか」

フレンが地面を蹴り上げ、槍をクルクルと回転させながら迫ってきた。

セツナは双剣のように構えると蒼の片手剣で矛先を受け止める。

「いったでしょう、僕の武器は右手、左手、二つもすでにあるんですよ」

フレンは右手をパーにして突き出してきた。

次の瞬間、水の手が、ブワッ！ と現れた。

具現化結晶されているらしいが素材が見あたらない。

セツナは紅の片手剣の刀身を縦に構えて受け止める。

「ただの剣だと思うなッ！」

次の瞬間、爆炎が剣から吹き出し、水の手を一瞬で蒸発させた。

フレンは後ろに大きく跳躍して距離をとる。

セツナは身を屈めて走り、跳躍した間合いを積み、紅の片手剣を振り上げるように切り上げたが、紙一重で回避されてしまう。

だがセツナはその剣を上 to 投げ飛ばし、蒼の片手剣を胸元にめがけて突き出した。

「剣を投げた？」

セツナは蒼の片手剣を両手で握りしめ、横振り剣を振り、槍をはじき飛ばした。

そしてセツナが上に飛び上がり、宙に浮かんだ紅の片手剣を握りしめ、落下する勢いを込めて二つの片手剣を振りおろした。

フレンは右手から雷の手が現れた、だが二つの剣が手を真つ二つに切り裂いた。

そのまま、紅の片手剣を上 to 放り投げ、フレンの右手を掴んだ。

「その手の正体、確かめさせてもらおう！」

フレンの右手の甲を見つめると、そこにはミカゲの首飾り、精霊石が埋め込まれていた。

「そうか、レーダーのもう一つの反応はこれか！」

フレンは握られた手を振り払うと距離をとった。

二人は疲労を抑えて体制を整える。

「そのジャグリング戦法、宝石の入った剣、君は・・・カイルなのではないですか？」

「カイ・・・ル？」

その時、セツナの頭に激痛が走った、何かの奥底を抉られたような感覚が全身を貫いた。

『交代だぜ、ご主人様ああ！』

（でるな！）

セツナの凝固な意志が痛みでわずかに揺らいだ瞬間、フレンの左手が迫っていた。

消滅の左手が襲いかかる。

セツナは意地で剣を振り回し、左手を退けたが、代わりに右手がセツナの頭をユーフォーキャッチャーのように掴んで持ち上げる。

「能力は、左手だけではありませんよ」

セツナの強い意識の力が、一時的に消滅していく。

（ふう、どうにか気絶させれましたか）

だが、フレンの予想は大きくはずれた。

『お眠の時間だぜ、出番だッ！』

唐突に、セツナの瞳が真紅に染め上がり、雰囲気も荒々しいものに化する。

「おまえなら本気を出してもよさそうだなあ！」

意識が消滅し、支配者の消えたその体が地面に崩れかけていたはず、倒れかけたその体に力が吹き込まれたかのように、怒声を響かせた。

セツナの足が地面を踏みしめて、思いつきり蹴りだした。

「バカな！？ 意識が一時的に消滅したはずです！」

慌てて槍を構えようとしたが、もう遅かった。

セツナに握られた双剣はすでにフレンの体を射程範囲に捕らえていた。

まるで疲労がすべて吹っ飛んだかのような速さで迫っていた。

（真っ赤な瞳、消滅した意識が好戦的になって復活、完全回復したかのような体の動き！ 何が起こっている！）

セツナが両手を大きく振り上げ、振り下ろした双剣をフレンは両刃槍で受け止めて押し返し、セツナを打ち上げる。

「もう一度眠ってもらいますよ！」

再び左手が、セツナの頭に迫る。

だが、空振りになって攻撃が終わってしまった。

宙に浮いたセツナの背中にジェット装置が装着され、ジェット噴射されたかのごとく上に高速移動した。

フレンは華奢な体、戦闘でボロボロになった服、奇妙な怪物の仮面、それらをすべて見ない、その代わりに別の物を凝視した。

「なんですか？ その“白と黒の翼のような物”は？」

セツナの背中には漆黒と純白、二つの翼のような物が生えていた。

その翼は白いと黒いエネルギーが背中から噴射されたかのようにセツナの体を浮かばせていた。

「なんだ？ そんな不思議そうに睨みやがって、バカにしてんのかよ！」

セツナの後ろに生えた翼が爆発的に噴射された。

高速移動によって超音波が巻き起こり、カプセルをまき散らしながらフレンに迫った。

「くっ！」

苦虫を噛み潰したような顔をしながら高速で迫る刃を防ぐ。

「お前は防御しかできないのかあ!？」

「そんなわけないでしょう、時間ですよ」

そう言った瞬間、部屋中からプシュー！ と風船から空気を抜いたような音が聞こえてきた。

「生身の人間が、酸素無しで生きられますか？」

「だったら次で決めりゃーいいんだろうがッ！」

もう一度、翼からエネルギーが吹き荒れ、高速でせまる。

「焦ったら、刃は鈍りますよ。 あなたの負けです」

槍が太刀筋を見切ったように盾になり、その一瞬で手がガツシリと頭を掴んだ。

「こんどこそ、ゲームオーバーですよ」

真空状態、意識の一時的消滅。

フレンはまだ真空状態になっていない出入口に行くとその手の前に力無く浮いているセツナを放り投げようとした。

「あなたはカイルかと思いましたが、勘違いでしたか。 まあ、彼

はすでに・・・」

「・・・カイルではない・・・」

その時、フレンの瞳が大きく見開かれた。

（バカな・・・意識の復活にはまだ速い！　ましてついさっきに意識が消えたはずなのに！？）

いつもどおり、自信に満ちた蒼くて鋭く光っているその瞳が、フレンを捉える。

「僕は・・・セツナだ！」

再び強く握られたその剣が、フレンに向かって振り下ろされた。

第68話 白と黒の翼（後書き）

この翼、覚えておいてくださいね。

感想待ってます

第69話 多重能力者

フレンは逃げ込むようにさっきの戦場に走った。

セツナは小型酸素ポンベを口にくわえてのろのろと歩いて部屋にもどった。

自分の意志と動いていると言うより、ほとんど無我となった頭がかってに動いてしまっているような感じに見えた。

「仕切直した、おまえの相手は誰でもない、この僕だ」

小型酸素ポンベを通して微かに聞こえたその声は弱々しく、だから、確かな覚悟を感じさせた。

（酸素供給時間はここまで来るまでに10分使ってしまった、搜索から到着までに時間がかかりすぎたな）

刹那は歯を食いしばって、力のかぎり地面を蹴った。

「もはや人間なのかを疑うほどの生命力ですね、解剖したくなりますよ」

フレンは両刃槍を拾い上げ、迎え打つように構える。

セツナは紅の片手剣で槍の矛先をはじき飛ばすと蒼の片手剣を振り下ろした。

フレンは反射的に右手を前にだして具現化結晶、炎の手を作り出した。

だが、セツナの蒼の片手剣に埋め込まれた宝石が光輝くと剣先から水が滝のような勢いで流れだし、炎の手とフレンをまるごと飲み込んだ。

「やっぱりな、おまえ・・・もう星の民の力、使えないだろ」

セツナが呟いた言葉にフレンが黙り込む。

セツナが動揺した瞬間を見て一気に畳み掛けるように走り出した。

木の槍で必死に防いでいるがもはや打つ手がないようなほど防戦一方だ。

「たとえば、勝ち目が無くとも、彼女たちは渡せません。それに、私の能力はこれだけではないですよっ！」

フレンは両手をパン、と合わせると地面に手の平をペツタリとつけた。

直後、木が針山のように生えてきた。

それがセツナのくわえた酸素ボンベに迫った。

だが、セツナの紅の剣は完全に木を焼ききった。

「能力は、簡単に言えば“木属性の物を生み出す力”ですかね、毒キノコに近いものも出せますよ」

セツナの体に花粉が霧散していく。

直後、セツナの体がピクリとも動かなくなった。

フレンはパソコンのモニターを見るとパソコンをイジリだし、何かを取り出した。

そして、それを持ってセツナに近づいた。

第70話 クロスフュージョン（前書き）

効果、覚えておいてください。

第70話 クロスフュージョン

ゴン太の声がスバルの耳に届いたその時、揺らいだ視界に光が差し込んだ。

『スバル、よく聞け！ こいつはエグゼが言うには簡単に言えば融合だ。これによってお前の体を主体に俺の能力が追加される！ さあ、反撃だ！』

スバルの体を光がすべて包んで、スバルの体に吸い込まれていく。

「いくよゴン太、サポートよろしく！」

光が消え去った時、そこには真っ赤な体に牛のような大きな角が頭の横、肩に装着された。

「ロックマン、だっけ？ どんだけ変身するんだよ・・・」

落胆した様子でうな垂れるリオンをさっきの状態が嘘のような表情を浮かべたスバルが見つめる。

『覚えてるよな、ノイズチェンジを。 姿も能力もアレだと思えよ！』

スバルは心の中でうなずくと一気に走り出し、距離を積めた。

「さっきとはひと味違うよ！ ヒートキャノン！」

スバルの手に装着された銃口から爆弾のような物が発射される。

応戦するかのように赤い音符を放った。

音符とぶつかり、音符を消し飛ばしたが続けて第2、第3と次々と音符が飛び交い、スバルの攻撃を打ち消した。

さらに様々な色の音符が襲いかかってきた。

「くっ、ヒートキャノン！」

スバルも負けじと音符を打ち落とすが連射数が違いすぎた、あつと言つ間に音符の集団が迫ってきた。

『言い忘れたけど、引き継がれた力是他にもあるぜ！ それは――』

音符がぶつかり、クレーターを作る威力が着弾した、地面に。

「あり？」

そこにはクレーターによる穴だらけ、そこにはスバルの姿はない。

『星の民の能力。俺のは“身体能力の強化”だ！』

「ここだよ」

スバルはリオンの横にいた。

銃口は胸の辺りに突きつけられている。

「速すぎじゃね?」

銃口を近づけられているがリオンは冷や汗どころかニヤニヤと笑っている。

「情報とかほしくないの?」

「僕らの目的は仲間の救出、組織とかに入っていないの」

「あつそ、なら、そろそろ終わりにしようぜ・・・星のー」

『リオン！　いますぐ戦いを停止しなさい！　保護した二人が脱走してます!』

その言葉にリオンはだらしなく口を開けて呆然とした。

「あいつらはおまえの星の民の力、睡眠作用のある花粉で寝てたんじゃないの?」

『私が戦いにはしゃいでいたら能力の限界地点まで使ってたんで花粉の効果も消えたんでしょ』

「なんだその客観的な言い方は！　テーマの失態だろ!」

怒りのままに怒号を炸裂させた。

『やれやれです、とにかくお互いの戦闘目的が消えた今、戦う意味はないです。　そちらの人も連れてこちらへ、ついでに一つ疑問がでましたから』

スバルは自分に指を向けて首を傾げるとリオンはうなずき、元の部屋に戻した。

「これが防犯カメラの映像ですよ」

そこには寝ていたミソラが起きるとまだ寝っぱなしのミカゲをおんぶしてどこかに行ってしまったていた。

「つまりミソラがミカゲを連れて脱走した、と言っことだ。 僕らはこの二人が無いと意味がなくなったから戦いは終わったと言っことだ」

セツナは不機嫌そうに説明する。

「ついでに話せばナイトメア側では無い、と言っ話。 一ちらとの目的が一致したのですよ」

「目的？」

スバルとゴン太は首を傾げるとリオンはため息をついた。

「ようするにあの二人の奪還、目的が同じになったのですよ」

「協力しよう、ということだね」

フレンはうなずくと手を差し出してきたのでスバルは握手した。

「おそらくどこかのナイトメアの施設だろう、この戦力では勝ち目は薄い。一度WAXAに戻るぞ」

セツナはマントを翻し、行くぞと言って歩きだした。

「待ってください！」

フレンは出口に向かっていたセツナの首根っこを掴んで、リオンの目の前まで持ち上げた。

「この子がカイルの武器を持っていた。だが確証とかいろいろないのでしばらく観察させてもらいましうか」

フレンは手つとり早くまとめてスバルたちの言うWAXAまでついていくことにした。

第70話 クロスフュージョン（後書き）

謎の人物、フレンとリオンが仲間？になったようです。

そして彼らの言う“カイル”とは？ 目的とは？

いろいろと謎が溢れ帰っていますが気にしない、そのうちわかりますよ、たぶん・・・

感想待ってます

第70話 作戦会議（前書き）

かなり投稿が遅れてしまった！？

これからがんばります

第70話 作戦会議

ここはWAXAの会議室。

スバルたちはフレンとリオンと帰ってくると仲間たちを召集して作戦を考えることとなった。

「で、どうするよ?」

リオンがヘラヘラとした口調で口火を切る。

「もちろん勝利条件は最優先してほしいのはミカゲ、ミソラの救出だ」

セツナの主張を聞き、みんなはうなずいた。

「今回は奇襲による侵入戦、スバルには揺動、その隙に多方向から侵入、救出、そしてアラタの空間移動で離脱」

フレンは業務事項の伝達のような手早い説明で内容を決めていく。

「舞台はナイトメアの支部、ここでどこだかわからない本部に連れて行かれる前に奪取。支部は形状はすべて正方形の敷地になっているはずだ」

「なら班にしましょうか。1班は私、フレン。2班はクロウとゴン太。3班はアラタとツカサ。4班はセツナとランドでいいですか?」

みんながうなずいた。

だが一人が異議を唱えた。

「スバルだけが揺動なのか？ それに俺は？」

ジャックがブツブツと呟く。

「あなたは各方面のフォローと周辺の増援への対抗策ですが、スバルが負担が激しいですね・・・誰かいないですか？」

スバルは問いかけられ、悩むが問題が解決したようなパツと明るい笑みを見せ、

「いる！ 頼んでみるよ！」

そう言つて会議室を出ていった。

「では作戦内容を伝えます。

スバルたちの奇襲後、アラタの能力で3班は内部に直接侵入。3班は施設内の機能を掌握。そこからは各班、侵入し、その場で東西南北に進行して目的を救出。

ジャックは伝えたとおりに、以上です」

フレンはゆっくり立ち上がるとノートパソコンを取り出し、シュミレーションを始め出した。

第70話 作戦会議（後書き）

感想まっています

第72話 作戦開始

次の日、曉たちサテラポリスとランドの能力やフレンやリオンの協力もあり、準備が完了した。

作戦参加メンバーはWAXAの二ホン支部の前、そこに集まっていた、スバル以外は。

「おいおい、スバルはいつまでほつつき歩いてんの？ もうすぐ殴り込みの始まりだってのに」

あくびを噛み殺さず、大きく開いた口のままデリオンはみんなに問いかけたがみんなは首を傾げる。

スバルが出ていってから、まったくの連絡なしでぶっちゃけ行方不明な状態だ。

「本作戦で重要な役、スバルほどのヤツがいるのか？」

「まず危険な揺動の役をまかせるほどの実力者が思いつかないんだよな・・・どんなヤツが来るのか・・・」

セツナの問いは疑問に終わった、その時だった。スバルがついに帰ってきたのだ。

「ごめん、おそくなっちゃって」

素直に謝るスバル、だがおかしいことがある。

「その、呼んだヤツは？」

アラタが質問すると、

「それはねー」

「オレだ」

スバルの言葉を遮って空から現れ、返答したのは、

「ソロ！？」

そこにはムーの力を持つ孤高の戦士、ソロが堂々と立っていた。

「コイツには借りがある、それにナイトメアはムーの技術を悪用している。ヤツらには罰を与えなければならない」

「これはまた強そうな人が来ましたねえ」

フレンはいつもどおりの微笑を浮かべているがソロの実力を一目で感じ取ったのか、目が普段より鋭く光っていた。

リオンも顔が真剣味な表情が混ざり、ソロを観察するように見ている。

「さあ、いきましょか」

近くに置かれた長さ十数メートル以上のクラスの大形の飛行機に向かってみんな歩きだした。

フレンを先頭に次々と入っていく。

最後であるセツナ、スバルが入るうとした。

「・・・ぐっ」

唐突にセツナがよろめき、倒れそうになったところをスバルが慌てて手を掴んで支える。

「大丈夫？」

「ああ、心配はいらない」

そう言つてセツナは席に座った。

ふとフレンがその様子を見ていることに気がついたが飛行機に差した日光が影響して表情が見えず、何を考えているかわからなかった。

「ランド、到着までどのくらいだ？ 軽く1時間か？」

「何を言つてんだアラタ？ 3分でいくぜ」

思考が、一端止まり、再度動く。

「・・・待てよ、3分？」

アラタやゴン太にクロウ、スバルは半分ほど絶句し、ジャックやツカサ、リオンは眉がピクツと動いた。

動じないのはソロとフレン、そして制作者のランドだけ。

「少し、質問だぜ・・・オレ様の計算が正しい、なら時速は・・・」
歯切れ悪く言うリオンに対し、

「たぶんおまえの頭にあるヤツで正解。一万キロぐらいは軽いぜ」

その言葉に一部を除いたみんながギョツとする。

「ちょっーー」

「おしゃべりは発進中でもオーケー、スイッチオン」

ポチッ と押した瞬間、飛行機が轟音を響かせた。

鳴動する飛行機は次の瞬間、空の彼方にぶっ飛んだ。

ミカゲはただいま時速一万キロで全速前進中のみなさんの目的地、ナイトメア施設のふつうの個室で目を輝かせていた。

響ミソラが目の前にいるからだ。

スバルたちといえることが多いので忘れてしまいそうだがミソラは芸能界のトップクラス、老若男女からの支持も絶大である。それにめったにいない世間知らずのミカゲだがさすがにテレビは使える、スイッチいじれば勝手に起動してチャンネルがコロコロ変わる。

ようするにミソラはミカゲの憧れである。

当然ナイトメアなんて物騒な組織にいるべき人ではない。

「どうしてここにいるの？」

「さあね」

ミソラは視線を反らした。

ミカゲは本能で口を開かないと感じると別の手段に出た。

「すごく純粋で優しい心、でも悲しんでる、悩んでる……」

ミソラは雷のような衝撃を彼女の言葉から受け取ると顔を背けた。

「帰りたいと思ってる、みんなの所へ」

ミソラは我慢できなくなり、ミカゲに振り向いた。

ミカゲの心配そうな表情は自分の誓いを揺らしたが、渡せない。

「もうすぐ迎えが来る、きつと・・・困ったらここに連絡して、できるかぎりは協力する」

ミソラが渡した一枚の紙、それにはメールアドレスと携帯番号が書いてあった。

ミカゲはそれをハンターに登録する。

「私、仕事があるからそろそろ行くね」

「うん、いろいろありがと！」

ミカゲは元気一杯に手を振ると笑顔を見せた。

ミソラは笑顔で返すと電波変換し、走り出した。

「本作戦ではスバルとソロが敵を引きつける隙に3班が機能を掌握してください、よろしいですか？」

「むぐぐぐうくあがぎいいいいいい」

「ま、待って！ おごべっ・・・まともにしゃべれ、がふっ！」

ソロは微動一つしないがスバルとアラタは答えれない状態だ。

時速はただいま一万キロオーバー。

速度による莫大なGで搭乗者の内臓やら肺やらは思いっきり圧迫され、話すどころの問題を越えてしまっている。

「ちよっ、うひっ！ なんでおまえは分厚い板に押し潰されるような感覚の中、余裕そうな表情なんだ・・・うぐっ」

そう、現状で正気、というより通常な状態を保っているのはフレン、ランド、ソロだけではかたは死屍累類。

「て、テメツ！ このままじゃ到着前に戦闘が出来なく・・・」

「もう到着ですから、スバルとソロは準備のため、出撃室に行ってください」

フレンに指示され、フラフラスバルとソロは立ち上がり、後ろの部屋に移動する。

フレンとリオンがついてきて、近くのスイッチをイジリ始める。

次の瞬間、目の前の壁が大きく開き、その向こうのきれいな大空が果てしなく広がっている。

スバルの思考が一時的に止まる。

そして再び思考を動かしたきっかけは、尋常ではない突風。

それがスバルたちを包み込んでいき、一瞬で飛行機から投げ出されそうになる。

「なっ、なんでえええええーッ！」

スバルの視界に映るのは何かを掴んで体を固定しているフレン、リオン、ソロ。

スバルもギリギリで機内の壁の突起をつかんだが何秒保つかかわからない。

「ふっ、フレン！ これはいったいどういうことですかあああーッ！」

「んな基地近くに着陸して、よしいくぜ、なーんてしてたらナイトメアのクソつたれどもにバレますよ。 私たち全員途中下車でございますよ」

「聞いてない！」

「そりゃー、作戦会議中、勝手に出ていくんだもん。伝える暇は無い無い」

スバルの全身全霊の意義もすべてダメ。

「待つて！ 心の準備がー！ー」

「黙れ、見苦しい」

突起を掴んでいるスバルの手をソロの手がはじきとばし、スバルは体の支えを失ってしまう。

「やつぱり強襲といえば、空中からでしょ」

この作戦では負担が大きいがアラタの力でいけるのにあえて空中から突入を選択したのはフレンだということをスバルは知らない。

そしてスバルの体を突風が雲一つ無い青空の下へご招待され、絶叫が爆発した。

「うわあああああああああああああああああーッ
ッ」

スバルは電波変換すれば助かるのにも気づかないまま、手足をバタバタさせると体が訳を分からない方向に回転して着陸位置からずれていく。

ぐるぐるな視界の中、やはり表情一つ変えないでスカイスポーツを満喫するソロと飛行機から微笑を見せ、手を振るフレンが見えた。

今作戦、フレンはただスカイスポーツが好きなだけで空中を選んだとは、スバルは知るよしもない。

作戦、開始――！。

第72話 作戦開始（後書き）

さあ、作戦はどうなることやら・・・

第73話 行動開始

スバルたちがスカイスポーツを嫌というほど満喫中の時、アラタとツカサ、3班はナイトメア施設中央の情報通信室に転移し、敵を制圧した。

「ちょっとまってて、僕の星の民の力は“電気を操る力”だから、LUNを通してマップを出し、同時に施設内の通信機能などを停止させる！」

そういつてメインコンピューターを触る。

アラタは暇になったのでサブのコンピューターをイジる。

サブモニターに並んでいく様々な計画の数々の名前にアラタは敵対する組織、そして、自分を作った組織の強大さが見て取れた。

そんな中、一つの題名にアラタは目を止めた。

スバルとソロは空中で電波変換した。

スバルはサーフィン型の乗り物、リフに乗り、ソロはラプラスの形状を翼のように変化させて背中に装着させて着陸した。

警告音と赤いランプが光輝き、施設内からアリのように兵士たちが現れ、電波スーツを装着したと同時に地面がドアのように開き、人型に象られたの金属の鎧のような装甲で動きは人間に限りなく近く、運動能力は人間の能力を越えている人の皮をかぶった金属兵器がガチャンガチャンと音を鳴らしてスバルたちに迫りくる。

数は数百。

それらがスバルとソロを排除するため、一斉に動き出した。

電波スーツも金属機械も一般的な人間を遙かに越えた力、速さで襲いかかる。

電波スーツ側はウェーブロードを電波変換された脚で乗り越え、近距離に持ち込む。

金属兵器側は対電波体用に作られた特殊なスナイパーライフルでスバルたちの体を狙い撃つ。

「スバル、電波スーツ側は任せる。俺は下の兵器を黙らせる」

ソロはそう言うとスバルの異議を唱える前に下に向かっていった。

ソロは着陸するとカプセルを一つ、放り投げ、中から飛び出した剣を掴んだ。

ソロの手に握られたのは、オーパーツ、ベルセルクだ。

「いくぞ」

たった一言を残して、走り出した。

ソロはベルセルクを敵に投げ飛ばした。

「ダンシングブレード」

剣はまっすぐと敵に向かい、機械の胴体を真っ二つに斬り裂いて再びソロの手に握られる。

そしてそのまま空中に飛び上がり、剣を振り上げる。

「ブライブレイク！」

ベルセルクの剣が、機械をバターのようになっさり斬り裂いて、地面に激突。

「消える」

威力のあまり地割れが発生し、割れた地面に機械兵器たちが次々と吸い込まれていく。

ソロはこの調子で敵を次々と斬り裂き、摺り潰し、スクラップの山を築き上げていく。

勝てない。

そう悟った時には、すでに刃の餌食となっていた。

スバルたちが外で交戦している間に1、2、4班は内部への進入に成功し、そして3班と合流していた。

「3班は南でいいな」

「はい、では・・・行動を開始してください」

フレンの号令と同時に四班すべてがバラバラになり、移動を開始した。

アラタは南側に走りながら、ツカサと話している。

「協力してくれ、どうしても調べたいことがある」

「なに？」

ツカサが問いかけると珍しく普通に返答した。

「俺の生みの親、飛螺博士が協力したプロジェクトの一つに“最強戦闘人間制作”、通称“フルシンクロ”と言うヤツがあつてな。

さっきの部屋で一部を見たんだ。そこには俺の名前やなぜかセツナの名前もあつた・・・それを調べたい」

「いいよ、僕ならできるしね」

そう言つと走る速度を速めた。

第73話 行動開始（後書き）

また謎が増えてしまった・・・もう知らない！

感想まっです

第74話 飛螺博士のプラン

アラタが暇だったのでイジったコンピュータから偶然発見されたプラン。

通称“フルシンクロ”。

その前書きの説明に書いてあった言葉“最強の戦闘兵”や自分の名前や何故かセツナの名前が記されていた。

「なにか引つかかる、主実験者の名前には俺を作った飛螺博士、彼は死んだはずなのに計画は凍結されず進行中とされていた」

深刻そうにつぶやいたアラタは足をより速めた。

「ほかのプランは？」

「ほかの飛螺博士のプランは博士の死亡により強制凍結。それなのにそれだけ進行中になっている。おかしくないか？」

ツカサは、うーん、と考えたがやはりやり違いと考えるには証明するものがない。

「そう言えばさっきの機能掌握の時、南側の一つの部屋だけLUNがつかっていなかった・・・」

「たぶん、ハッキングの対策だろう・・・もし、データベースとして“見られたくないもの”をいっぱい集めた場所だとしたら？」

わざと疑い深い口調で言うとツカサも微笑んだ。

「なら、さつさと調べようか！ 僕的能力ならハッキングなんてすぐできるしね」

二人は向き合って微笑むとさらに足を速めていった。

ツカサのハッキングしたメインコンピューター。

ツカサたちは回線のコードを抜き取り、さらに電源装置をアラタがどこかに吹っ飛ばしたのでメインコンピューターは完全に機能を停止させることに成功させた。

はずだった。

唐突に部屋の装置が鳴動を始め、メインモニターに光を宿した。

『ヨビデンリヨクノシヨウ、オヨビムセンRUNヲシヨウ、シセツ

ナイノボウエイキノウハツドウ』

片言な言葉が続き、機械は最後の力を施設内に発信していく。

『・・・ガ・・・ツウシンハッシンセツテイノジカンヘンコウヲカ
クニン。 ナイトメアコード・・・ニンシキカンリョウ。 コード
メイ、ヒビキミソラ。 ボウエイシステム、ゴフンゴニハッシン・
』

セツナとランドは武器器具庫にいた。

そこでランドは武器を素材に対隔壁用ショットガン、ついでにセツ
ナのキューとトンファーを生成していた。

だが、状況が一変した。

「なんでドアが開かねえんだ！」

ランドは自動ドアをバンバン叩いていたが、まったく開かない。

さらに部屋は緊急用の電気を使用しているので長時間は保たないのは分かりきっていた。

その時、部屋の中の照明が真っ赤に切り替わった。

ランドはギョツとしているがセツナは冷静沈着に部屋の管理モニタに目を向けると『安全保証のため部屋を閉鎖』と表示されている。

「さわぐな」

セツナは部屋を静かにして考えた。

不意に聞こえてきた、ドドドドド・・・、というまるで滝のような音が部屋の周囲から聞こえてきた。

「水・・・だな」

閉じこめられた。

そう認めた時なら酸素や食料、救助など想像し、焦りを加速させて自滅なんてことは一般的によくあるパターンだ。

セツナは毒づくとも再び思考を回転させる。

この音ならまだ足首ほどだ、と断定するとランドの作った対隔壁用ショットガンを自動ドアに発射した。

ドアが、ベコンと音を立てて倒れた。
それと同時に水が大量に流れってくる。

おそらくセツナの腰ぐらいの水の高さまで達したようだ。

セツナは炎を出す紅の両刃片手剣を豆粒のようなカプセルから取り出すと深紅の炎を吹き出し、水を蒸発させていく。

「いくぞ！ 時間がない！」

セツナは片手剣で水を蒸発させ、足場を作りつつ走り出した。

アラタたちはとある部屋にたどり着いていた。

そこには机とイス、そしてパソコンが一つ置かれた貧相な部屋だった。

「ここが最後の部屋、ついでにRUNのつながっていない部屋・・・か」

アラタはため息混じりにつぶやくとUSBケーブルをつけたハンターをパソコンに装着させるとツカサに情報の転送を頼んだ。

「まって、最新の更新に“フルシンクロ”ともう一つ、ミカゲについての情報がある」

ツカサは目をつぶり、しばらく停止する。

「やばい。ここは図でミカゲはナイトメアニホン本部に輸送されている！そしてこの施設を水を流し込んで動きを封じるつもりだ！」

それを聞くとアラタはメールでこれについて一斉送信した。

「俺は先にみんなを転移させてくる！」

アラタはその場で空間転移した。

ツカサは限界まで情報をハンターに転送していく。

第74話 飛螺博士のプラン（後書き）

感想待ってます

第75話 独断行動（前書き）

なんか最近ものすごく寒いです・・・

でも花粉弱いのは助かる！

第75話 独断行動

アラタは星の民の能力で仲間たちを全員外に転移させていたが、

「セツナが勝手にミカゲ救出のために施設の壁に穴ブチ当てて追いかけたぁ!？」

ランドが言うにはアラタのメールを受け取るとミカゲの首飾りに反応する装置を取り出すと対隔壁用ショットガンを使って穴を開けて炎の剣を逆噴射による推進力でどっかにいっちまったらしい。

「どうする?」

「どうするもなにも、まずミカゲの救出に行きます、あの飛行機でね」

そう、時速一万キロの飛行機に。

スバルたちが青ざめる中、フレンの微笑はいつもより嫌らしく見えた。

「あれだな」

セツナは炎を噴射する紅の片手剣を使った推進力でついに敵の輸送車を発見した。

護衛しているらしい人型機械兵器と電波スーツは見ただけではざっと30人前後。

セツナは素早く近くにあった瓦礫の壁に身を隠すとトンファーを取り出した。

これはランドの改良で拳銃のような形状を全体的に伸ばしたようになつて、サイレンサー付きの拳銃にもなれるし今までのように近接武器として振るうことができる。

「まずは車の足だな」

セツナは瓦礫の隙間から車のタイヤの後輪を打ち抜いた。

もちろん車はスリップしてそこらへんに転がっていく。

それと同時にセツナは力の限り、地面を蹴り上げた。

機械や人間は慌てて臨戦体制を取るがセツナのトンファーの間合いに入るほうが先だった。

銃弾のごとき速さと威力が一人の電波スーツのわき腹付近に叩きつけた。

ゴッ！ と鈍い音を鳴らして電波スーツは宙を舞い、地面で数回バ

ウンドして横たわる。

「チツ、いそいでヤツを・・・ぐはっ！」

セツナは焦りで周りが見えていない。

ただ本能的に目の前の敵を粉碎していく。

それがわずかな隙を生んだ。

機械兵士たちが装備したスナイパーライフルがセツナに一斉掃射されていく。

それは対電波体用の特殊なものだが弾丸は特殊電波を混ぜた空弾。当然、生身の人間には直撃すれば死とは言わないが致命的なダメージにつながるのは間違いない、直撃は間接的に死を意味する。

それが四方八方から迫り来る。

風を切り、前進する弾丸の乾いた音に気づいた時には、すでに空気がすぐそこだった。

（しまっー！）

セツナはとつさにトンファーを盾のようにして空弾をはじいたが一発でセツナの華奢な腕が浮き上がり、追撃を防ぐとさらに体が浮き上がる。

セツナは電波人間ではない、空中で自由は聞かない。

そこに一丁のスナイパーライフルから空弾が発射され、空中に浮かんだセツナの右足首に直撃した。

「がっあああああ！」

空中での攻撃によりセツナの体が足を引っ張られたように吹っ飛ばされていく。

セツナは地面との激突の時、受け身をとって衝撃を殺してそのまま転がるように機械兵器の残骸の山に隠れる。

（僕は何をしているんだ！ のこのこと敵陣のド真ん中に突っ込んだ拳げ句に吹っ飛ばされるなんて！）

怒りで我を忘れてしまいそうな脳内を必死に冷やし、攻撃を受けた足を見る。

そこには真っ青に腫れ上がった無惨な戦闘痕が生々しく、自分の無様な姿を証明するように大きく広がっていた。

セツナはすぐに羽織っている漆黒のマントを引きちぎると負傷した足首に巻き、固定する。

そうしている間にも敵の足音が、いつもより大きく耳に響いてくる。

（焦るな。 敵の移動手段は無い。 あとは敵を確実に倒せばいいだけなんだ！）

『本当か？』

不意に脳裏に響いたその言葉。

それと同時に脳味噌を二つに引き裂いたような激痛が頭を走り抜け

た。

『なぜこんな部隊を作って運ばせてるんだ？ 大切だからだろう？ コイツにはそれだけの価値があるんだよお・・・なあ、カイルさんよお』

その言葉がセツナの脳をさらにキリキリと苦しめる。

だが、

（僕はカイルではない・・・僕は、セツナだ！）

セツナは紅の両刃片手剣を右手に握りしめ、片方のトンファアを握り直した。

『へえ、この時期でここまで・・・しかたねえ、見物するか』

セツナは心の中で毒づく。と紅の片手剣から炎を逆噴射して天に駆け上がると落下と逆噴射の二つの力で急降下して、速度を持った体でセツナは片手剣を横振りにして機械兵器の胴体を焼き切って機能を停止させた。

「はあっ！」

左足で着地し、体を回転させるようにひねって敵を解体していく。

そして再び炎の逆噴射で空中に飛び上がり、右足をかばうような動きをしながら電波スーツを叩き潰していく。

「あと、少し！」

セツナは最後の力を振り絞り、攻撃を続ける。

最後の一人となった電波スーツを吹き飛ばし、着地した。

だが、安堵するにはまだ早い、ミカゲはまだ車の中だ。

セツナは剣をしまい、トンファーを杖代わりにして車を開けた。

中には牢屋に横たわるミカゲがいなかった。

セツナはロックを解除してヨロヨロと歩きだした。

「起きろよ・・・帰る、ぞ」

「ん・・・ほえ？ セツナッ！」

ミカゲが元気いっぱい立ち上がったと同時に安心したセツナの体から全ての力が抜けた。

ぐらりと揺れた彼は、ゆっくりと彼女に向かって倒れかかる。

ミカゲは慌てて両手を広げる。

そして、セツナの華奢な体をしっかりと抱き止めた。

ミカゲはセツナの顔を見ると油汗がびっしょりで口で荒く呼吸して、苦しそうに呻いていた。

「セツナ！ セツナあ！」

第75話 独断行動（後書き）

感想まっています

第75話 活路が見えてきた

ミカゲや作戦参加メンバーはWAXAの救護室で心配そうにセツナを見ていた。

消毒用のアルコールの臭いが充満した病室はベッドとその上のセツナを中心にみんなが取り囲むように並んでいた。

「疲労、打撲、捻挫など原因は心身ともに腐るほどありますよ」

フレンも苦々しく説明する表情は微笑を浮かべず真剣に傷だらけのセツナを見ていた。

「元々ナイトメアにいたんだっていうしな。 耐えない生活や突然の奇襲、ミカゲの誘拐に宇宙に行ってから施設突入戦に輸送部隊まで休み無しでフル出場」

「そりゃ〜過労になるぜえ」

クロウにリオンも続ける。

「さらに予測演算が激しい高度なジャグリング戦法。 加えて電波変換無しでの生身での戦闘・・・一発のダメージを受けての回復には数週間の時間がかかる。 一度の戦闘でのダメージは次の戦闘に引き継がれる、ゆえに蓄積された疲労がピークになった、と思うのですか・・・」

フレンは言葉を濁すような言い方だ。
まるで他に問題があるような。

「とにかくセツナをサポートしよう、最悪、戦線離脱させるしかない……」

スバルはベッドで横たわるセツナを見る。

今はセツナが元気になるのを祈るだけだ。

セツナのまぶたが動いた。

その動きは朝に起きたような至って普通な起き方だ。

(……僕、は……)

ここを脳内から検索するとどうやらWAXAだと分かった。

体中に包帯の独特の感触があった。

ふと窓を見るとそこには雲一つ無い夜空が広がっていた。

おそらく深夜なのだろう、光は月明かりのみで病室も照明は消えていた。

近くにあったハンターを取るため、動こうとしたが誰かの気配を感じて体を止めて布団の腹辺りに、わずかな重みと温もりのあるところを見る。

そこにはベッド横のパイプ椅子に座っているミカゲが眠っていた。

ミカゲのセミロングの髪の毛の隙間からわずかに見えたのは目の先の一滴の涙が光り、おそらくずっと前から付き添ってくれたと思われる。

その事にセツナの胸が締め付けられた。

だが締め付けられるような痛みは別の場所にもある。

（チツ、まだ痛みがあるのか・・・最近は特にそうだな）

セツナはミカゲを起こさないようにそっとベッドから降り、松葉杖を握り、気分を変えようとジュースを買いにいこうとした。

「セツナ」

不意に聞こえたその言葉に振り返るとフレンとリオンがジュースを

持って立っていた。

「お互いあまり聞かれたくないでしょう。外にいきましょうか」

3人は外に出る。

「今、あなたは頭痛などが断続的に続いているのですか？」

セツナはしばらく黙った。

「こっちはおまえを救えるかもしれない、だから正直に話せ」

二人の迫力にいつものヘラヘラした様子は無く、セツナはうなずいた。

「シャル、いや、ライガー。出てきてください」

セツナのハンターからシャルが飛び出してきた。

「やめてくださいよライガーの呼び方は、野蛮で嫌いですから」

「これで確定ですね・・・セツナ、あなたはカイルです」

やはり出てきた“カイル”という言葉。

「カイルとは誰だ？」

「こちら側にいた大切な仲間ですよ。突然失踪したあなたと同じ完全記憶能力者のね」

その言葉に眉をひそめる。

「そして、半年ごとに記憶が消えていく完全記憶能力者とあなたの病状が同じなんですよ」

半年、たしかに記憶喪失になったのは半年前であり、そこから今日まですべての晩ご飯を言い切れるから能力は発動されてるらしいし、記憶も続いているはず。

「私たちは失踪後のあなたの病状を調べたところ、どんなに知識を蓄積させても脳には影響は出ない、そして半年ごとに記憶が消えることや頭痛など謎の症状、そこを調べても何も出てこなかった・・・逆に言えば、そんな病状は存在しない」

「だが、僕にはその病状が、ある」

「そこでエグゼにそれを話してみると、脳に特殊な影響が出るのは人為的ではないか、と言われた」

「最初は星の民の能力で記憶が脳内の限界まで来て、それが爆発して記憶が消えたんじゃないかねーのって推理してたのにな」

「ここから、セツナの頭には人為的な細工されたものがある。セツナの能力は関係ないってことです」

漠然とした内容だが、活路が見えてきたような口ぶりだった。

「とにかく今日は寝てください、決定的な物を見つけてくるので」
そう言うと、二人はどこかに消えて行ってしまった。

(カイル・・・セツナ・・・二つの名に、数々の謎・・・)

セツナはとりあえずベッドに戻ることにした。

第75話 活路が見えてきた（後書き）

かんそうまっています

第77話 負の遺産

翌朝、セツナは過保護としか言えないほどにミカゲに世話をされていた。

食事一つでも、お腹はだいじょぶなの、食べさせてあげるとか子供扱いされているっぽくて嫌だった。

挙げ句の果てにはトイレにまで付いて来ようとしてきた、世間を知らない前に羞恥心をまったく知らないのか？

たしかに体はスタボロだがそんなにまでやられる記憶は無かったのだが、これでは生活を楽しめない。

そんな訳で今、セツナは安全な状態である、はずのベッドで寝たフリをしているのである。

ミカゲ付きだが。

（・・・頭痛の原因は人為的、か・・・気がついた時にはナイトメアに僕はいた。記憶は確かに断片的な物がほんの少し残っていたが、ヤツらは僕の能力で脳の許容量の限界を越えてしまったと推理していたが、だがそれはありえない。つまり何か人為的な何かで脳を圧迫されていると言うことか？）

アラタは自分の家でツカサとナイトメアの基地で入手したデータを解析していた。

「・・・ん？ 少し解析が完了したよ」

ツカサは自分の星の民の能力で一部解析を完了させるとアラタにそれを転送する。

「なにに・・・プランは難航した、が、とある凍結プランを利用する案が浮上してきた。フルシンクロ、脳波などを制御することで人間の情報を他人にリアルタイムで共有するプランをグリード博士が改良、星の民の能力をも共有可能と言う演算が出来、そこに通称、ネクロマンサーを入れることにより、完全記憶能力の共有を可能と同時に脳に注入され、彼の脳内の50%を掌握した『負の遺産』の情報を引き出せると言う結果が演算された?!」

ずいぶんと大規模だが、重要なキーワードが出てきた。

「セツナは『負の遺産』について知っているのか？」

ツカサは首を傾げる。

アラタはハンターのメールを使って『負の遺産』についてを送信した。

セツナは再び起きたころには夜になっていた。

そこにはぐっすりと寝ているミカゲとジューズをがぶ飲みしているリオンと本をペラペラめくるフレンが立っていた。

「その子は本当にあなたを大切に思っているんですね・・・ずっと、そこでハラハラしたような顔で見つめてましたよ」

セツナはミカゲを見る。

ミカゲは疲れたように、ぐでぐと、華奢な腕をベッドに伸ばして寝ていた。

「まあ、晩ご飯でも食べてください、そこにあるんで」

セツナはベッドの横に置かれた携帯食料の一種のようなゼリー飲料とスティック状の長方形のクッキーを手に取ると口の中に流し込んだ。

「ジュースでも飲むか？」

リオンはドアを指すのでセツナはハンターを取って立ち上がろうとした。

「メールか」

セツナはいつの間にか来ていたメールを開くと、フレンたちに、

「『負の遺産』について知っているか？」

と問いかけ、メールの内容を見せるとフレンは突然、力無く笑いだした。

「は・・・は、は。 あった。 答えがあった」

フレンは包帯で覆われた手で額を抑えて笑い、そして、

「『負の遺産』とは、2000年ほど前にあった大きな争いで生まれた物です。 それは多種で形もそれを改良した物など戦いで生かされ続けている最悪の遺産です。 内容は武器から宝石、中には怨念集合体や意志の結晶のような物までいろんな物があるとされていますが、実体を知る物はわずかとされています」

つまり、とフレンは続け、

「そこにある、脳の50%を掌握した物は、『200年前に生み出された意志、人格』なのです」

そう言うつとフレンはシュルシュルと両手の包帯を外していく。まるで長き封印からとき放つように。

「星の民の名において命ずる！ 力を解放せよ！」

そして、フレンの手がセツナの頭に、触れた。

『させるかよ』

セツナの脳を揺さぶったその一瞬で、殺意に似た何かが沸き上がり、目が真紅に染まり、白と黒の噴射に近い状態の翼が現れ、室内の物を吹き飛ばした。

「今度は遊びじゃねーぞ！ おまえしかできないその力！ 消してやるからなあああああ！」

吹き飛ばされたミカゲを受け止め、リオンは電波変換する。

「今、ここにいて戦えるのは何人だ！？」

「スバルとミカゲはここ、暁さんはサテラポリスの世界会議で留守ですから四人だけです！」

スバルがこの騒ぎに現れ、この状況を見て呆然としているのを見て、この四人で戦うしかないと確信する。

「こんなところで終わらせねえぞ！俺たちがやっとの思いで見つけたんだ・・・あの時からの思いが手を伸ばせば届くんだ！さあ、やろうぜ！」

第78話 4対1（前書き）

いろいろ分からないワードが出てきたけど速めに説明しますので。

第78話 4対1

フレンは覚悟を決めて電波変換すると呆然と立ち尽くしている二人の手を引っ張り、WAXAの玄関前の広場に飛び出し、リオンも続いた。

「な、なんなの!？」

スバルは手をぶらーん、と垂らし、猫背になり、背中から吹き荒れるような白と黒の翼を持つ、まるで化け物のようなセツナを見て言う。

「話せば長いので短縮するとセツナの頭痛などの正体は『200年前の誰かの意志、人格』が彼の脳内を掌握することによりセツナの記憶をコントロールしているかと思います。簡単に言えば、彼は今なら助くれる!」

「どうかな・・・俺はぴったり半年で記憶を消去するエネルギーが溜まる!　そして、それは今日の夜、10時に発動される!」

フレンの言葉を否定するように事実を叩き付けると翼がより強く吹き出し、超音波に近い音を発生させ始める。

「なら、10時までには私の力であなたを消滅させます!　たかが一週間の昏睡でセツナを救えるなら、安い買い物です」

フレンの能力は“力を消滅させる力”。
これでセツナに取り付いた“意志の持つ力”を消滅させれるが本当に消滅させるには一週間は昏睡することになる。

だが、迷わない。

「ショックノート！」

リオンはエレキギターを掻き鳴らし、赤の音符を連射するのが戦いの始まりのようになり、みんなが一斉に動き始める。

「んなシヨボい攻撃がああああッ！」

セツナの右手に炎のごとく燃え盛る闇が現れ、それが手に凝縮されていく。

次の瞬間、横なぎに振られると同時に爆発的な衝撃波が音速で駆け抜ける。

衝撃波はすべての音符を消し飛ばし、四人に直撃した。

体がくの字に吹っ飛ばされていくが、フレンの左手が触れると衝撃は消滅していった。いつの間にか電波変換したスバルが身を低く構え、セツナに向かってロックバスターを放つが横なぎに弧を描くような衝撃波は一瞬で消し飛ばした。

その間に右手を突き出すように構えたフレンとその後方で後を追いかけるようにミカゲが電波変換、ライトエンシェントになって走っていた。

「はあッ！」

右手から具現化結晶で生み出された2メートルを超える水の巨大な手がセツナを包み込む。

「無駄だ！」

巨大な手がセツナに触れた瞬間、腐食したかのように真っ黒に染まると消えてしまった。

「まだだよっ」

ミカゲが小さな右手を突き出すと同時にフレンと同じ水の手が飛び出した。が、

「俺には無駄だって言うてんだよッ！」

やはり真っ黒に染め上がり、消えてしまった。

（闇の属性・・・力が鎮圧されたような感じだった）

「終わりだ」

セツナが取り出したのは、銀色に輝く銃が内蔵された特殊トンファ
ー。

それを銃のように持ち、なんの躊躇い（ためらい）もなく、引き金を引いた。

ミカゲが見たのは、鈍い黒の闇が強引にねじ込まれた弾丸。

（どんな影響がでるのかわからない。　だけどコレはヤバイ！）

だが、攻撃の直後で身動きのとれない二人はなんの抵抗もできない。

「やらせるわけにはいかねえッ！」

その二人の肩に手を置いたのはリオンだ。

リオンは両手に力を込めると、まるで二人との立ち位置を換えるように弾丸の迫る前に飛び出した。

「星の民の名において命ずる！ 力を解放せよッ！」

次の瞬間、弾丸は地面に一直線に進み、アスファルトの地面にはじかれた。

「俺の能力は“力の向きを変更する力”だ！」

「忌々しい、消えて無くなれ！」

その直後にセツナの翼が爆発的に膨れ上がり、炸裂したかのようにリオンの腹にトンファーが叩きこまれた。

リオンの肺の空気を無理矢理全てを吐き出させるような強烈な一撃に彼の体がWAXAの入り口にあるゲートに激突し、血を吐きながら電波変換が解除されて気を失った。

「次はてめえらだあッ！」

続いてミカゲとフレンに衝撃波を0距離から放つ。

「全身打撲は防げないだろうなあ、脳震盪にならなきゃ楽しめるけど」

余裕の表情でくの字に折れ曲がり、壁に激突していくミカゲとフレ

ンを睨む。

ミカゲは意識を失い、電波変換が解除される。

フレンは意識があるが全身を電撃のように走る痛みで体を震わせるしかない。

だが、フレンは己の全身の痛みの力を一時的に消滅させるとフラフラと立ち上がる。

「スバル、ゴッドハンドを使います・・・時間を稼いでください」

フレンは残された最後の味方に頼むとスバルはフレンの盾になるように前に出る。

（これはまだ未完成、制御はともかくその後の状態が・・・さあ、今回は何週間昏睡するでしょうかね）

フレンは苦笑しながら右手を左胸、心臓の辺りに右手を当てると具現化結晶のため、心臓にすべての神経を集中させる。

「何をするか知らねえが無駄だあ！」

セツナは背中の中の一気に吹き出し、セツナはアスファルトの地面を蹴り上げた。

宙に舞い上がるセツナを見据えて、

「第三電波変換！ 星河スバル！ オンエア！ スターダストオーバードライブッ！」

対抗するかのよう^に宙に舞い上^がっていった。

第78話 4対1（後書き）

感想まっています。

最近全くこないなので誰かください！

第79話 最強の翼を制御する者

スバルは空中に飛び出すと氷の槍を生成して思い切りブン投げた。

「ははッ！ それ、見たことあるぜえ・・・200年前にエグゼが使った技だ！」

セツナは闇の衝撃波であっさり砕くとトンファーを構えて迫り来るが。

「かかった！」

セツナの後ろ、さつき砕かれた、空中でキラキラと輝くダイヤモンドダストが再び収束すると氷の槍が再生成されて彼の背中に走り出す。

「ビーストスイングウウウウ！」

セツナの前方、スバルを守るように前にウォーロックが飛び出して自慢の爪を横振りに攻撃する。

前と後ろ、二つの逃げ場を失い、攻撃を仕掛けられた。

「無駄だッ！」

セツナの白い翼が後ろの槍を粉々に粉碎し、黒い翼がまるでハエ叩きのようにウォーロックを一瞬で叩きつけた。

スバルは1メートルの正方形の木の盾を作り、攻撃に備える。

「その弱点はな、具現化結晶自体なんだよッ！」

マツハでトンファアを叩きつけられ、仰け反りながら必死に距離を稼いでいくが瞬きした間でそれは消えて無くなり、

「さあ、なんか作ってみろよ！」

スバルの盾にわざと攻撃を続け、仰け反るスバルを挑発するがスバルは盾で防ぎ続けるがもはや遊ばれているレベルの問題だ。

「できるわけねえよなあ！　こんな攻められて物作りに集中できるかッ！」

スバルは忌々しい表情でセツナを睨むがセツナはそれを見て狂喜の笑みを浮かべてトンファアを振り続ける。

本来では脳内での形状の想像から粒子を使ってその形状を具現化結晶する、という二段行程なのだがセツナの攻撃が速すぎるせいで想像の途中で攻撃が入るので想像が途切れて0からやり直しになってしまうのだ。

おそらくそれを知っていてこの作戦をとったのだろう。

（くっ・・・今のセツナはたぶん、フォルテより強い！）

「つまんねえ」

セツナの腕に爆発的な力が宿り、木の盾を叩き壊してそのまま腹にトンファアをねじ込んだ。

「ッ！ かはッ！」

血の塊を吐き出し、地面に一直線に落下していくが、セツナはスバルの首を缶ジュースのように掴むと膝を胸板に入れて追撃し、今度こそ地面に落ちていった。

「しゅーりょー」

地面に這いつくばるようにして倒れるスバルの頭をサッカーボールのように蹴り上げる。

スバルはきれいに弧を描いて地面に崩れ、電波変換が解除されていく。

「あとは・・・」

セツナは残った一人、フレンに振り向き、

「おまえ、ただだ」

そう宣告するとゆっくり歩き出した。

（まだ・・・時間が足りない・・・ここまでか？）

冷や汗を垂らし、セツナを睨むがもちろん止まるはずもなく、ゆっくりと足音を鳴らしていく。

それはまるで死へのカウントダウンのように聞こえ、セツナが近づくにつれ、カウントダウンは迫っていく。

そして、フレンの目の前に立った。

その圧倒的な力の前にフレンは希望を失い、絶望し、勝利を諦めた。そして、右手のトンファーを銃を使うために構え、引き金に人差し指を引っかけ、

「さようなら、だなあッ！」

「ダメっ」

その銃口の先、フレンの目の前に壁になるように立っているのは、電波変換の解除されてボロボロであり、本来なら動けないはずのミカゲだった。

いつもの活発そうな顔は消え去っていたが、代わりに真剣な心が彼女に宿り、まっすぐにセツナの混沌に満ちた血の色の瞳を見据えた。

彼女は圧倒的で絶望的な光景が広がっていても、臆さず（おくさず）にセツナの前に立ちはだかる。

フレンはその時、終わったと思った。

事実として彼女やりオンは一撃でやられ、まして電波変換をしていない人間ではミンチのようにされるような、そんな破滅に向かって何ができると思った。

「セツナ・・・戻ってきてよお」

だが、セツナはトンファーを勢いよく振り上げると空気を引き裂いて、振り下ろされた。

ギイイン！ と強力な音と同時に、トンファーは見えない何かに止められたかのようにミカゲの手前で停止する。

「アア？」

もう一度、同じように振るがやはりミカゲの数センチ手前で止まり、押し進めようとすると抵抗するように手が震えて前に進めない。

今度はトンファーに内蔵された銃を構えるが手がブルブルと震えて照準が定まらない。

「セツナには、そんなものは必要無い」

蚊のような小さい声で、ミカゲはつぶやく。
気がつけば、ミカゲはすでにセツナのトンファーの握られた両手を優しく包み込んでいた。

「私はただ、みんなと、みんなの未来を守りたい」

セツナの両手から、トンファーが滑り落ちた。

「くッ！」

今度は右手に混沌の闇が集い、それが手の平の上で球になり、ルー

プされている物を作り出すとそれを叩きつけるが、これも止まった。

セツナが、セツナしか、この化け物の力を止めている。

この土壇場で、同じ体に宿るこの化け物の力をすべて押さえ込もうとしている。

「あああああああああああ！　あああああつ！！」

拳をどんなにミカゲに放つても、ピタッ　と停止してしまう。

こんな小さな体を挽き肉に変えることなど造作もない、その気になつて少しでも指を動かせば殺せるのに、

百戦錬磨の戦士たちを倒せても、たった一人の少女すら倒すことのできない状態になってしまった。

「また、いつもみたいに遊ぼうよ」

セツナがうつむいた。

それと同時にフレンが右手を、希望の右手を突き出した。

「ゴッド・・・ハンド！」

具現化結晶された腕が伸び、セツナの頭をがちり掴んだ。

直後、背中の一対の翼は音もなく消えたと同時にセツナの体から力がすべて抜けていった。

そして、ミカゲは倒れてきたセツナを両手を広げて抱き留めた。

彼女はセツナの耳元で静かにこう言った。

「よかった、お帰りセツナ・・・」

直後、ミカゲの体が倒れ、セツナに押し倒されるような状態になり、気を失った。

第79話 最強の翼を制御する者（後書き）

感想まっています

第80話 一難去ってまた一難

あの後、セツナの暴走が止まったが、戦った5人はボロボロになっていた。

特に、フレンとセツナ自身が。

ミカゲが一番ダメージが少なく、リオンは病室で安静状態にしないといけないらしく、スバルに至っては現代に蘇ったミイラ男だと錯覚させられてしまうほど包帯グルグルな始末である。

フレンの状態はリオンが言うには「ゴッドハンドは星の民の力と具現化結晶の融合、さらに制御するためのエネルギーは体、特に心臓のエネルギーなんでもものすごく体力使うんでいつ起きるかわからんぜい」とヘラヘラと言っていた。

スバルは相変わらず鋼のごときボディは致命的なほどダメージは受けない、生活にそこまで支障がでるほどではない。だが、電波変換による戦闘はドクターストップ。

簡単に言えば、ミカゲ以外戦線離脱状態と言ってよろしい。

ミカゲはそわそわしていた。

昼ごろの病室、彼女がその病室のドアでああでもないこうでもない
と髪の毛をクシャクシャにしながら右往左往を続けていた。

理由は大きく分けて二つ。

一つは単純に電波変換を隠していたことを問いかけたと言う気持ち。

だが、現状のセツナは人知の領域を越えた力に体が耐えきれず、ボ
口雑巾のような状態らしいのでいきなり「てめー！　なんでミカゲ
に隠していたんだあーッ！」と不良口調に喧嘩腰だけが人に突撃す
るのはさすがにダメだと本能が訴えている。

脳裏にあるのはセツナの中に眠っていた、正確には押さえ込まれて
いた者による暴走やスバルたち百戦錬磨の戦士をなぎ倒していった
虐殺に近い戦い、そしてそんな力を封じ込め続けていったセツナの
強さと覚悟がミカゲの頭をひたすらループしていく。

もう一つ、今、いや、今日のみ有効な理由が一つあるのだ。

今日、ミカゲは誕生日になっているのだ。

だが、「このバカヤローッ！　ミカゲの誕生日だからミカゲを祝い
なさいって言うてんのおおおお！！！」と理性が崩壊しそんな台
詞を吐けないし、もし吐いたら自分が自分でなくなってしまうそう
な気がする。

今の状態ではセツナに会った瞬間に確実におかしくなる。

だが、会いたくてしかたないので体がすごいムズムズしてくる、身

悶えしてしまう。

だが、状況を打開するには会うしかない。

ミカゲはドアに耳を当てる。

ボソボソとした声で何かを話しているような感じだった。

起きてる。

それを知ると、この難を乗り越えるため、深呼吸してからおそるおそるドアを開いていく。

そこにはベッドから上半身を起こしていたセツナがいた。セツナの瞳には鋭さが消えて、かつてなく優しく見える。まるでふつつの一般人、無邪気な小学生のようだ。

「セツナ・・・もう、だいじょぶなの？」

（ありゃ？ ふつうに行けた）

安心するミカゲに対し、セツナは拳動不振に目を泳がせており、返答が帰ってこない。

「セツナ？」

「う、うん。大丈夫だよ」

（口調が優しい？）

「だよ？　なんか変だよ。　もっとクールな感じじゃないとおかし

いよ
「

「そ、そうだな。 変だったな」

なんだかまだ疲れているっぽい。

やはりタイミングを間違えてしまったようだ。

「ジュース、買ってくるね」

ミカゲはとりあえず部屋を出ると走り出した。

別室でジュースを二本買くと部屋に戻るために走り出し、ドアを引いた。

「セツ・・・ナ・・・」

寝ていた。

めったに安心した表情で眠らないセツナがぐっすり、隙だらけ。

ミカゲは小悪魔の笑みを浮かべてセツナの頬を、むぎゅー と引く張るが起きない。

「（寝ちゃった・・・もういいや、いろいろ今度で聞けば）」

そう思いながらドアをゆっくり開いて部屋を出るとドアを閉めようとした。

その時だった。

「少しよろしいでしょうか」

後ろから声が響いてきて、振り返ると黒コートに身を包んだ、まるで総理大臣などを守るボディガードのようなゴツい体の男が三人。

（みんなに被害をださせるわけには・・・）

ミカゲはドアを閉めてセツナを自分と敵から見えないようにすると、
「何か用があるの？」

「あなたには、ナイトメアニホン本部にきてもらいます」

ミカゲは男たちとどこかに歩いていってしまった。

第80話 一難去つてまた一難（後書き）

かんそうまつてまーす

第81話 実験による成果（前書き）

春休みキターッ！

投稿速度上昇していきますぜ。

第81話 実験による成果

「セツナのヤツ・・・返信がこねえなあ」

アラタはため息混じりにつぶやくとツカサの解析の手伝いを続ける。

「どうだ？ なにかでてきたか？」

ツカサは振り向いて首を横に振り、

「ダメだあ、セキュリティが嚴重でなかなか・・・」

その言葉にアラタは苦虫を噛み潰したような顔になる。

飛螺博士の残したプラン、“フルシンクロ”。

あのいけ透けないヤロー、グリード博士が再び掘り起こしてしまったプランにセツナが巻き込まれた可能性が高いのだ。

うずうずが止まらないのだ。

これを知ってから胸騒ぎがうるさくて止められなくなってしまって。

「アラタ」

「なんだ？」

「飛螺博士の初期研究プランをランドに解析してもらって。彼ならすぐにできるとおもう」

アラタは転送されたデータを確認するとランドの出す周波数を探し、座標を確かめる。

（飛螺博士、何を考えてたんだよ・・・今はランドに頼むしかない）

「シャドウ」

「わかっている」

座標を確認させると一気に空間転移した。

アラタは転移した場所を見渡してどこだかを確かめる。

そこは、宮殿？ 豪華なお屋敷？

今、アラタの立っている場所は廊下らしいが学校とかのものより一段階ほど大きな幅に踏むのではなく眺めるためにあるような真紅の絨毯^{じゅうたん}、壁に一定の感覚に掛けられた絵画がある。

（あんにやるーッ！ 勘違いでフレンたちに攻撃されてけがしたとか言っておきながらなんなんだよ！ このスーパージッチな場所ではない！）

アラタはランドの周波数のある部屋の前のドアを勢いよく開ける。

「ランドオ！ なんでこんなにリッチなところで住んでんだ！」

「なんだ？ 解析していた・・・おお、アラタ。だってここアリスの家だぜ、いろいろ世話になってんの」

アラタはこのハイパーな豪華な家にいる理由がわかった。

以前に逃走した時にスバルが生活費とかを援助してくれた友達らしい。

「まあいいや、とりあえずこのデータを解析してくれ」

アラタはデータを転送するとランドはハンターを操作し始める。

「おーっと、なんかいろいろできたな」

ハンターには文字の羅列がズラリと並んでいてアラタは読む気合いを喪失させるが頑張っ て読むことにした。

「なになに・・・飛螺博士のプランの結果、初号機による脳内を改造された人間、改造人間は初号機による命令を受託、行動を開始した」

ん？ とアラタは文章を読みとっていく。

たぶん改造人間に対して初号機は何かを命令したようだが、まず初号機とは何かという疑問が浮かび上がった。

個人的な予想では機械が人を操っているんじゃないかと思う。

「これにより別プランと融合させることにした。

それは時空間制御計画である。

時空間制御をする人物を指令者、これを『上位個体』と呼び、それをするクローン体を作りだし、『上位個体』に戦場に瞬時に転送させるなどより効率のよい行動をさせることにした。

今後はクローン体に時空間を制御させるための研究を続行させることとする」

そこまで言い切るとアラタは忌々しく自分を睨んだ。

「時空間って・・・」

「たぶん、俺だな」

いろいろ分かった。

命令をするヤツを『上位個体』と言うこと。

それは自分のようなクローン体であること。

あとは自分につながる、のだから便利な機能なんてあるとは思えない。

「まあいいや、おまえも解析手伝え」

「ちよーー」

文句を言わせるまえにツカサのところまで転移する。

テレビは『子供連続誘拐事件』とか言ってるし、やっぱり一般的なのが安心する。

アラタはツカサに結果を報告した。

「うーん、やっぱりダメだあ・・・ジクゾーパズルみたいにバラバラだよ」

疲労した様子でつぶやくツカサにも現状にも困りながらアラタは近くのイスに座る。

「やっぱりセツナに聞くしかねーな」

第81話 実験による成果（後書き）

感想まっています

第82話 自分としてあなたを（前書き）

データベースを更新しました

第82話 自分としてあなたを

ナイトメアニホン本部。

その大きな部屋は鉄の独特の色と薄暗い光が不気味さを強調するような作りになっている。

その中心で某王国の王女様ばりにさらわれてしまったミカゲはムスツとした表情で立っていた。

「セツナを返してっ」

だが、答えは帰ってこない。

これがしばらく続いているのでミカゲのイライラは募っていくばかりである。

この状態はあの後、断つたのだがセツナ（睡眠中）を人質に取られてしまい、あっさり捕まってしまうてからずっとこれである。

ついでに電波変換できないようにジャミングされているのではやため息しか出ない。

『聞こえているか？』

突然、部屋に男声が響いてきた。

「何？」

『君の力を使って協力してほしい』

「私の？」

『ああ、君の体に宿る星の民の力でな』

「私には力なんて無いし、仮にあっても絶対協力なんてしないよ」

すると、向こう側はため息をついてきた。

『わかってますよ。でも、協力せざる負えない状況でも、言えますか？』

ミカゲは首を傾げる。

何をされても協力なんてまっぴらだからそんな状況なんて想像がつかない。

『君の言う、セツナが無事でいられるかな？』

その言葉にミカゲの心臓が跳ね上がる。

『それにセツナには、負の遺産や完全記憶能力など、価値の塊だよ。そうだね、簡単に言えば彼は魔王だ』

「セツナは一人の子供だよ！ 魔王なんて言い方はやめて！」

その言葉をあざ笑い、

『どちらでもいい、君だって価値がある。とにかく、こちらの命令を聞けば、彼は助かる』

一人の少女を生け贄に魔王を助けるのか。

一人の少女として一人の少年を助けるのか。

答えは、決まっている。

一人の少女として、一人の少年を。

セツナは小さな牢屋のような場所に置かれたベッドに座っていた。

『星河スバルたちを、殺せ。　しない場合はあなたと、そしてミカゲは死ぬことになる』

するとセツナは平然と、

「ああ、いいだろう」

と答える。

『健闘を祈っているよ』

そついうと通信の電源を切断してきた。

「セツナ」

ハンターから出てきたのは、シャルだ。

「わかっているよ、自分は捨て駒の一つと思っているんだろう」

皮肉な笑みを浮かべて、シャルを見るとシャルは真剣な口調でこう言った。

「どこまで記憶が消えているんですか？」

その言葉にセツナの目が大きく見開かれる。

「どうしてわかった？」

「ただ相棒やっていると
思っているんですか？
わからないでしょうが」

「そうだな、ミカゲに会ってしばらくたってからだ」

セツナはシャルから目をそらして苦笑する。

「どうせ、死ぬだろうしな。守るべきものを
守れずに生き残っても、魂が死ぬんだ。
もう、今の自分では一つの痛みだけが
生きている証になったから。だけど、僕は
彼女の手の温もりを求めているのかも
な、生きている証として」

乾いた、ぎこちない作られた笑顔でつぶやいた。

「僕は彼女がくれた、セツナとして僕は彼女を助ける」

第83話 第三章 この世界を左右する少女編（前書き）

セツナの秘密編はとりあえず終了として次の章にいかせてもらいます。

なんか中途半端なのは気にしない。

だいじょーぶ、そのうち解決する！ はず！

第83話 第三章 この世界を左右する少女編

スバル、ゴン太、ジャックは病室でエグゼに負の遺産について話していた。

「あれは200年前のとある戦いから生み出されていた物の総称だよ」

200年前、光熱斗や伊集院炎山、エグゼが活躍した時代。

エグゼがくれたエグゼマークも負の遺産なのだろうか、とスバルは思いながらも聞き続ける。

「アラタの力を増幅させたスピリットドライブやミカゲの精霊石も200年前の物だから負の遺産だよ。種類は未知数で危険なものだつてある」

「なら、星の民の力つて何なんだよ？」

ジャックの質問にエグゼはしばらく黙ったが、やがて口を開いた。

「それは――」

エグゼが言い欠けた瞬間、病室のドアが誰かに勢いよく開けられた。

「ここは病室だぜ、静かにしろよな。 暁さん」

だが暁は冷静さを失ったように息を荒くしており、気持ちも落ち着きがない様子だ。

「いないんだ！ セツナとミカゲの二人が！」

その言葉にみんなが跳ね上がり、暁に詳しい説明を求めると暁は、

「ついさつき帰ってきて、セツナとミカゲのようすをのぞきに行ったらいないんだよ！ トイレとかそういうことじゃなくてこの建物にまずいないんだ！」

あきらかにおかしな内容だ。

セツナは日常生活を送ることも難しい状態であり、周囲に出かけるにも困難だ。

ミカゲだって体はボロボロ、そこらへんをウロウロしようとするほど体力は残っていないはずだ。

「いつまでいた、わかるか？」

「昨日の朝はいた。でもそこからは・・・」

スバルはあの二人へ視線を向けておくべきだった、と後悔するが今更なことだ。

「厄介な事になりそうだよ・・・何をしてくるのかわからないけど、悪い事しかない」

エグゼは唇を噛み、顔をうつむかせたがすぐに顔を上げ、

「残留電波でもなんでもいい、手がかりを見つけて救出しよう」

「当然！」

ジャックはニヤリと笑い、ゴン太は右手をグルグルと回していく。スバルも松葉杖を掴んで腰に力を加えて立ち上がるうとした瞬間、

「おまえは休んでろ！」

と罵倒され、突き倒れそうになったがスバルは立ち上がった。

覚悟なんてとづくに決まっている、と顔に書いてあったのでエグゼは頭をぼりぼりと搔いたのでため息をついた。

「ゴン太、ジャック、手助けは頼むよ」

あきれ気味にエグゼが言うと二人は胸を反らして叩いた。

「水を差すようで悪いけど、残留電波の痕跡が無いぞ」

暁のその言葉にお口を大きく開けて絶句する3人。

その静寂を突き破るようにスバルのハンターからメールが入ってきた。

相手は不明。

メールの内容は飾り気もなく業務事項の連絡のような簡潔な内容だった。

「二人はナイトメアニホン本部に誘拐された。 ドリームアイランドの地下、そこから本部へ直接行ける」

スバルが内容を苦々しく告げるとみんなの表情が険しくなっていく。

「畏って可能性もあるな・・・」

「それでも手がかりはこれだけだよ。　僕は行くよ」

スバルが松葉杖を握りしめ、ドアに向かうところをジャックがのしかかり、スバルがビターン！　と倒れる。

「俺もいくぜ！」

「いぎっ……まだ怪我が……」

二人の上に追い打ちをかけるようにゴン太がのしかかった。もちろん二人はぺしゃんこだ。

「俺もだぜ！」

「んなことはどうでもいいーッ！　重いー！」

「めり込む……地面に……ガクッ」

スバルが握っていた松葉杖から力が抜けていき、スバルが地面に体を預けた。

「す、スバルーっ！」

トドメを刺したゴン太が揺り動かすとなんとか起き上がり、スバルが杖を支えに起きあがった。

「いくよ」

スバル、ゴン太、ジャックは電波変換するとドリームアイランドに

飛び出した。

第83話 第三章 この世界を左右する少女編（後書き）

感想まっす

第84話 瞳に宿る答え

スバル、ゴン太、ジャックはドリームアイランドに到着した。

風に運ばれてくる潮の香りと公園に咲き誇る花たちの香りが漂い、スバルは改めてここは良い場所だと再認識する。

「地下ついてもここにあつたっけ？」

ジャックのつぶやきにゴン太も同意する。

スバルは記憶を探るがきれいな公園と汚いゴミ処理場しかないと告げる。

「おいおい、んなことで大丈夫かよ・・・頼りにしてたのによお」

ジャックがため息をつく中、一人、不敵な笑いを漏らしているヤツがいた。

「ふふふ・・・ライザー刑事。俺はわかったぜ！」

その声にライザー刑事、もといスバルとゴン太とジャックは自信満々に胸を反らしたウォーロックに振り向いた。

「ウォーロック、わかるの？」

「ああ」

自信に満ち溢れたウォーロックにみんなの期待が嫌でも集まってい

く。

「刑事・・・ここでは大吾が乗っていた宇宙船の一部だったかな、
なにかが封印されていた場所があるじゃねえか！」

ビシッ！ と右手はライザー刑事、ではなくスバルに、左手はゴミ
処理場に向けられた。

「わかったよ！ あの世界だね！」

スバルはゴン太とジャックを連れてゴミ処理場の奥、その山のよ
うに積まれたジャンクを通り抜け、綺麗にスクラップを押し退けて
あり、そこから地下への入り口へ案内する。

ゴン太やジャックは周囲を見渡すと、

「なんで地下に、こんな特別に作ったような場所があるんだよ」

と呆れ気味につぶやき、足場を踏みつけるような動きで移動してい
く。

たしかにここは上のゴミの集まりより絶対と宣言できるほど綺麗で
あり、呆れるような場所に作られているが隠すためらしいので細か
いことは言わないで奥に突き進んでいく。

「星河スバル、だな」

まるで質問をしているような、聞いてくるかのような口調で言った
のは、セツナだ。

彼は中央に置かれた装置にもたれるように体を預けていた。

目も半開きであり、肉体的状態はよろしくないと誰もが思うほど、今のセツナは弱りきっていた。

「おまえたちはここで死んでもらう」

「な、何言ってるの？ 操られているの？」

するとセツナは皮肉そうな笑みを浮かべて、

「僕は操られてなどいない。僕は僕の意志でここに立っている」と言い、背中を向ける。

「セツナ、バカなことはやめろ！」

「バカなこと、か・・・そうだろうな。僕などナイトメアでは捨て駒の一つにすぎないだろう」

「なんで・・・そこまで知ったのに・・・」

セツナは中央に置かれた装置の操作卓を叩いて、やがてスバルたちに振り向いた。

「電波変換した状態でこの装置に触れれば強制的に転送されるようになっていて。これは僕の道なんだ・・・僕と戦え」

セツナはトンファーをカプセルから取り出すと握りしめた。剣ではなく、トンファーを。

その小さな体にある小さくうつすら開いた蒼黒の瞳の中に、スバルは答えを見つけた気がして、言葉を失った。

「みんな、僕一人で戦わせて」

みんなを制して、スバルは一步前に踏み出した。

「いくぞ、スバル！」

セツナがトンファーを低く構えて走り出した。

『はは、そうですか。 覚悟は決まりましたか』

自分のすべてを否定されているような笑いに静かに怒りながらも無言で立っている。

『あなたの星の民の能力は二つあるらしいです。 一つは回復関係、二つは開閉する力だそうです。 “開閉する力”を使ってあなたの心を閉じてください』

「心を閉じる？」

ミカゲにはそれがどんな状態なのかよくわからない事だ。

ミカゲは一生懸命考えたが答えが見つからないので首を傾げる。

『はい、あなたの身体に具体的な影響はでないでしょう。 これさえやればあなたはセツナを連れて帰ってもいいですよ』

その言葉にミカゲは眉をひそめるがそんな事を言われたらやるしかない。

ミカゲは息を吸い込み、吐き出すと目を閉じて、叫んだ。

「星の民の名において命ずる。 力を解放せよ！」

次の瞬間、ミカゲの体が地面に崩れた。

『ふふ、彼女にあの装置を』

その言葉に答えるように黒いコートの男が頭にヘルメットのような形状だが電極やコードがたくさんく付いた装置を装着させる。

しばらくして彼女の瞳が開かれた。
だが、いつもの活発そうな瞳ではなく、
何かが抜けて行ったように
力無く虚空を睨んでいた。

第84話 瞳に宿る答え（後書き）

感想待っています

第85話 蒼黒の追憶

「ぐはっ・・・ッ」

スバルの攻撃で宙に吹き飛ばされたセツナは辛うじて着地したがすぐに片膝が折れ、地面に崩れかけるところをトンファーを杖代わりにどうにか体制を保った。

「セツナ、もう止めよう・・・勝負はもう決まっているよ」

スバルが告げた事は誰が見てもあきらかだった。

スバルの体はセツナの攻撃では傷一つつけられていない。

対してセツナは元々大ダメージを受けた身に手加減されている一撃でも致命的だった。

こんなに無様な姿のセツナを見るのは初めてだった。

「今の僕・・・ハアッ・・・には、もう・・・ハア」

もはや立ち上がることにすら困難な状態のセツナがふらふらと、だが、確実に立ち上がった。

その時だった。

上のほうから爆発音が地下に響きわたり、焼け焦げた壁の一部が落ちてきた。

「な、なんだ？」

ジャックが上を見て叫ぶとセツナが奥歯を噛んで、

「まずい・・・ハッ・・・周囲は海だ、海水が流れ込んで溺死する」
忌々しくつぶやいたその言葉にスバルはギョツとする。

「みんな！ 転送するんだ！」

ゴン太とジャックが装置に走り、電波変換して触れると強制的に転移されて消えた。

スバルも走り出すがふと足を止め、セツナに振り向いた。

「セツナもこっー」

その言葉の続きを言うことができなかった。

なぜならセツナが走り込んでトンファーをスバルの腹辺りに押し込むようにして当て、そのまま押し倒すように自分の体ごと押し飛ばした。

その一撃は今回の戦闘の中では一番強いだろう、だが、電波変換したスバルに大きなダメージは与えられないのはセツナが一番良くわかっていたはずだ。

セツナの狙いはそこではない。

体ごと押されたスバルはそのまま一直線に突っ込んでいく。

ナイトメアニホン本部に強制的に転移させれる中央に置かれた装置に向かつて。

その触れる瞬間、セツナがスバルの耳元でなにかをつぶやくとスバルが強制的に転移されていった。

そのまま装置に激突し、そのまま寄りかかるように身を預けた。

「これでいい」

「本当にそうですか？　ぼっちゃま」

その声に連動したようにシャルが現れる。

「ぼっちゃんの力を使えば、溺死することもなく本部に戻れますよ」

セツナはうつすらと開いた瞳で自分の右手を見る。

自分の能力を使えば、助かる。

だがセツナは皮肉な笑みを漏らして首を小さく横に振る。

「もういいんだ・・・僕には存在価値はない。このまま、死なせてくれ」

「ぼっちゃん・・・」

「おまえはここから出る」

「私はもう覚悟はできてますよ。 相棒なんですから最後まで一緒にいさせてくださいよ」

二人は力無く笑いだした。

「なぜ・・・そこまでミカゲを？」

するとセツナは瞳を閉じて、

「わからない。 だけど、ナイトメアで一人だった僕はあいつと出会って過ごしていくうちに話すことの楽しさを感じたんだと思う。

あいつは太陽のような存在だった、その光を出させるためなら影として僕は彼女を守る、そう誓った。 そこまでは覚えているからだと思う」

シャルはそこまで聞くと黙ってしまった。

「いつもすまないな、シャル。 そろそろ来る」

セツナがつぶやいたと同時に海水が滝のように流れ込み、 あつと言う間にセツナを飲み込んだ。

（たとえ、何度同じ選択を迫られていても、こうしていたと僕はこの選択をしたと思う。 なんてだろうか・・・脳天気でなれなれしくていい加減なヤツは大嫌いだったのにな・・・いや、嫌いだ！）

海水に揉まれながら、セツナはすがすがしく思った。

最後だからこそ、思ったと思う。

（これでいいんだろ、ミカゲ。いつもすまない、シャル。後は
任せたぞ、スバル、だったかな）

やっぱり、これだけと思う。

僕は脳天気でなれなれしくていい加減なヤツは大嫌いだ。

第85話 蒼黒の追憶（後書き）

どうして気に入っているキャラクターを殺してしまうのかな!?

はあ・・・なんでだあッ!

でもなんとなくきれいに決めれたかな?

うう、やっぱりセツナには死なないでほしかった・・・

第86話 怒りの第四電波変換

「せつなああああああああーッッッ!!!」

スバルが叫んだ時には、すでにナイトメアニホン本部の大きな部屋の中だった。

驚いたゴン太とジャックだが、視線はすぐに別の方向に向けられた。

「ミカゲ、いるぜ」

ジャックが指差す方向には特殊なヘルメットのような装置を頭に装着されているミカゲがいた。

スバルは脳の片隅にどうにかセツナへの感情を押し出すとミカゲに近づいていく。

『もう手遅れですよ』

突如、どこからか声が出てきた。

「なんだ？」

だが、答えはかえってこないどころかなんか別の、スバルの二倍近い巨大な鎧のようなものが二人、お出迎えをしてくださいました。

『もはや無駄だ。彼女は心を閉じている。それに君は彼女を助けないしここで死ぬんだよ。最新モデル“XVG23”通称、電波アーマーに』

スバルは怒りで震える右腕を左腕で握りしめ、話を続ける。

「ミカゲになにをしたっ！」

だが相手は平然と、

『彼女にセツナの命がほしければ心を閉ざせ、と言ったらすぐに聞いてくれて。そしてそのまま感情が無くなり、そうだねえ……ただ命令を聞く道具になった。セツナは今ごろ水の中だろうなあ』と告げてきた。

さらに、

『まあ彼女は命令を聞くだけの道具になり、計画どおりに開いてくれたよ……セツナも時間稼ぎになってくれたよ……あとは計画の……』

「その計画は“フルシンクロ”か!？」

唐突に現れたのは、アラタだ。

おそらく、能力で転移したのだろう。

『違う。私のは別だ。それはグリード博士が再会したプランであるからな……』

「そんなことは、どうでもいい……でも、セツナもミカゲも道具じゃないッ！」

だが、スバルの必死の叫びも無駄に終わるかのようにあざ笑った。

『知るか、いけ。電波アーマー!』

電波アーマーが轟音を響かせ、動き出した。

「知るかなんていわせるかあああああーッッッ！
第四電波変換！ 星河スバル！ おんえあああああああ！」

その言葉にアラタがギョツとする。

「よせッ！」

アラタの制止も空しくスバルが怒りの第四電波変換を成功させてしまった。

灼熱で漆黒の炎がロックマンの周囲に螺旋のような状態で、渦巻き、彼に悪魔のような翼が生えた。

「ダークフェニックスモードオオオオオオオオ！！！」

叫んだと同時に、背中の炎が爆発的に逆噴射し、消えた。

「がっ・・・？」

気がついた時にはすでにスバルの腕が電波アーマーの腹辺りを貫いていた。

スバルの手から血が伝っていき、地面に垂れていく。

敵が倒れると同時にスバルはもう一人の敵に灼熱の炎を浴びせかける。

アーマーからかすかに悲鳴が聞こえたが怒りに捕らわれたスバルに

は聞こえない。

それどころか仲間すら見えていない。

仲間ごと漆黒の炎が焦がしていく。

「ちよっ！ やっぱ制御できてないのかよお！」

炎の回避しながら叫ぶアラタ。

炎の一部がゴン太に襲いかかるがジャックがそこに割り込んだ。

「星の民の名において命ずる。力を解放せよッ！」

ジャックが叫んだと同時に炎がすべて停止する。

「俺は“炎を操る力”だけどこれじゃそんなもたない！ アラタ、ミカゲを連れて転移するんだ！」

アラタはうなずくと走り出し、ミカゲを引っ張りスバル、ゴン太、ジャックと一緒に転移した。

アラタはWAXAに転移すると、スバルを沈めるためにジャックに合図を送ると、

「ゴン太、頭を思いっきり叩いて気絶させろ！」

ジャックが額から汗を垂らしながら叫ぶとゴン太はスバルの後ろに走り出し、拳を叩き込んで気絶させた。

「ふう、俺は用事があるから行くぜ」

アラタは急いだ様子で転移していった。

スバルは起きると急いでミカゲを探し、病室で発見した。

「ミカゲは！？」

彼女の周りにはヨイリー博士とゴン太とジャックが囲んでいた。
当の彼女はぼんやりと空を見ていた。

「だめね、彼女は心を閉ざしてあらゆる感情が失われているわ。」

ただ命令を聞くようになってるけど・・・星の民の力で自らの心を開いて」

するとミカゲは無表情に力を発動するといつもの活発な瞳が戻ってきた。

「セツナ、セツナは!？」

すぐにミカゲはスバルの肩を揺さぶるがスバルは顔を背けてしまう。

その事から、答えを知ってしまったのだろう。

悲しげに、答えを否定するように首を振り、涙を流して小さく嗚咽を漏らした。

第86話 怒りの第四電波変換（後書き）

感想まっています

第87話 別世界と残された剣

「マジかよ・・・セツナが・・・それにミカゲの星の民の能力が発動したんだな！」

ベッドから飛び出しそうな口調でリオンが叫ぶとスバルは小さくうなずいた。

「ねえ、君たちはナイトメアではないんですよ。君たちは何者なの？」

奥歯を噛んでいたリオンはスバルの言葉に黙り込んだ、がすぐに口を開いて、

「こうなったら協力してもらうぜえ・・・たしかに俺たちはナイトメアに所属していねえ」

「なら別の組織に入っているの？」

「ああ、“ゼウス”と呼ばれている宗教団体だ」

その言葉にスバルは眉をひそめる。

まず宗教団体なんて歴史ぐらいで聞いたぐらいで大した知識もないが全く知らない名前だ。

だがリオンは一般知識だといわんばかりの口調でこう続けた。

「まあ知らないほうがふつうだ。だって別世界だもん」

スバルの思考が少し停止したがすぐに急速に加速していく。

「ちょっとまって！ 何その平然な口調はあーッ！」

全力で食い下がるスバルを変な人を見る目で睨み、

「ここ病院、ここにけが人」

と注意して赤と青の箱を準備する。

「平行世界、ってわかるか？」

「もしもの数だけ世界があるとか、こことは別の独立した世界があるとか？」

「今のところ後者が正解だな。 もう一つ世界があるんだ」リオンは赤の世界を指でつつつきながら教える。

「で、俺様やフレンはおまえらとは別の世界からこの世界に介入したんだよ。 ある目的でな」

「待って、どうやって介入したの？ 目的は？」

焦りながらしゃべるスバルにリオンは自分のペースに巻き込んで話していく。

「介入するにもそんなドアがあつて失礼しまーす、とか言つて入れる訳じゃねえ。　まず壁みたいなものが世界にある」

リオンは赤と青の二つの箱の間、二つの箱を隔てるように2枚ほど下敷きを立てた。

「で、この壁が、たまゝに穴があくんでその隙に通れば別世界に介入完了。　で、目的な」

スバルは唾を飲み、リオンの答えを待つ。

「この壁の間には何かがあるらしいんだけどお・・・それをミカゲの力を使って壁を強引に開いてそれを取りたいらしいけど、それをとられると世界のバランスが崩れておまえの世界は崩壊」

リオンは青の箱をゴミ箱に投げ捨てる。

「ついでにバランス崩壊の影響でこつちの世界までとばっちり」

下敷きを赤の箱まで押し倒すように倒してそのまま赤の箱をゴミ箱に投げ捨てた。

「つまり、そのとばっちりを防ぐために来たってこと？」

リオンは、そういうこと、とうなずいた。

「その世界崩壊はいつ？」

「ここにミカゲがいるかぎりは今から12月までだ」

スバルはカレンダーに振り向いた。
今は十月の中場、時間は少ない。

「だからミカゲとミソラちゃん・・・待って、ミソラちゃん的能力は？」

「あれは活性化、あいつがいてもそこまで時間は変化しないだろう、規模がでかい。だがすでにミカゲの力で開くように働きかけたなら直接ミカゲの力で止めるぐらいしか止められないぜい」

だから可能性を潰すために保護しようとしていたのか、とスバルは納得した。

「だが発動されたしその開いた場所がわからない。だから12月までにその情報を集めるしかないぜい」

へらへらと話を続けるリオンにため息をつくがふと疑問が浮かんだ。

「ねえ、なんでセツナを知ってるの？」

するとリオンは頭を掻いて、

「本当かは知らないが剣と剣術とか、いろんなところが同じだもんでなあ・・・だから突然消えたカイルだと・・・」
と告げた。

と、いうことはセツナは別世界の人間だった？

だとしても六歳、フレンたちはいったいどう解釈したんだ？

「セツナと年齢が離れすぎてない？」

「だよなあ・・・俺様も彼も五歳の時に消えて、それから俺様は十二歳、どうなっただかわかんけど仮面越しでもはっきりとカイルかと思わされるし・・・」

いろんな謎は深まるばかりだった。

ミカゲはセツナの病室に来ていた。

「セツナあ・・・」

涙声でつぶやいたが彼の返答は帰ってくることはない。
わかっている。

それでも、そうしてないといられなかった。

ふとミカゲの視界に飛び込んできた物は、セツナの持ち物だ。

ポケットに入るぐらいの小さな箱が二つあり、その中にカプセルがあり、カプセルには達筆で、裁縫道具、サバイバルキットなどペンで書いてあった。

だが、ひとつだけ書いてないものがあった。

変だと思い、カプセルを開けてみる。

すると、ミカゲの小さな手の平に宝石が埋め込まれた短剣、セツナの武器があった。

『剣は、大切なものを守る時にしか使わない』

幻聴だろうか、たしかに聞こえた気がした。

もういないとわかっていても、希望にすがりついてしまう。

ミカゲは自分の感情を胸にしまうと剣が入っているカプセルを自分のポケットに入れて、部屋を出て行った。

第88話 上位個体の正体？

その後、暁さんがWAXAの隊員を総動員してセツナの失踪した周囲を模索したが彼の姿どころか手がかり一つなかった。

まだ、ミカゲや隊員たちは探しているが、もう駄目だということはもはやあきらかであった。

だって、すでに十一月、セツナ失踪から数週間たっている。

ミカゲは絶対に生きていると言い張っている、だが、彼女にもわかっていないはずだ。

だけど、大切な人をわずか七歳で失ったのだ。

心にはぽっかりと穴が出来、それを埋めようと足掻く姿は昔のスバル、自分自身を見ているようで、見ていられなかった。

フレン、リオンはアラタたちのところに来て作戦会議を開いていた。

「やれやれ、これからどうするんですか？」

どうする、といわれても結局何も手がかりのないフレンたちはアラタに望みを託しているのだ。

つい先日までずっと寝ていたフレンに対して文句を言っても始まらないのだ、しかたない。

「こっちはフルシンクロの事しか調べてねえしなあ・・・」

「フルシンクロオ？ 聞いたことあるな」

リオンがつぶやくとアラタがものすごい眼差しで睨んできたのでそれを話す。

「こっちのスパイが入手した情報だけどお、その『上位個体』を

奪取したって情報が入った後にそのスパイとの連絡が途絶えたもので印象的であらう」

「ほかはねえのか？」

アラタが迫ってきたので両手で押し返し、手を顎に当てて考える。

「あー、そういえば・・・その『上位個体』は電波を無意識に遮断したり、特殊な力を使えたりするとか。たしかそれは“クロウ”ってネームで呼ばれてたかな」

その言葉にみんなが反応する。

「クロウって・・・俺たちの仲間の中にそんな名前のヤツがいるじゃない！」

ランドが叫ぶとアラタがシャドウにクロウのいる座標を確認するが、
「・・・駄目だ。彼の出している周波数がまったくわからない」と断念してしまった。

アラタも自分自身で探すかクロウを発見できなかった。

仮説だが、クロウは無意識に自分の電波や周波数を遮断していて、他人では感知できない、そして彼は自分の電波を出しているので異変に気づいていないのではないか。

アラタは周囲にいた人間を脳内で検索していくとふと一人の少年が頭をよぎった。

「くっ・・・スバル、スバルならクロウについて何か知っているだ

る？ あいつなら・・・」

「いくなら私たちもいきますよ」

そう言って立ち上がったのは、フレンとリオンだ。

「そっだな・・・みんな、WAXAに行きたいヤツは準備しろ」

「あと一ヶ月もある・・・待ちきれん！ まだ小娘の居場所はわからんのかあ！」

暗く、狭い部屋にいる男はモニター越しに部下を怒鳴りつけていた。

「申し訳ございません・・・あと少しおま・・・何？」

「どうした？」

「例の小娘はコダマタウンからWAXAに向かったとの情報が入りました！」

部下のその言葉を聞くと男はしばらく考え、

「小娘とWAXA、どちらも良い獲物。最新鋭の電波アーマーを率いて攻撃をしかける！最優先は小娘の捕獲、WAXAはその次でかまわん！」

部下が、了解、と返事を返すとドタバタと音がモニターから聞こえてきたので通信を切断した。

「おやおやあ。　　ずいぶん大胆な作戦にですな」

不意に声がしたのでそれに振り返るとグリードが立っていた。

「フルシンクロは進んでいるのか？」

「もう『上位個体』もできましたよ。　　もうすぐ本格的に導入されますよ」

第89話 突きつけられた刃

「スバル、やっぱり第四電波変換は制御しきれないのか・・・」

エグゼは奥歯を噛んで考え事をしているようだった。

今までみたいにどうにかなった、とまったく言えないぐらいスバルは第四電波変換を制御できていなかった。

RPGみたいにレベルだけ上げれば強くなったり新しい技ができたようなデタラメなはずがない。

現実では本当に越えられるかわからない壁を越えようと努力するしかないのだ。

ましてや絶対できるという確証はどこにもないのだから。

「やはり闇の感情が制御できないんだよ」

口で言われてもわかった、なんて言えるほど甘くて簡単な世界ではない。

ハア、とスバルはため息をついて、タオルでも取りに家に電波変換してさっさと行く。

電波変換を変なことに使うな！ と叫ぶウォーロックを軽くスルーしてドアを開け、タオルを取ってエグゼのところにさっさと戻るためもう一度ドアを開ける。

「スバル・・・」

不意に聞こえてきた声。

ズン、といきなり心臓に衝撃を与えられたような、女の子の声。

その子はスバルの家の目の前に立っていた。

「どうしたの・・・ミカゲ？」

ミカゲの表情はにこやかではなく、だが、険悪な表情でもない。
どこか、気持ちが悪くどこかに飛んでいるような、そんな表情だ。

「聞いたよ・・・セツナの死に際、あなたはそこにいたんだよね・・・」

セツナの事なんだ。

スバルの表情が悔しさでいっぱいになってしまふ。

「・・・そうだよ」

その言葉を聞いたミカゲの華奢な手が震えた。
いろんな感情がごちゃまぜになったような、もうどうしようもないようだった。

「なんで、助けられなかったの？　だって・・・スバルはヒーロー
なんですよ！？」

おもわず、スバルは痛いほど、爪が食い込むほど拳を握りしめた。

あの時。

どうにもできなかったあの時が。
傷だらけで、自分を助けておいて。

セツナは、自分のすべてを背負っていても、他人を庇うだけ庇っておいて、

絶対に守ってもらおうとした覚えは一回もなかった。

誰もセツナの、助けてくれ、なんて声を聞いたところは、最後までなかった。

「ねえ！ スバルッ！」

そんな後悔でいっぱいなスバルを現実世界に引きずり戻したのは、ミカゲの怒鳴り声と、

ミカゲの手に握られた、太陽の光に輝いた10センチぐらいの宝刀だった。

セツナの持っていた、宝刀をスバルに近づけて、

「なんで助けてくれなかったの!？」

さらに宝刀を首元に近づけていく。

だが、スバルは一步も引かないでその場でミカゲを見て、言った。

「殺すなら、構わないよ」

ミカゲは大きく息を吸い込むと指先に力を込め、宝刀を、振った。

第90話 涙の向こう

「・・・わりー。こっち側の都合でニホンにいけないわぁ。まーそっただけでいってこい」

フレンとリオンは部屋を飛び出すと電波変換していった。

「んじゃあ、俺だけかよ・・・よし、ツカサ。ひさびさにみんなに会いに行くか」

アラタはツカサの肩をぼんぽん叩くとツカサはうなずいた。

「ランド、おまえはクロウについて調べると同時にどこにいるか捜してくれ」

ランドはダルそうに返事をする。とハンターをイジリ始めていく。

どいつもこいつも謎だらけ。

本当にフルシンクロなんて空想みたいなプランにみんなを振り回していいだろうか？

そんな事を思いながら、ひさびさのスバルたちの再会を楽しもうと気持ちを切り替えた。

ミカゲの手から宝刀が滑り落ち、地面に、カラン、と音を立ててその場に転がった。

「・・・うう」

ミカゲはその後、凍りついたように動かなくなった。

かすかに動いている物、それは何かとてつもない失敗をしたように両目を見開いて、焦点が合わず、ひたすらブレるように動く瞳と何かをつぶやこうと必死に動こうと足掻く唇。

「わかってた・・・こんなことをしても、セツナは帰ってこないって・・・もう、いないんだよね・・・また、いつもみたいに甘いもの食べてたり、ミカゲのピンチの時でも都合のいいヒーローみたいに現れて、助けてくれないんだよね・・・わかってる」

ミカゲの手から宝刀が滑り落ち、地面に、カラン、と音を立ててその場に転がった。

「・・・うう」

ミカゲはその後、凍りついたように動かなくなった。

かすかに動いている物、それは何かとてつもない失敗をしたように両目を見開いて、焦点が合わず、ひたすらブレるように動く瞳と何かをつぶやこうと必死に動こうと足掻く唇。

「わかってた・・・こんなことをしても、セツナは帰ってこないって・・・もう、いないんだよね・・・また、いつもみたいに甘いもの食べてたり、ミカゲのピンチの時でも都合のいいヒーローみたいに現れて、助けてくれないんだよね・・・わかってる」

今にも消えてしまいそうな、そんな小さな、小さすぎる涙声だった。

嗚咽を漏らすまいと必死に唇を閉ざそうとするがむずむずと動きだし、それでも幼稚園児みたいな大声で泣き出さないように必死に耐えた。

それと同時に目元には大玉の涙が溢れ、頬を伝ってセツナの残した宝刀の刀身にこぼれ落ちていく。

「・・・ごめん」

体には傷一つつけられていないスバルは思わず口にしてしまった。

「僕がもっと強くなって、もう二度と、誰も失わないぐらいに・・・セツナの代わりになれるぐらいに・・・」

「セツナの代わりなんて言わないで！ セツナは一人だけなんだよ！」

殺意の込められた怒鳴り声を浴びせられたがスバルは揺らぐことはなかった。

だって、地球と言う巨大な物を何度も何度も救っておきながら、たった一人の少年を助けられず、たった一人の少女を救えない自分の力の無力感を呪って。

これで素直に諦めきれはるはずがない。

その時、唐突に電話音が響いてきた。

『暁だ！ 今すぐWAXAにこい！ ナイトメアが攻めてきた！』

スバルはすぐに電話を切ると電波変換した。

「ミカゲもいく！」

ミカゲは服で涙を拭き取ると電波変換し、コスモウェーブに向かう。

（もう誰も失わない。絶対に！）

そう心に誓ってスバルはWAXAに向かって走り出した。

第91話 漆黒の戦士（前書き）

投稿遅れてしまいました、すみません

第91話 漆黒の戦士

スバルとミカゲがWAXAについた時にはすでに戦闘が始まっていた。

暁を始めとするサテラポリス隊員、ゴン太にジャックも戦闘に参加しており、敵は電波スーツを装着した疑似電波人間たちが50人。戦況は良くも悪くもない、敵たちの増援の様子もなさそうだ。

敵側もWAXAを攻め落とすにしては妙に少ないのだが、おそらくみんなが戦って敵を減らしたと思う。

スバルは敵戦力のだ真ん中に突撃するとバトルカード、エドギリブレードを2枚使ってそれを両手に装備すると迫りくる敵たちを切り倒していく。

もちろん殺さない程度だ。

電波スーツはウィザードを持たない、あるいはウィザードとの周波数が合わないかなどの理由から特別に“スーツに触れた物を電波に変換できる”物であり、中身は人間なのだ。

敵をどんどん倒していく。

半分以下になった敵たちは実力差のあまり、後さずりをして距離を取る。剣を捨てると左手を構え、

「ロックバスターー」

直後、何か、何処からか、爆撃でスバルの体が吹っ飛ばされていく。

「なんだ!？」

ウォーロックが叫び、周囲を見渡すとそこには以前、見たような人型の全身を鎧で包んだような機体、電波アーマーが立っていた。

ただし、以前とは違い、3メートルほどではなく、50メートル軽く越えている巨体がグオングオンとうるさく機動音が響かせていた。

「ターゲット、カンチ。モクテキヲスイコウスル」

絶句する僕たちを尻目に機体は右手をスバルたちに向ける。

次の瞬間、エネルギーが指先に集束し、光の柱が襲いかかってきた。それは直径1メートルほどのレーザー光線のようにその攻撃対象となったスバルは直感的に生命の危機を感じ取った。

「だ、第三電波変換！ 星河スバル オンエア！ ダイヤモンドダストモード！」

スバルは迫り来る光線に手を向けると分厚い氷の壁を生成して受け止めた。
が。

「スバル！ 横に飛び出せ！」

ウォーロックが叫んだ時には分厚かった氷の壁は紙つぺらのように薄く脆く変わり果て、それも光線で消えていった。

勢いはとどまらないまま、スバルに迫るが、ギリギリで回避した。おそらく一瞬でも反応が遅れていたら黒こげ確実だ。

（熱・・・光線？ とりあえず氷は相性が悪い・・・）

スバルはスターダストオーバードライブに換えると巨大電波アーマーに向かって走り出した。

指先から熱光線を発射するがあれだけの威力、発射後のタイムラグの間にできるだけ近づきたい。

だが、再び指先から熱光線が発射される。

スバルは体から放出された粒子を集め、氷の壁を作ってそれを受け止める。

もちろん1秒もしないうちに気体になっていくが、わずかな時間で攻撃範囲外に飛び出すと再び走り出す。

（おそらく、右手の熱光線のタイムラグは約2秒！）

スバルは右手に粒子を収束させるとそれを風に変化させる。

それが球状になって高速回転のようになり、轟音を響かせる。

狙いはあの巨体を支えている右足。

そして体重が多く掛かり、構造状、脆い足首。

巨大電波アーマーが再び自分に向けて照準を定め始めるその時には

スバルは足首にたどり着いていた。

それを力一杯、足首に叩きつけた。

「な・・・ッ!？」

予想外な事が起こった。

風はたしかに直撃した。

だが、炸裂したはずの攻撃ではビクともしなかった。

そして反撃。

ダメージのない右足でスバルを蹴り飛ばす。

まるでサッカーボールを使ってシュートでもするかのように。

スバルは綺麗な弧を描いて地面に激突。

「がッ、は・・・」

痛みに悶えるスバルだが、このデカブツを止めないと自分たちの大切なものが、失われてしまう。

それを考えると不思議と体が起きあがる。

だが、今の自分の最良では、相手に通用しない。

（どうする・・・わずかなダメージすら与えられたとは考え難い。

ゴン太とのクロスフュージョンでも大きなダメージを与えられると思えない！ ならばそれに第三電波変換を加えて攻撃か？）

「スバル、前だ！」

不意に耳に響いたウォーロックの声に前を見ると巨大電波アーマーの左手の指先の第三間接から前が手から離れてこちらに接近している。

それはワイヤーのような堅そうな糸、もちろん極太の物でつながっており、それを通して操作しているだろう。

数は指の数である五本。

攻撃の対象は、スバル、ゴン太、ジャック、暁、ミカゲ。

指先だからってデコピンなんてシヨボい攻撃ではない。

仮にデコピンだとしても致命傷確実な大きさ、一メートルほど。もはや人間の体を野球のバットのようにフルスイングで使うような物だ。

それがかなりの速度で迫ってきた。

反応は出来ても回避が出来ないほどの速さだ。

ゴン太はそれを理解したのか、すぐに叫んだ。

「星の民の名において命ずる！ 力を解放せよ！」

能力で強化された身体能力でギリギリ受け流せたがダメージは受けたようだ。

ジャックは炎で少しの間、時間を稼いでその隙に回避できた。

暁は剣とブースターの推進力でどうにか受け流したが腕に相当のダメージを受けてしまった。

残る二つの鉄の塊はスバルとミカゲに迫っていた。

ミカゲは剣を、セツナの残した剣を取り出した。
それは真紅に輝く刀身を持つ両刃片手剣。

それをミカゲは両手で握りしめると、襲いかかってきた鉄の塊に向かって思いっきり振り下ろした。

もちろん女の子の小さく、華奢な腕で受け止めきれはるはずがない。
ミカゲの体はあつという間にWAXAの建物まで押し込まれ、さらに押し込んでいく。

「あうっ、うあああっ！」

建物と鉄の塊でサンドイッチの具のようになり、圧迫されて押しつぶされそうになってしまう。

それを見たスバルは思わずミカゲに向かって走り出していた。
ほかの物は見えていない。

迫りくる鉄の塊すら、気づけないほど。

鉄に感情などない。

ただ、スバルに鉄の一撃を与えるだけに、高速でスバルに襲いかかる。

再び、鉄の塊に気づいた時には、五メートルもなかった。
普段のスバルなら、的確に対処できたはずだった。

だが、押しつぶされそうになり、悲鳴をあげるミカゲと敵の攻撃で負傷したみんなを見て、セツナを失ったスバルには、何も見えてい

なかった。

ギィィィイン！ と鉄が激突した音が戦場に響きわたった。

ミカゲも、その音に気づいた時には、目を見開いていた。

スツ、とミカゲが握りしめ、鉄の塊と押しあっていた刀身を、誰かが押した。

「ミカゲ、なに一人でハッスルしてんだ？」

押された刀身はみるみる鉄の塊をまるでバターを切るように裂いていき、つながっているコードまで引きちぎった。

「スバルくんも、だよ」

「チッ」

スバルに迫っていた鉄の塊は横に吹っ飛んでいった。

スバルは、見覚えのあるボロボロのマントと漆黒の体に、驚きを隠せなかった。

ミカゲとスバルの前に現れたのは、アラタとツカサに、

「
フォル
テ！
？」

第92話 フォルテの介入（前書き）

投稿が遅れてしまいました。

これからの続きを考えるため今後もしばらくのろのろ更新になりそうなんです。

第92話 フォルテの介入

フォルテは驚きの余りに口をパクパクさせているスバルを変質者を見ているような目で睨みつけると、

「おまえが今回の“アレ”だというなら、力を貸してやる。ただし、光熱斗とエグゼのような可能性を見せてみる」と、スバルに告げてきた。

一方のスバルはこの状況で戦場に飛び込む以前に何故ここにいる、という疑問と協力という二大疑問と脳内格闘中。

フォルテは確実に迫ってきている巨大電波アーマーを睨みつける。忌々しそくに、憎たらしそくに。

「やはり、二百年後の世界では敵の内容も強さも酷く進化している。おそらく、今のおまえには第四電波変換を使ってどうにかなるか程度だな」

「でも・・・第四電波変換はまったく制御できないんだよ・・・」

スバルは第四電波変換の時、あの時の自分の怒りの感情に飲み込まれるような、その感覚に鳥肌を感じながら答えると、

「チッ・・・二百年たってもこっちは進歩がないのか」

と、フォルテに一瞥され、軽く傷ついた。

「一人でできないのだろう？」

「うん、まったく」

そこを聞くと少し失望したかのようにため息をつかれて、スバルはさらに傷ついた。

その後、フォルテは驚きの一言を、スバルに言った。

「言っただろ、力を貸してやる。」と

スバルは目が点になった。

ドッキリかと疑った。

アラタとかが『ドッキリ大成功!』の看板を掲げていつものニヤニヤ顔を見せびらかすのかと思ってアラタに速攻で振り返った。

アラタはミカゲと一緒に逃げていた、自分たちへ遠のくように。それではドッキリではない？

「何を考えている？」

そう言つてフォルテは缶ジュースでも掴むように首を掴まれ、持ち上げられることによつて現実世界へご帰宅。

「俺とクロスフュージョンしてから第四電波変換しろ。俺がある程度は制御してや・・・ん？ どうした？」

「く、首・・・しまつ・・・て、い・・・」

その意味を理解したのか首を潰しそうなほど強く握つて持ち上げていた（フォルテの力が強すぎたため）手を離すとスバルはアスファルトの地面に力無く沈んでいった。

どうにか息を整えるとスバルは立ち上がり、

「協力、してほしい」
と右手を差し出した。

「スバル！ 待て、罨かもしれないぞ！」

ウォーロックが叫び散らすがスバルはもう揺らぐ気はなかった。

「僕は、今のフォルテを信頼したい」

「覚悟は決まつたな」

フォルテの宣告にうなずくと、フォルテはその差し出された手を握つた。

「クロスフュージョン」

光が二人を包み込み、戦場に一つの希望が沸き上がる。

「第四電波変換！ 星河スバル！ オンエア！」

光から吹き出してきた物は、真紅の爆炎。

それらがまるで自分の意志でも持っているかのように動く。
竜巻のようになって、光を包んでいく。

「エターナルフェニックスモード」

轟！ と包んでいた炎が吹っ飛ぶと新たな炎が現れ、それがまるで不死鳥の翼を思わせるような形になり、五メートルほどまで一対の灼熱の翼になった。

スバルは驚きと歓喜に震えていた。

第三電波変換を越えるほどの、圧倒的な力が自分の物になったのだ。いつものように、自由に動く。

『いけ。あのデカブツを消し飛ばせ』

フォルテの声に答えるように、背中の翼が羽ばたいた。

もちろん、目標は巨大電波アーマー。

「データカクニン・・・フメイ、イレギュラーカクニン。カク
ニーーー」

スバルはすでに巨大電波アーマーの顔の前にいた。
ついでに右手を大きく振り上げていた。

その拳には、ドロドロのマグマが凝縮されたような物が、覆われていた。

所詮は機械だ。

必ず沸点がある。

スバルはマグマのボクシンググローブを叩きつけた。

巨大電波アーマーは左手を盾にしようと、スバルの目の前に出した。
だが。

「そんなもの」

スバルは左手を無視して左腕の付け根の間接部分に手刀を振り下ろす。

触れた部分が飴細工のようにひしゃげていき、左腕そのものがドロドロの液体のような金属に成り果てる。

いける。

第三電波変換では通用しなかった一撃が、第四電波変換なら、こんなに簡単にできてしまう。

自分は、力を、手に入れたんだ。

それが、たまらなくうれしかった。

もう、誰も傷つかない。

もう、誰も失わない。

もう、誰も救える。

みんな、助けることができる！

スバルは、もう一度、灼熱に燃える拳を敵に叩き込む。
だが。

「・・・ッ!？」

スバルの第四電波変換、フォルテとのクロスフュージョン、すべて
がかいじょされていた。

「ここまでエグゼと光熱斗と一緒になのか!? 忌々しい因果だ!」
そうフォルテが吐き捨てる。スバルの頭をがつつりと掴んで一気に
距離をとる。

「エグゼエ! 近くにいますらでてこい!」

フォルテの叫びが炸裂するとエグゼがどこからか現れてきた。

「火を操る能力者はいるのか?」

「ジャックがそれだ。だが、今のスバルにはまだ無理だ」

そこまで聞くとフォルテは苛立ち混じりにスバルに振り返る。

「星河スバル。電撃関係の能力者はいるか？」

スバルはツカサに指指す。

「なら、勝ちだ」

フォルテのその言葉にスバルは振り返る。

その答えを聞くために。

「ツカサとその他電撃を使えるヤツにできるかぎり、限界まで溜めた電撃を敵に発射、電撃による機械のショート、電気抵抗による熱で体中を溶かせ」

ここまでの確なご説明。

それはこの作戦を前に使った、もしくはこの作戦を狙っていたような的確さ。

以前、セツナが大胆な作戦を命令した時もこんな驚きがあった。

だが。

「僕らにはツカサくん以外に電気使いがいません」

そつ、僕らの中には彼しかいない。

だが、それすらも見切っていたようにフォルテは不敵に笑みを浮かべる。

「電気なら風からでも発生できる。さらに炎も効くのだから炎でも攻撃させればいい」

と付け加えてフォルテはボロボロのマントを翻して前に飛び出した。

「ゴン太、暁は俺の指示に従って敵の足止め。スバルとミカゲはツカサを援護しつつ電気エネルギーを増加、ツカサはここ周囲の全ての電気エネルギーを収束して敵にぶつける。作戦はシンプルだ」

フォルテは戦陣を切って走り出していく。

その後にゴン太と暁がドタバタとついていく。

「スバル、空気を操って圧縮しろ。簡単に言えばプラズマを発生させられる」

スバルは第三電波変換を行うと突風を吹き荒らした。

フォルテに言われるままに空気を圧縮、少しずつプラズマを形成していく。

ミカゲはエレキエシエントになり、周囲に放電していく。

「ゴン太！ 暁！ 二人で膝を攻撃しろ！」

フォルテが指示したと同時に二人が膝に攻撃、ダメージは与えられないがバランスが崩れていく。

「ツカサ、あとどのぐらいでチャージが完了する！？」

「あと一分・・・」

その言葉にフォルテが歯噛みする。

予定より時間があつたのかと思われるが余裕が顔に戻っていく。

そのまま、フォルテが時間を潰していく。

一分ごときの時間稼ぎ、フォルテにとっては一瞬に等しい。

ツカサの体を覆うように帯電して、次第に大きくなっていく

「静電気からミカゲやスバルくんの発生させた電気にWAXAの電気供給！ これで戦いは終わりだよ！」

直後、巨大な電気が、まるで雷が落ちたような強大なイナズマが巨大電波アーマーを地に沈めた。

第93話 初号と秘密と秘密

「^{ミカゲ}僕を強くさせてよ！」

あの戦闘が終わってWAXAのシステムが完全回復したあと（ツカサが巨大電波アーマーを倒すため、WAXAの全電気を使ったために全システムが停止することになってしまった）からスバルとミカゲのみ、ずっとこの調子なのだ。

そう、二人のみ。

巨大電波アーマーを撃墜したツカサは星の民の能力の使いすぎで体力不足で風邪のような状態になってしまっていた。
ようするにダウンした。

ゴン太や暁にジャックは戦闘による怪我で病室で寝ている。
特に暁がダメージが高いのだが、致命的ではない。

そう、残った人物はアラタと戦闘に参加なかったランドの二人。
その二人以外は動けない状態に等しいのだ。

そんな二人には目的がある。

フルシンクロ。

今は亡き飛螺博士のプランをグリード博士が引継しているそのプランに自分たちの仲間であるクロウがアラタ（二号）より前の初号である確率が非常に高いのだ。

それに仮に初号ではなあとしても彼の身の安全は確認しておきたいし。

そして、今。

「探したぜ」

アラタは一人の少年をしっかりと見て言った。

そのアラタの雰囲気はいつものダラダラしているような、弛んだ糸のような雰囲気ではない。

彼はマジメな時の糸がピンと張ったような、空気からピリピリと、周囲の人の皮膚を焦がすような威圧感。

睨まれた少年も雰囲気とアラタの人間性から理解したのだろう。

「俺なんかになんのようにだ？ アラタ、ランド」

「質問に答えろ・・・フルシンクロについてだ。

まず、おまえは飛螺博士に作られたクローンの初号なのか？

おまえはフルシンクロの上位個体なのか？

おまえはフルシンクロの何を知っている？

そしておまえはフルシンクロの何を握っている！？」

水道管から水が勢いよくドブアツ、と飛び出したような言葉。

それがアラタの気持ちを現れているかのようにだ。

それほど気持ちには焦りや不安があつたのだろう。

だが、

「・・・え？」

クロウはなんだか慌てた様子でオロオロした。

それに対してアラタは更に口調を強く、もはや怒号を炸裂させていく。

「しらばっくれんなよッ！ こっちで調べておまえの名前が出てきたんだよ！」

だがクロウは依然と困惑した様子でいる。

なんだか言葉の歯車がまったく噛み合っていない状態になっている。

アラタはそれを理解すると自分の気持ちを押し殺し、

「何も知らないのか？」

と問いかける。

「そんなこと依然に自分は子供の時の記憶すらないっての」

その言葉にアラタは眉をひそめる。

「どういうことだ？」

「簡単に言えば気がついた時にはキラと一緒にいたんだ。その後
にゲイナーと出会ってから、アリスに出会って保護されてからスバル
に出会ったんだ」

なんだかおかしい内容だが、嘘だとしてもなんだかおかしい。
とにかく謎を一つ一つ説いていこう。

「まず、気がついたらキラといったってそこから説明しろ」

それに対してうなずくとクロウは口を開いた。

「まず記憶喪失っぽいんだよね。記憶は気がついた時にはキラといて、俺たちは謎の事件で住む場所を失ったとキラが言ってた。その事件の保護活動にアリスの家族が動いていて、それで保護された時にゲイナーと出会った。それからアリスに生活を援助されてみんなで学校に通うようになったんだ。その時にスバルに出会った」

と簡潔に説明してくれた。

おそらく、本当だと思うし、信じたい。

とにかくわかったことはクロウが記憶喪失であることぐらいしか。

とにかくクロウ自身は理解していないらしい。

「知らないなら、わるかった。それともう一つ……おまえ自身の周波数がまったく感知できないんだけど」

それにも首を傾げているだけのクロウ。

しかたないからアラタはクロウの肩を触ってみる。

すると微かに独特の周波数がほんの少し、感じ取れた。

謎は深まるばかりだが、とにかくクロウには足りない戦力のために来てもらうしかない。

「あと、今のみんなが負傷しててな、悪いけどWAXAに来てくれない？」

彼は少し迷ったようだったが、

「わかった。キラとゲイナーの搜索は中断するよ」

そこはとあるナイトメアの施設の一室。

中は大きすぎる、スバル家のリビングよりもよっぽど大きな部屋に置かれているのはフカフカそうなイスとソファと机。

それらはすべて一般的ではない、すべて豪華で気品のある物で座ることや触れることを一瞬躊躇わせるほどだ。

そして、二メートル近くの大きさの木の机。

もちろん特別な感じの物でその上になんだか高そうな値段のパソコンがどっかりとのっかっているが机の幅には余りあるほど机がかすぎた。

総合的に言えば、ここは社長室といってもなんの間違いもない。

そこにいる者は二人。

一人は本当に社長のような服装、黒のスーツを着こなしていた三代。

もう一人はピンクの長袖に熊の耳を可愛らしく表現したフード、エメラルドグリーンの瞳、可愛い顔立ちの少女、響ミソラだ。

「グリード博士、私の作戦は・・・」

「許可はもちろんだよ、ミソラちゃん。 だけど・・・敵ながらいいのかい？ あなたはスバルくんたちの仲間。 その君が仲間を・・・」

「いいんです。これが私の道なんです」

その言葉を聞くと隣の男が笑い始める。

「こっちはあと少しだ、グリッド。今回の作戦で成功されればこっちは準備完了。そっちの試験も出来るな」

「作戦指揮は響ミソラ。動員される部隊はそちらで決めてくれ。一国を攻め落とせるぐらいの戦力は用意できる。グロ、ベイサイドシティを拠点とするらしいからまずはそっちに戦力を送っておく」

グロ、そう言われた男は不敵に笑う。

ミソラはそんな男を見捨てるように部屋を出ていく。

「グロさん、準備を開始します」

（そう、この作戦で今度こそみんなを、スバルくんを・・・）

第94話 それぞれの向かう先（前書き）

とりあえず大ざっぱにストーリーの制作完了！

あとは気合いぐらいか・・・

とりあえずのろのろ更新しません。

第94話 それぞれの向かう先

ベイサイドシティの地下のとある広い土地。

そこには何千という兵がザワザワと騒いでいる。

そこに、ミソラが堂々と立ち上がると、

「聞け！ 全部隊、作戦内容を伝達する。内容は星河スバルを始めとするサテラポリスのエース部隊、データを確認して。それらを捕獲、捕虜としてナイトメアに引き込む。各部隊の隊長を中心に包囲、そのまま敵意を排除か戦闘能力を排除を優先せよ。以上です」

そこまでしっかりと言い切るとミソラはその場を立ち去る。

今回の作戦で、すべてを終わらせるため、準備と策はすべて持ち込むため。

そこは宇宙の地球の近くで風船みたいにふわふわと浮かんでいるのは、フレンとリオンのアジド的な構造物（あくまで宇宙を想定）がある。

「どおーするよお？　　ったく、フレン」

そのとある一室、中はふつうの小学生のような内容、テレビにパソコンにゲームにマンガにジュースに飲み物が転がっている。

そこに置かれたベッドに体を投げだし、ぐーたらしているのはリオン。

一方で大型機械とハンターと謎の装置を巧みに扱うのは、フレン。

「待ってください。 でないと宇宙のどこかにポイ捨てしますよ?」

軽く脅迫のようなことをされて渋々と黙るリオンにため息を吐きながら各機器の操作卓を叩いていく。

ここところはずっとここで機械をいじっているだけ。

そんな中、フレンのハンターに電話が来た。

フレンはすぐさま電話に出る。

『フレン、ナイトメアが動き出した。 目標はまだわからないがWAXAの破壊にはおかしすぎる内容の部隊だ。 とにかくおまえらはスバルたちのところに行け』

「雑務う?」

「グチらないで、リオン。 とにかく向かいます」

その言葉に少々安心したように、
『わかった。 指示は連絡する。 ここからリーダーなどで戦略を考えて通達する』

その言葉に久々に機械から解放されたフレンと久々にベッドの上でグータラしていたリオン、二人の思いは正反対ながらも地球に向かってあるきだす。

これで、役者はそろった。

第95話 作戦開始

草むらの中に身を潜める三つの陰。

ガサガサと何かと草の擦れる音が小さく鳴る。

「うるさい。 息を殺せよ」

「そう言う声がうるさい！」

「大声だすなよお」

と、緊張感はゼロな感じだが、彼らにとっては緊張感マックスである。

なんだか宿題を忘れてしまった時みたいな、先生の怒りの目を向けられたみたいになっているのは、アラタ、ランド、クロウ。

三人は同じタイミングでため息をついた後、同じタイミングで空を見上げる。

鉛色の空にアリの大群のように黒い点のようなものが見える。

もちろん、空にアリはいない。

その代わりとして、電波アーマーが空をアリの大群のように進んでいる。

正直言つて、冗談ではすまされないレベルの桁であり、バカ正直に戦ったらスタミナ切れで袋叩き。

まず発見されたら、この世とさようなら。

三人はあの鉄の大群を見た瞬間、顔を見合わせると草ヘレッツゴー！
となり、様子を見ている。

あの大群はスバルたちのいるWAXAに向かっているはずだ。

そうなるといくらなんでも施設も人も、スバルたちだってヤバイ。

そんな時、アラタのハンターに電話がかかってきた。

「みんな、がんばっていけばなんとかなるはずだよ！」

スバルはロックバスターで敵を破壊しながらみんなを励ます。

だが、スバルもここでWAXAを防衛できそうにない、とわかって

いる。

それでも諦めたら、それまでだと理解している。

今はスバル、ミカゲ、フォルテ、さらに怪我をしたゴン太、ジャック、暁、意識が回復したツカサまでどうにか参戦しても完全に不利な状況は揺るがない。

「みんな、がんばっていけばなんとかなるはずだよ！」

スバルはロックバスターで敵を破壊しながらみんなを励ます。

だが、スバルもここでWAXAを防衛できそうにない、とわかつている。

それでも諦めたら、それまでだと理解している。

今はスバル、ミカゲ、フォルテ、さらに怪我をしたゴン太、ジャック、暁、意識が回復したツカサまでどうにか参戦しても完全に不利な状況は揺るがない。

「うりゃあああああ！」

今まで遠距離からの攻撃が基本だったミカゲは剣を使つての近距離での戦いに変え、だいぶうまく使えてきていた。

スバルもミカゲを援護するようにロックバスターを打ちまくる。

「ショックノート」

唐突に、音符が一斉にスバルに降り注ぐ。

「この攻撃は！」

スバルは反射的に第三電波変換、スターダストモードになると風の壁で音符を消し飛ばす。

「ミソラちゃん・・・だね」

スバルはウェーブロードに立つ彼女を見る。

さらに彼女の周りにルナ、キザマロ、ゲイナー、キラ、アクセルが

現れる。

「作戦どおりに、スバルたちを捕獲する！」

ミソラの号令と同時に敵がWAXAなどを無視して一斉にスバルたちに迫る。

「みんな！ 逃げるんだ！ 目標は・・・僕たちだッー！！！！！」

第96話 止まる、残された手段

スバルたちはウェーブロードを乗り移ってWAXAから遠のいていくように飛んでいく。

背後からは攻撃がウェーブロードにぶつかり、その余波がスバルたちに伝わり、焦りに拍手がかかる。

操られたみんなだけでも勝てるかわからないのにさらにWAXAどころかニホンが制圧できちゃうんじゃないかって疑うぐらいの超大群がたった数人の小学生に迫ってきているのだ。そんなのが今、自分たちに迫っているのだから冗談ではすまされない。

そんな訳で逃げるしかない状態にほんの数分前から追い込まれてしまった。

「何をしている」

唐突に響いた声にスバルは振り向いた瞬間、紫に輝く拳が敵に飛来して直撃した。

この技、知っている。

「ブライ！」

そこには孤高の戦士、ブライが立っていた。

「これはどういうことだ。この軍勢、圧倒的な量で何をする気だ

「？」

「知らないよ！ てか、僕らを狙ってるらしいけど・・・とにかく逃げるよ！」

スバルはブライの手首を引っ張ると一緒に走らせた。

だが、

「ここまでだよ」

ミソラたちがスバルたちの周囲を円陣を作るように包囲してきた。

スバルは周囲を見て、打開策を考えるしかないが隙間もないかと思うほどの敵の量に冷や汗が垂れる。

その時、唐突にスバルたちとその周囲、すべての敵の動きが止まった。

その時、唐突にスバルたちとその周囲、すべての敵の動きが止まった。

「はあっ・・・はあ・・・キツイ」

草むらに倒れる姿でアラタは息を荒く、弱々しくして呟いた。

「ア・・・ラタ？」

スバルが問いかけた時、アラタは疲労困憊の様子だった。

そして驚いた様子の仲間たちが周囲を見渡していた。

疲労したアラタ、変わった風景、近くにいるみんな。
おそらくアラタが空間移動したのだろう。

「どうしたの？ その疲労？」

すると息絶え絶えに、

「能力の応用、自分から円状に自分以外の時間を停止させる。その代わり、自分の周囲にのみ、自分を中心として発動される。発動している間、発動範囲の物は動けない、自分は自由に動けるけど・
・能力のエネルギー消費が異常なんだ」と丁寧に説明してくれた。

ここにはランドやクロウまでいる。

きつと、止めながら空間転移を使ったからこんなに疲労したのだと思う。

きつと、止めながら空間転移を使ったからこんなに疲労したのだと思う。

だが、アラタのおかげで状況は打開された。

これからどうすれば、とスバルは頭を捻らせる。

「ショックノート」

草むらを消し飛ばすように、音符が地面に激突する。

「こういう時は、みんな！ 一斉に周囲にちらばれえ！」

スバルたちはそれぞれ全く違う方角に走り出していく。

もはや、スバルたちには打つ手が無いことを示していた。

第97話 謎の指揮官と敵の指揮官

ミソラはとある山の一角をにらんでいた。

『キザマロ隊、こちらツカサ、ランドを追撃中』

『こちら白金ルナ。 命令を』

『ゲイナー隊、キラ隊、共同でアラタ、クロウを包囲』

様々な連絡を即座に聞き分けると瞬時に命令を出していく。

「ルナ隊は私の隊と共に山を包囲、作戦はあのネットワークを通して伝える」

もう、逃げられはしない。

スバルは逃げている途中で合流したゴン太、ジャック、それとはじめからついてきたフォルテと協力しながら近くの山の横穴に隠れていた。

「な、なんでこんな大群が僕らなんかに・・・」

「おまえらは自分たちの価値がわかってない。その証拠に外にいる敵軍だ」

するとウォロックがハンターから飛び出して、

「うれしいんだか、かなしいんだか・・・」

とため息をつくと続いてみんなため息をついた。

しばらくしても、状況は良い方向に転がるわけではない。

むしろ悪い方向に、

その時だった。

「ん？　なんか変な音が・・・」

ゴン太が呟いた言葉に、耳に神経を集中させる。

右からは、ゴゴゴ・・・とまるで地盤工事のようなことをしてるみたいだ。

左は、ドドド・・・と滝のような音が聞こえてきた。

「まずい！ 水攻めにしてあぶり出す気だ！」

ジャックの言葉にギョツとするがもう遅い。

時は流れるほど水も流れる。

そして、追いつめられていく。

つまり、簡単に説明すれば。

左右から敵の手が来て、逃げ場を失った。

圧倒的な危機感にスバルたちの心臓が飛び出しそうになった。

そんな時、スバルのハンターに電話がかかってきた。

うああっ！ と今度こそスバルの心臓が飛び出した。

フォルテはなさけないスバルにため息をついて電話に出るように促した。

「誰なの？」

『そんなことはどうでもいい。 生き残りたくないのか？』

生き残りたくないのか？　という言葉がスバルの胸に嫌に刺さる。

「どうすればいい？」

『まずは状況を説明しろ』

スバルは現状を簡潔に伝えたと、

『おそらく水でどちらかに流れていくようになっていいる。　おそらく二手ごとに部隊がわかれている。　さらに残りが山を包囲している。　上を一気に突き破って意表を突いていけ』

この指示に従うなら、第四電波変換。前回では約一分も保てない最終手段。

「スバル、考えていることは大丈夫だ」

フォルテが一步前に出て、宣言した。

「偶然ながらここにはゴン太とジャックがいる。　体へのダメージ量と炎の制御、この四人でクロスフュージョンすれば活動可能時間は格段に上昇する」

そこまでいうとみんなの目の色が変わった。

「クロスフュージョン」

直後、地面を浸食する水が一瞬で干上がった。

スバルたちは気づかれないように山の山頂にたどりついた。

『よし、第一条件はクリアされた。次は水などのバトルカードで

山崩れを起こして左右の戦力を潰せ』

スバルは言われたとおりに左右に攻撃して濁流を起こして敵に流していく。

『ここは木を一本、スケボーのように使って地上の隊を倒してから空中部隊に奇襲』

スバルは濁流で流されていく木に乗ると一気に駆け下り、戦力の減少した残党を燃やした。

『空を見る。上空に戦力が集中している場所があるはずだ。そこにはおそらく指揮官がいるはずだ』

スバルは空を見渡すと、明らかに敵が固まった場所があった。それが、指揮をしている場所なのだろう。

「どうすればいい？」

『奇襲をかけるからには指揮官とその周辺、そして増援の到着を遅れさせるために出来るだけ周辺の攻撃を優先。その後、指揮官を即座に攻撃させて沈黙させる』

その指示からして広範囲攻撃がいいだろう。

スバルは炎のエネルギーを凝縮して、

「アトミック・・・フレア！」

広範囲に熱線を放射した。

もちろん、電波アーマーたちは飴細工のようにひしゃげた姿に変わり、地面にまっさかさまに落ちていく。

『よし、そのまま飛び上がり残存勢力を粉碎するんだ』

スバルは地面を思いっきり蹴り上げると一気に翼を広げて空に舞い上がった。

「アトミックフレア！」

残存勢力のほとんども消却して、そして指揮官に突っ込む。そして、炎をため込み、手を突き出し、

「アトミック・・・フレ・・・」

突然、スバルの体がピクツと動いた後に、止まった。

「ミソラちゃん・・・委員長・・・」

スバルが止まった時、スバルの時間が止まって、敵は動いていく。

指揮官を守る敵が、武器を構えてスバルに襲いかかる。

「・・・やらせるか！」「」

スバルの意識がはつきりした時、スバルの目に映っていたのは、

腹元の辺りを刃に貫かれた、ゴン太、ジャック、フォルテの惨たらしい姿。

そして、驚くスバルをルナがバトルカード、ロングソードで胸元をザックリと斬り裂いた。

溢れ出すなんて気にならなかった。

ただ、みんなが。

「ショックノート」

ミソラの追撃にスバルが地面に落ちていく。

だが、体の痛みはなかった。

ただ、ただ。

だらん、とだらしく空に揺らいでいく手にわずかに力が宿った。

そこから体中に行き渡る、何かの力。

スバルの体に、一つの感情が芽生えた。

「第五電波変換・・・星河スバル、オンエア・・・」

直後、雷電がすべてを飲み込んだ。

第98話 第五電波変換の威力

『アラ、ランド……どうし……ガガイ……ギ……』

通信が途切れてしまった。

「なんなんだよ……フレンたちは何かわかるか？」

アラタの問いかけにフレンも首を傾げる。

「俺たちだってえー。おまえらを助けるために大気圏を突破してまで来てやっただけ、あの雷撃は知らん」

リオンが不機嫌そうにグチるとウェーブロードと周辺の地面を見る。

突然、天地がひっくり返るかと思うほどの雷が僕らやその周辺に落ちてその影響で直撃しなかった電波アーマーの機能やら敵には大打撃、だが威力余ってウェーブロードがうまく形状を保てないほど。

それは電撃の威力の大きさを証明している。

普通ならありえないほどにウェーブロードに何かが干渉して、ウェーブロードは触れただけでガラスのように砕け散る。
さらに復旧作業が一切こない。

なんだかやばそうだと、思いながら、空を見た。

鉛色の雷雲が一点に集まるのを睨みながら。

「
.
.
.
」

アラタ、ランド、クロウ、それとさつき助けてくれたフレンとリオンは雷の落ちた先にたどり着いて、絶句した。

そこはすべてがなぎ払われた元戦場。

すべてを、一撃で粉碎された場。

そこで、見たものは、気絶したミソラとルナ。

さらに血塗れのゴン太とジャックとフォルテの痛々しい姿。

何が起きたのかは理解できないが、ほかの状況にも理解できない状況がある。

ブライが電波障壁で電撃を防いでいる。

スバルの攻撃を。

だが、正確なのはわからない。

攻撃は明らかにスバルの体からだ、電撃はスバルの体から全範囲に放出されている。

たった一人の敵の倒すには余りにも非効率的な攻撃で、まず、スバルの目の焦点が一切定まっていない。

さらに体制は猫背になり、力無く立ち尽くしている。口も微かに動くだけでまったく周りが見えていない。

ぶつちやけ暴走している。

「ん？ おまえら！ スバルを止める！」

「何？」

「理由はわからないがスバルがさっきから雷を落としている。最初の雷みたいになったらタダじゃすまない！」
最

確かに、最初の雷は相当遠くのヤツらまで影響があつた。

ようするに、ヤバい。

「スバル！ おい、敵は撤退したぞ」

だが、スバルは応答しない。

ただ、立ち尽くすだけでうんともすんとも反応がない。

ただ、放電していくのみ。

バチバチ、そんな音の体から出しながら、立ち尽くすだけ。

「お、おい・・・スー・・・」

その時だった。

空から雷撃の槍が、スバルの体に落ちた。

「いい！？」

だが、スバルは相変わらず、立ち尽くす。
まるで植物人間。

だが、電撃の威力が抜群に跳ね上がった。

ブライが威力のあまり、吹っ飛ばされ、アラタたちのところまで押し飛ばされる。

そして、電撃はアラタたちまで攻撃範囲として襲いかかる。

「リオン！」

「フレンりょーかい！ 星の民の名において命ずる！ 力を解放せよ！」

突然、電撃が向きを変えた。

そして次々と別の対象に曲がっていくが、

「この量をすべて制御はキツイ！」
と徐々に制御が甘くなる。

そして、電撃がついに制御を逃れて迫る。

こちらには、打つ手がない。

何ボルトかはわからないが、ヤバい。

だが、

「電気なら、相性がいいね」

どこからかツカサが飛び出して、電撃をすべて制御した。

状況は、少し良い方向に進み始めた。

スバルを止めれば、戦いは完全に停止する。

第98話 第五電波変換の威力（後書き）

ほんと、相性最悪ですよね。

電撃を生み出す敵と電撃を制御する力。

ポケモンとかなら迷わずポケモン交代！
それか逃げる！

第99話 瞳の中に広がる世界には

ツカサが電波変換してジェニミスパークになると同時に戦える人すべてが電波変換する。

スバルは一応、ロックマンの姿だが高んたか黒っぽく見えるがそれすらまばゆい光を放つ電撃がスバルの姿を隠すようだった。

さつきから電撃は威力を抑えられたが、十メートル近く放電を続けている。

バチン！ と音を立てながら、みんなをスバルへ近づかせないように。

ツカサとヒカルはエレキソードを構え、走り出す。

スバルにはもはや何も見えていないのだろうか。

電撃が、スバルから、空から放たれていく。

だが、ツカサは電気を操る能力。

すべての電撃はどこかにそれていく。

「スバルくん！ 止まって！」

エレキソードはスバルの後頭部に向かって、振り下ろされる。

だが、

「・・・っ」

直後、スバルの体からドーム型衝撃波のような電撃が、ツカサたちをはじき飛ばした。

あきらかに電撃の威力とスピードが上がってる。

反応できない一撃ではツカサの能力も使えない。
不意打ちでも、早さはヤバかった。

今度はアラタとブライ、フレンにリオンまで突撃を仕掛ける。

ツカサとヒカルはなんとかスバルの発する線状の電撃の雨を屈曲させて距離を積み、アラタたちも確実に、迫る。

だが、無情にもドーム状の電撃がバリアのようになり、ツカサとヒカルははじき飛ばされた。

それでも、

「電波障壁ッ」

苦虫を噛み殺すような声で、ブライはドーム状電撃を抑え込む。

その隙にフレンが能力でドーム状電撃を消滅させていく。
放出される電撃、消滅していく電撃。
わずかな力の差からドームが一部崩れていく。

そして、崩れた一部分の隙間にリオン、アラタの順番に突っ込む。

だが、ドームが消えても線状の電撃は止まる勢いはまったくなかつ

た。

そこまで読み切っていた。

「星の民の名において命ずる！ 力を解放せよ！」

リオンが電撃を左右に屈曲させてスバルへの道を作り上げた。

（スバルを止めるだけなら・・・ソの音素、第五音素でー！ーッ！）

ギターに、手をかけ、掻きならすとソの音が響き、

それをかき消すように、天空からの雷が、音符を、すべてを消し飛ばした。

アラタはとっさにリオンの肩に触って、クロウの元に転移した。

「ソロ！ フレン！」

クロウが叫んだときには、二人は地面に力無く横に倒れていた。そして、ツカサとヒカルは、わずかに体を動かすぐらいしかできていない。

おそらく能力で電気をある程度誘導したのだろう。

が、このままでは彼らの二の舞だ。

アラタは必死に考えた。

どうすればとめられるかを。

自分の能力でスバルに近づいてもあつという間に消し炭になりかねない。

時間を止めてもスバルの暴走は止まらない。
その場しのぎになるかどうかすら疑問だ。

リオンの力でも、きつそうだ。

近距離は落雷とドーム状のビリビリ。
遠距離は無数の電撃の槍の雨。

そんな時だった。

「アラタ、リオン。 スバルを止めれそうな力がある。 試してみる？」

今、そんなことを言われたら迷わずイエスと叫ぶしか選択手がなかった。

「じゃ、決まりだね。 これやるとしばらく起きないから」

クロウは両目を閉じて、手で覆るとまるで何かを横に強引にはぎ取るような動きをすると、

クロウの瞳は青白く輝いた。

その瞳を凝視すると瞳の中にウェーブロードが無数に広がる光景のように見える。

「単体電波変換」

クロウは静かに、封印をとき放った。

第99話 瞳の中に広がる世界には（後書き）

次回はこの瞳の変化となんか単体電波変換しちゃったクロウががんばります！

てか、この小説のキャラクターたちはスバル以外、力を出し惜しみしすぎじゃね？

命よりも秘密優先！

惜しみすぎて死なないように祈るばかり。

第100話 人の数だけ能力者？（前書き）

とりあえず本文のアレについては後書きに詳しく書きます

第100話 人の数だけ能力者？

「あーあ、クロウくんはいつのまに単体電波変換可能だと気づいたんだろ？」

グリードはなんとなく悔しそうにつぶやいていた。

グリードは以前、飛螺博士のサポートを面白半分にしていた。

そして飛螺博士のプランに、興味を持った。

まずは実験体として今で言うシャドウ、彼の製作を手伝った。

フルシンクロの正体はそこで初めて知って、興味は爆発的に伸びていった。

そして、シャドウから取ったデータから改良されて作られたクロイン。

クロウを生成した。

だが、欠陥があり、予定が大きく動いた。

もう一つのプランのため、フルシンクロのために作られたのは二人目のクローン体、アラタ。

だが、アラタではもう一つのプランしか使えなかった。

そして、プランの進行の最終に、彼は死んだ。

だが、プランは生きていた。

生き残ったプランはグリードが引き継いだ。

彼はその後、プランのすべてを研究した末、わかった。

人間のみですべてをするのではなく、別の物に頼れば可能なのではないか。

まずフルシンクロとは、脳内に特殊な改造をして脳波を同調させて瞬時にやりとりが可能にさせる、まるでメールのようなシステムだ。そして、サーバーのような役割をクロウやアラタにやらせるのが飛螺博士の予定だった。

でもそのサーバーがダメなら無理。なのだがグリードは何かに補助させてサーバーを無理矢理させることにした。

でも、壁ができていた。

クロウはとある人物に強奪されていた。

アラタはナイトメア生徒の力を借りて組織から脱走した。

だが、代役は作った。

そしてこのフルシンクロにはある特典がついてくる。

それは、このフルシンクロでつながった人にフルシンクロでつながった星の民の能力まで共有されてしまうのだ。

そう、星の民の能力は個々で持っている物だけ。
だが、このシステムならサーバーを通してすべてのフルシンクロとリンクした人間に使われる。

とは言っても脳内改造されてその能力との相性で一つだけ使えるし、本来の性能より遙かに低いが。

飛螺博士は前にグリードにこう言った。

『これなら、守るべきものを、守る力を与えられる』

すべての人間に脳内を強引にイジってできるが、例外が二人。

脳波のベースになった二人。

クロウとアラタ。

彼らのみこのネットワークに強引に介入できる。
さらに元はそのメインサーバーのために作られたため、リンクした

能力が自由にできる。

それは、星の民の力をリンクしたメインサーバーと、例外だけ使われる。

そう、今回のスバルたちの捕獲のため、フルシンクロした人間は計り知れない。

もし、すべての力を使いこなせたらどうなる？

飛螺博士は“アラタネットワーク”と名付けた。

理由はアラタの星の民の能力が有効だから。

そして、クロウにはフルシンクロの為の単体電波変換を準備していた。

その状態では、ネットワークその物が耐えられないほど、制御に問題が。

クロウの姿はあつと言う間に変わった。

ウィザードとの電波変換ではカラスをイメージさせるような形態だが、なんだかそれとは別な感じだ。

翼は漆黒、だが、そこが見えないほどの深い穴に見えるその大空を
掴むような大きさ。

なんとも例えがたいその特徴的な翼ともう一つ、右手に装着されて
いる物がある。

それは鳥の爪のような鎌に近い形状の金色の刃物が手の甲に付けら
れている。

（さあて。 ついさっきの誰かの電話のとおり単体電波変換できち
やった・・・あの電話どおりなら、今だからできるはず！）

クロウは翼を広げて、刃物を構えた。

第100話 人の数だけ能力者？（後書き）

このアラタネットワークとは脳内を改造して人と人でネットワークを作るシステムです。

で、ネットワークにリンクさせるために脳内をイジるのです。

この時にリンクした人間にある能力との相性が良いなら能力が使えます。（炎を操るなど）が、オリジナルより威力激減。

そしてリアルタイムで電話を頭の中でするかのように脳内通信が可能。

なんですがクロウとアラタはこのネットワークに出入りが可能でリンクした人間の能力を使える。

ぐらいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7014i/>

流星のロックマン 星の民の宿命

2010年10月8日16時11分発行